

須玖尾花町遺跡

福岡県春日市大和町所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第51集



(1) 調査区全景 (反転前)



(2) 8号溝出土銅鏃



(3) 1号住居跡出土銅矛鏃型



(4) 8号溝出土銅矛鏃型



(5) ガラス管玉

序

春日市は玄界灘に面した福岡平野の南奥に位置する都市で、住環境に優れていることから、昭和40年代以降、福岡都市圏のベッドタウンとして目ざましい発展をしてきました。また、市内には多くの遺跡が存在し、都市化の進展にともなって重要な遺跡が次々に発掘調査され、度々、全国的に脚光を浴びてまいりました。

特に近年は、弥生時代の青銅器生産に関係する多くの遺跡が発見され、国内有数の青銅器生産地として知られるようになりました。このように重要な成果があがる一方で、すでに消滅した遺跡も多くあります。現在、市内の開発に際しては、綿密な事前審査や確認調査を行い、文化財保護に努めております。こうした中で特に重要な遺跡については、国・県・市の指定史跡として整備・保存を進めているところです。

今回、本書に報告する須玖尾花町遺跡は、弥生時代の福岡平野に栄えた奴国の中心である須玖遺跡群の一角に位置し、奴国の栄華を物語る青銅器生産に関わる資料が数多く出土しました。

本報告書が研究資料として活用され、広汎な人々の文化財理解を深め、市民にとって郷土の歴史を見直すための一助となれば幸いです。

なお、発掘調査から本報告書の作成に際して、ご協力・ご指導を賜りました多くの方々に、深く感謝の意を表します。

平成20年3月31日

春日市教育委員会

教育長 山本直俊

例 言

- 1 本書は春日市教育委員会が平成4年度に発掘調査を行った、須玖尾花町遺跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査は集合住宅の建設に伴い、事業者の依頼を受けて春日市教育委員会が実施した。
- 3 遺構の実測は平田定幸、中村昇平、吉田佳広、篠原浩之（現・朝倉市文化課）が行い、図面の整理ならびに浄書は池田由紀、須崎葉津子、牧平佳恵が行った。
- 4 遺物の実測は吉田、境靖紀、吉田浩之、岸本真美、坂本陽子、早瀬知美、末田敬子、吉富千春が行い、浄書は吉田、末田、吉富が分担して行った。
- 5 遺構写真は吉田が、全景写真は壇陸夫（有限会社空中写真企画）が、遺物写真は岡紀久夫（文化財写真工房）が撮影した。
- 6 本書に使用した地形図は国土地理院発行の1/25000地形図『福岡南部』である。
- 7 本書挿図に使用した方位は当時の磁北であり、真北との偏差はN6° 20′ Wである。
- 8 本書の執筆・編集は吉田が行った。
- 9 出土した遺物、本書に掲載した図面、写真は春日市奴国の丘歴史資料館にて保管している。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の組織	1
II	位置と環境	2
III	遺跡の調査	6
1	調査の概要	6
2	遺構	9
①	竪穴住居跡	9
②	掘立柱建物跡	11
③	土壌	13
④	溝状遺構	13
⑤	水田関連遺構	15
3	遺物	18
①	土器・土製品	18
②	石器	38
③	木製品	47
④	装身具	48
⑤	青銅器	48
⑥	鑄造関連遺物	48
IV	まとめ	55

図 版 目 次

- 巻頭カラー (1) 調査区全景 (反転前)
(2) 8号溝出土銅鏃
(3) 1号住居跡出土銅矛鑄型
(4) 8号溝出土銅矛鑄型
(5) 遺構検出時出土ガラス管玉
- 図版1 - (1) 調査区全景 (反転前)
- (2) 表土除去時溝状遺構検出状況 (北から)
- 図版2 - (1) 1号住居跡 (北から)
- (2) 1号住居跡完掘状況 (北から)
- (3) 1号住居跡P-1柱痕検出状況
- 図版3 - (1) 2号住居跡 (南から)
- (2) 2号住居跡完掘状態 (南から)
- 図版4 - (1) 1号掘立柱建物跡 (北東から)
- (2) 3号掘立柱建物跡 (南から)
- (3) 3号掘立柱建物跡P-3土層断面
- (4) 1号土壇 (北東から)
- 図版5 - (1) 拡張部調査区全景 (西から)
- (2) 拡張部調査区全景 (東から)
- (3) 8号溝埋没状況土層断面 ①
- 図版6 - (1) 8号溝埋没状況土層断面 ②
- (2) 堤状遺構・水田埋没状況土層断面
- (3) 堤状遺構土層断面 ①
- (4) 堤状遺構土層断面 ②
- (5) 堤状遺構土層断面 ③
- 図版7 弥生土器
- 図版8 弥生土器・土製品
- 図版9 須恵器・土師器・瓦・鑄造関連遺物
- 図版10 砥石・石器・ガラス製品・青銅器・木製品

挿 図 目 次

第 1 図	須玖尾花町遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
第 2 図	須玖尾花町遺跡調査位置図 (1/2,500)	4
第 3 図	須玖尾花町遺跡周辺旧地形図	5
第 4 図	須玖尾花町遺跡遺構配置図 (1/100)	7
第 5 図	1号住居跡実測図 (1/60)	9
第 6 図	2号住居跡実測図 (1/60)	10
第 7 図	3号住居跡実測図 (1/60)	10
第 8 図	1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	11
第 9 図	2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	12
第10図	3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	13
第11図	1号土壇断面土層実測図 (1/40)	13
第12図	1～7号溝状遺構配置図 (1/150)	14
第13図	6・7号溝状遺構断面土層実測図 (1/40)	14
第14図	水田関連遺構断面土層実測図 ① (1/40)	16
第15図	水田関連遺構断面土層実測図 ② (1/40)	17
第16図	1～3号住居跡出土土器実測図 (1/4)	19
第17図	1～3号掘立柱建物跡・ピット出土土器実測図 (1/4)	20
第18図	1号溝出土土器実測図 (1/4)	20
第19図	6・7号溝出土土器実測図 ① (1/4)	21
第20図	6・7号溝出土土器実測図 ② (1/3)	22
第21図	7号溝出土古瓦実測図 (1/4)	22
第22図	水田関連遺構出土弥生土器実測図 ① (1/4)	23
第23図	水田関連遺構出土弥生土器実測図 ② (1/4)	24
第24図	水田関連遺構出土弥生土器実測図 ③ (1/4)	25
第25図	水田関連遺構出土弥生土器実測図 ④ (1/4)	26
第26図	水田関連遺構出土弥生土器実測図 ⑤ (1/4)	27
第27図	水田関連遺構出土弥生土器実測図 ⑥ (1/4)	28
第28図	水田関連遺構出土弥生土器実測図 ⑦ (1/4)	29
第29図	水田関連遺構出土弥生土器実測図 ⑧ (1/4)	30
第30図	水田関連遺構出土弥生土器実測図 ⑨ (1/4)	31
第31図	堤状遺構出土弥生土器実測図 ① (1/4)	33

第32図	堤状遺構出土弥生土器実測図 ② (1/4)	34
第33図	遺構検出時出土弥生土器実測図 (1/4)	35
第34図	8号溝検出時出土土師器・須恵器実測図 (1/3)	35
第35図	遺物包含層・遺構検出時出土土器実測図 (1/3)	36
第36図	遺構検出時出土土器実測図 (1/3)	36
第37図	土製品実測図 (1/2)	37
第38図	磨製石器実測図 (1/2)	39
第39図	砥石実測図 ① (1/4・1/2)	40
第40図	砥石実測図 ② (1/2)	41
第41図	砥石実測図 ③ (1/2)	42
第42図	石鏃・打製石器実測図 (1/2)	43
第43図	軽石実測図 (1/2)	44
第44図	木製品実測図 (1/4)	45
第45図	管玉・ガラス小玉実測図 (1/1)	45
第46図	青銅器実測図 (1/2)	45
第47図	石製鋳型実測図 (1/2)	46
第48図	銅矛中子実測図 (1/2)	47
第49図	取瓶実測図 (1/2)	49
第50図	取瓶・轆羽口実測図 (1/2)	50
第51図	銅滓・その他実測図 (1/2)	53
第52図	春日丘陵東部低地における弥生時代の水田域	56

I はじめに

1 調査に至る経過

須玖尾花町遺跡は集合住宅の建設に伴い、事前に発掘調査を実施したものである。平成4年4月、当該地の開発申請があり、埋蔵文化財の状況を確認するために試掘調査を実施した。当地の西側は須玖岡本遺跡をはじめ重要遺跡が密集する春日丘陵の先端部にあたり、近年、周辺から弥生時代の青銅器生産に関わる発見が相次ぎ、特に注意を払ってきた地域である。試掘調査の結果、開発対象地の地形は北に傾斜し、溝や土壙などの遺構を確認した。

春日市教育委員会では開発事業者に対して、文化財保護の措置を講じる必要があることを説明し、協議を行ったところ、快く発掘調査実施の承諾を得た。市教委は平成4年5月28日から8月21日にかけて、事業者の費用負担において今回の開発対象地410㎡の発掘調査を実施し、遺構の記録保存および遺物の回収を行った。

2 調査の組織

発掘調査および整理作業における春日市教育委員会の体制は下記の通りである。

	平成4年度（発掘調査）	平成19年度（整理作業）
総括 春日市教育委員会	教育長 三原 英雄	教育長 山本 直俊
	教育部長 西田 讓	社会教育部長 鬼倉 芳丸
	文化財課長 岩瀬 憲二	文化財課長 古賀 俊光
	文化財係長 鬼倉 芳丸	管理担当係長 渡邊 厚子
	事務主事 北島 公則	事務主査 塩足 雅弘
	” 筒井 清昭	事務主事 北里ひとみ
	技術主査 丸山 康晴	文化財担当係長 丸山 康晴
	” 平田 定幸	技術主査 中村 昇平
	” 中村 昇平	” 吉田 佳広
	技術主任 吉田 佳広	” 森井千賀子
	調査補助員 篠原 浩之	技術主任 境 靖紀
		嘱託 吉田 浩之
		” 長谷部真弓

II 位置と環境

春日市は福岡平野の南奥に位置する。北は福岡市、東に大野城市、西は那珂川町と市境を接している。福岡平野の中央を北流する御笠川と那珂川の中流域から上流にかけては、大小の中・低位の段丘や低台地が形作られ、これらの多くに密集して遺跡が存在する。主なものとしては、北から比恵・那珂の低台地、板付台地、諸岡低台地、臼佐低位段丘、そして春日丘陵などがあげられる。春日丘陵は脊振山系より北に派生して、福岡平野に突き出た低丘陵で、特に遺跡の分布が密なところである。

今回調査された須玖尾花町遺跡は、春日市大和町5丁目5番に所在する。ここは春日丘陵北端の東側斜面裾部に立地し、かつて奴国王墓が発見され、近年は弥生時代随一の青銅器生産地として注目されている須玖岡本遺跡の北東に接する位置である。

古来、福岡平野はいち早く水稲耕作を定着させ、弥生文化を開花させた地域である。以降、先進的な大陸文化受容の窓口として発展してきた。弥生時代早・前期では板付遺跡などに代表される、台地上に環濠を巡らし、周辺で稲作を行っていた集落が確認されているが、この頃はまだ独立性の強い小村落が散在する状況であったと言える。中期になると各集落の統合・拡大化が進行し、大規模な集落が形成されていく。

春日市域では特にこの傾向が顕著で、中期中頃では春日丘陵の北半部のほぼ全域に遺跡が稠密に分布するようになる。奴国最大の有力集団の墓地と想定される須玖岡本遺跡は、丘陵の北端に位置し、その後背地に多くの墓地や集落遺跡が連なっている。大南遺跡など環濠集落として位置付けられるものもあるが、実際にはこれらの遺跡を大きく一まとめに囲う環濠が存在していた可能性が指摘されている。須玖岡本遺跡の奴国王墓に明らかなように、墓制の上でも階層の分離が顕著になったことが認められ、強力な支配体制としての奴国はこの頃に成立し、春日丘陵が奴国の中心地として繁栄を誇るようになったものと考えられる。後期に至ると遺跡の分布は春日丘陵の外側にまで広がるようになる。特に須玖岡本遺跡北方の低地には、須玖唐梨遺跡、須玖永田遺跡、須玖五反田遺跡、須玖黒田遺跡、須玖岡本遺跡（坂本地区）など青銅器生産に関連する遺物を出土する遺跡が目立つようになる。

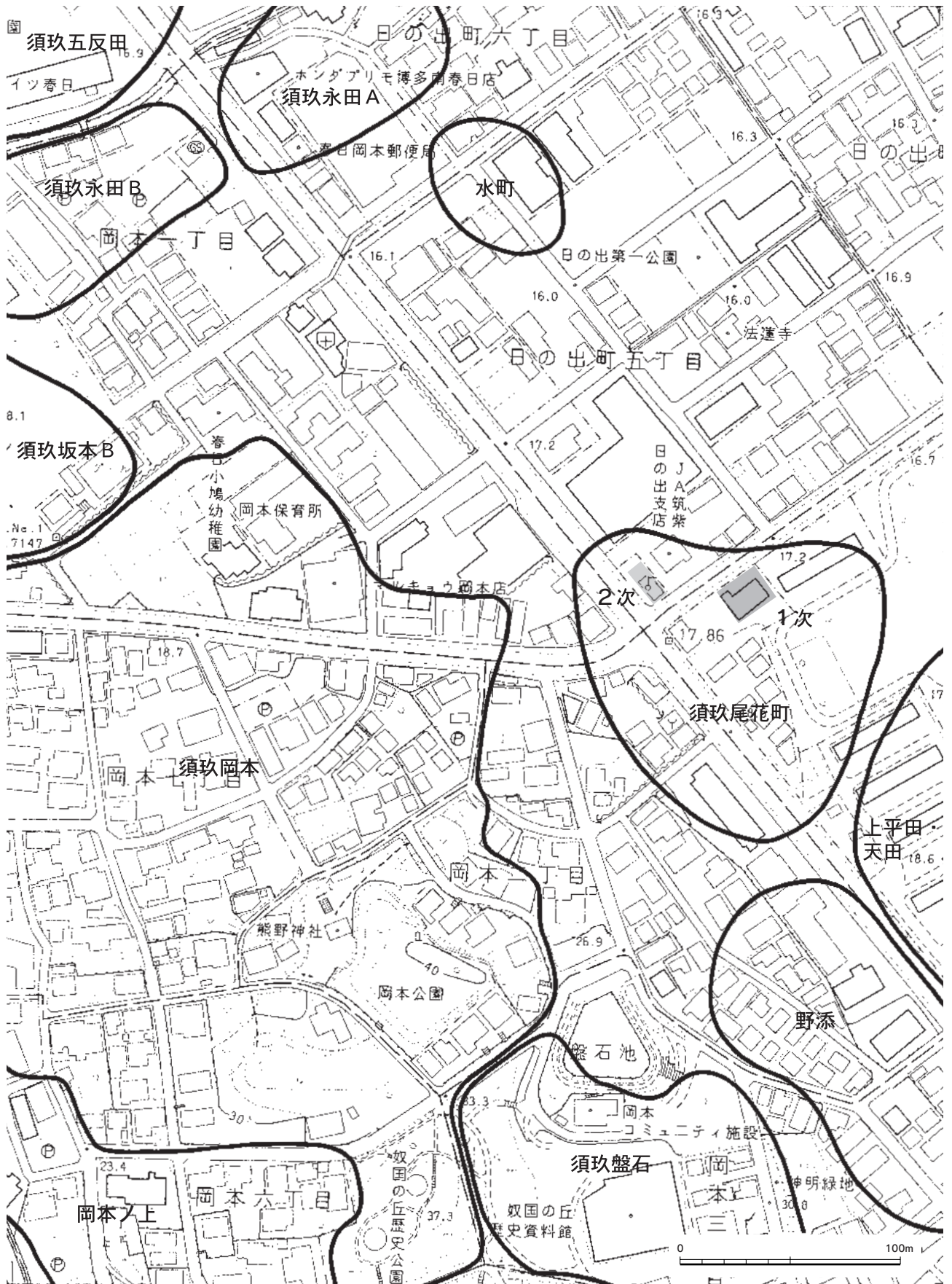
このように弥生時代の中期から後期にかけての春日丘陵は、南は丘陵中部の大谷遺跡から、北は低地にある須玖唐梨遺跡まで、遺跡が間断なく連続する状況が確認される。この南北約2kmにまとまる広大な遺跡群を、須玖岡本遺跡を集団の核とするひとつの政治的・生産的共同体領域と考え、須玖遺跡群または須玖岡本遺跡群と称している。

須玖遺跡群では遅くとも中期後半の段階に青銅器生産、小鍛冶による鉄器の生産をはじめたものと見られる。当初、丘陵上の集落内で行われていた青銅器の生産は、後期中頃から須玖岡本遺跡（坂本地区）を中心とする丘陵北部の低地に集約されはじめ、後期後半には本格的な工房群が形成される。これらは官営工房的な性格を持つものと考えられ、当時としては極めて高度で先端的な技術の独占的確保が、奴国と奴国王の地位を支えていたものと推察される。しかし、古墳時代の幕開けとともに須玖遺跡群の集落は縮小傾向を示し、奴国の中枢は再び平野部の遺跡群へ移動したものと推定される。

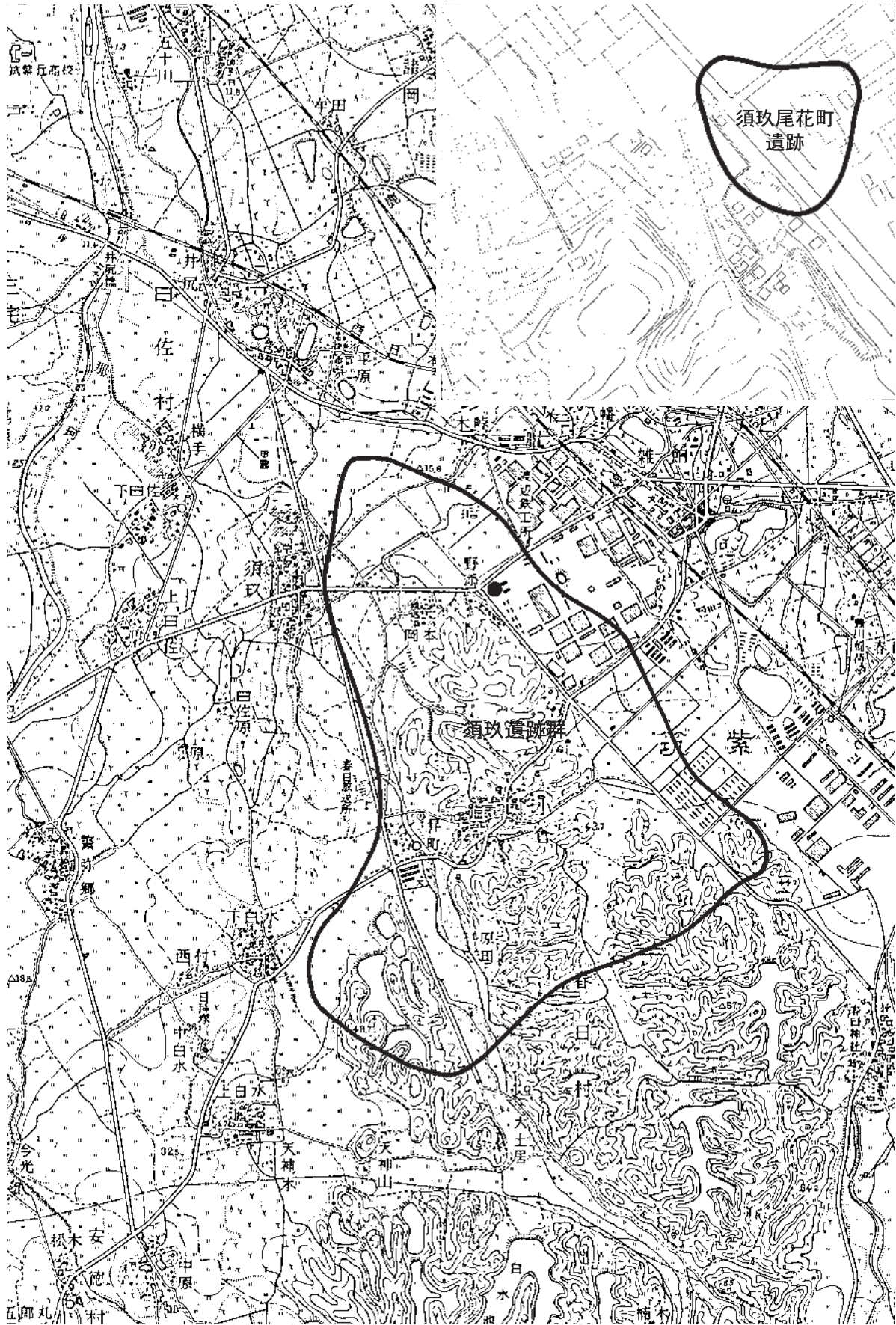


第1図 須玖尾花町遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | | | |
|----------------|-----------|----------|-----------|----------------|----------|
| A 須玖遺跡群 | B 那珂遺跡群 | C 板付遺跡 | D 諸岡B遺跡 | E 五十川遺跡群 | F 井尻B遺跡 |
| G 三筑遺跡 | H 仲島遺跡 | I 南八幡遺跡群 | J 横手遺跡群 | K 寺島遺跡群 | L 臼佐遺跡群 |
| M 弥永原遺跡群 | N 上白水遺跡群 | O 駿河遺跡 | | | |
| 1 須玖唐梨遺跡 | 2 須玖黒田遺跡 | 3 須玖永田遺跡 | 4 須玖五反田遺跡 | 5 須玖岡本遺跡(坂本地区) | |
| 6 須玖岡本遺跡(王墓地点) | 7 須玖尾花町遺跡 | 8 上平田遺跡 | 9 天田遺跡 | 10 平若C遺跡 | 11 赤井手遺跡 |
| 12 竹ヶ本遺跡 | 13 伯玄社遺跡 | 14 豆塚山遺跡 | 15 大南遺跡 | 16 大谷遺跡 | 17 宮の下遺跡 |
| | | | | | 18 一の谷遺跡 |



第2図 須玖尾花町遺跡調査位置図 (1/2,500)



第3図 須玖尾花町遺跡周辺旧地形図（昭和27年発行地形図を元に作成）

Ⅲ 遺跡の調査

1 調査の概要

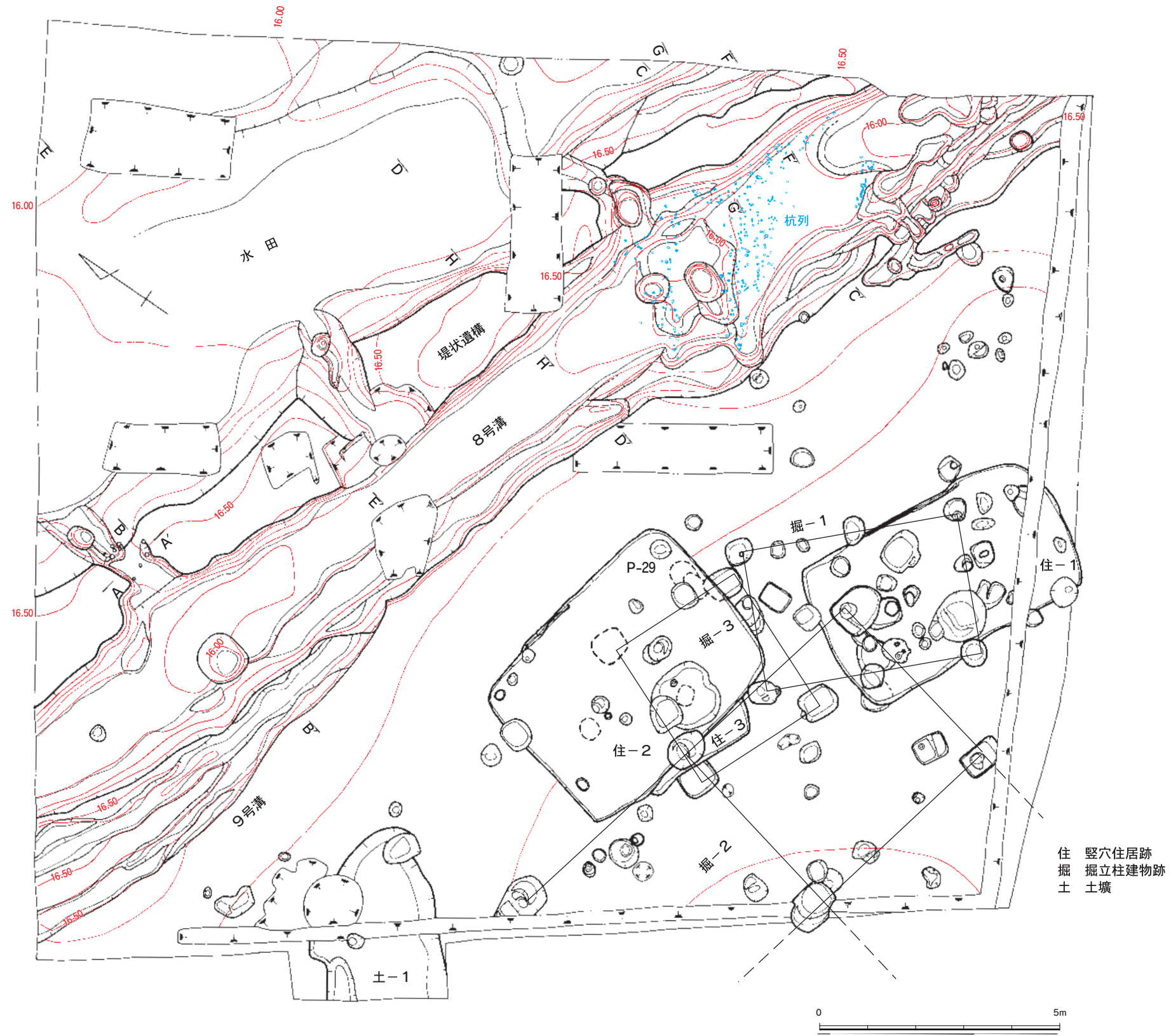
須玖尾花町遺跡は春日丘陵の北端、東側斜面の裾部に立地する。標高は概ね16.7mを測る。これより北方～東方にかけては低湿地となるが、所々にある微かな高まりに弥生時代後期を主体とする遺跡が確認され、そのほとんどから青銅器生産関連遺物が出土している。また、低湿地帯では早期の段階ですでに開田されていた可能性も示唆されている。

発掘調査は平成4年5月28日より開始したが、地下水位が高い時期で常時湧き出る水と、雨天に悩まされながらの調査であった。

遺構検出は重機を用いて60cmほどの客土と宅地化前の水田耕作土を除去。排土の大部分は場外に搬出処分した。調査対象地の北隅1/5程度は反転調査するものとして調査区を設定した。耕作土下には弥生土器や土師器・須恵器、近世の陶磁器片を包含する砂粒の多い黄灰色土（以降は特に断りのない限り、本稿ではこの黄灰色土を遺物包含層と称する）が薄く堆積していた。基本的に遺構はこの遺物包含層下の黄褐色で粘質の基盤層に掘り込まれており、遺構の残存状況から近世以前の開墾によって30～40cmほど基盤層が削平されているものと見られる。また、既存建築物の解体による廃材廃棄坑のため所々遺構が攪乱されている。

発掘調査は最初に攪乱坑を浚い、遺物包含層を切り込む近現代の溝状遺構を発掘。各段階で記録をとりつつ包含層を除去し、古墳時代の遺構、弥生時代の遺構と順次発掘を進めた。8月3日から調査区を反転して対象地北半部の遺構の発掘調査を行い、8月21日に現地における作業を終了した。

今回の調査で検出した遺構は、近代の溝5条と古墳時代の溝状遺構2条、弥生時代の竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡3棟、土壇1基、ピット多数、水田とこれに伴う溝状遺構と堤状遺構である。



第4図 須玖尾花町遺跡遺構配置図 (1/100)

2 遺構

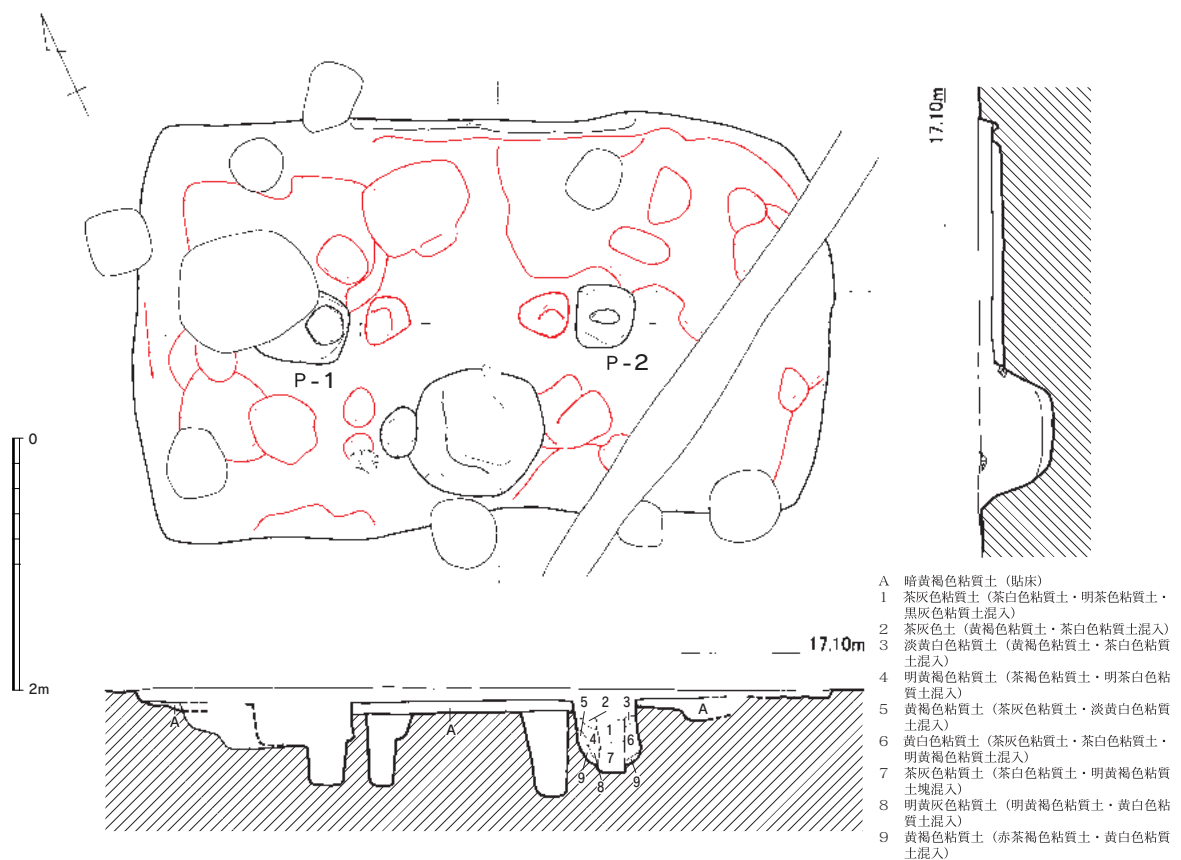
① 竪穴住居跡

1号住居跡（図版2、第5図）

調査区南辺の中央にあり、1号掘立柱建物跡と2号掘立柱建物跡に切られて重複する。長辺約5.5m、短辺3.5mの長方形プランの住居跡で、主柱穴は2個である。主柱穴の内側に一回り小さい柱穴を検出していることから、住居の拡張が行われたことが窺われる。住居南壁中央には屋内土壌が存在する。炉址は検出できなかった。遺構検出面から床面までの深さは13cm程度で遺構の保存状態はあまり良くない。床面は貼床状になっており、これを除去すると深さ10cm程で不定形な掘りくぼみが確認された。その掘方は挿図の朱線で表している。床面直上の覆土には炭化物や焼土が目立っていた。遺物は中期末から後期初頭の土器が多く、銅矛と考えられる鋳型片2点と青銅器鋳型の破片と見られる石材（石英-長石斑岩）が5点出土した。

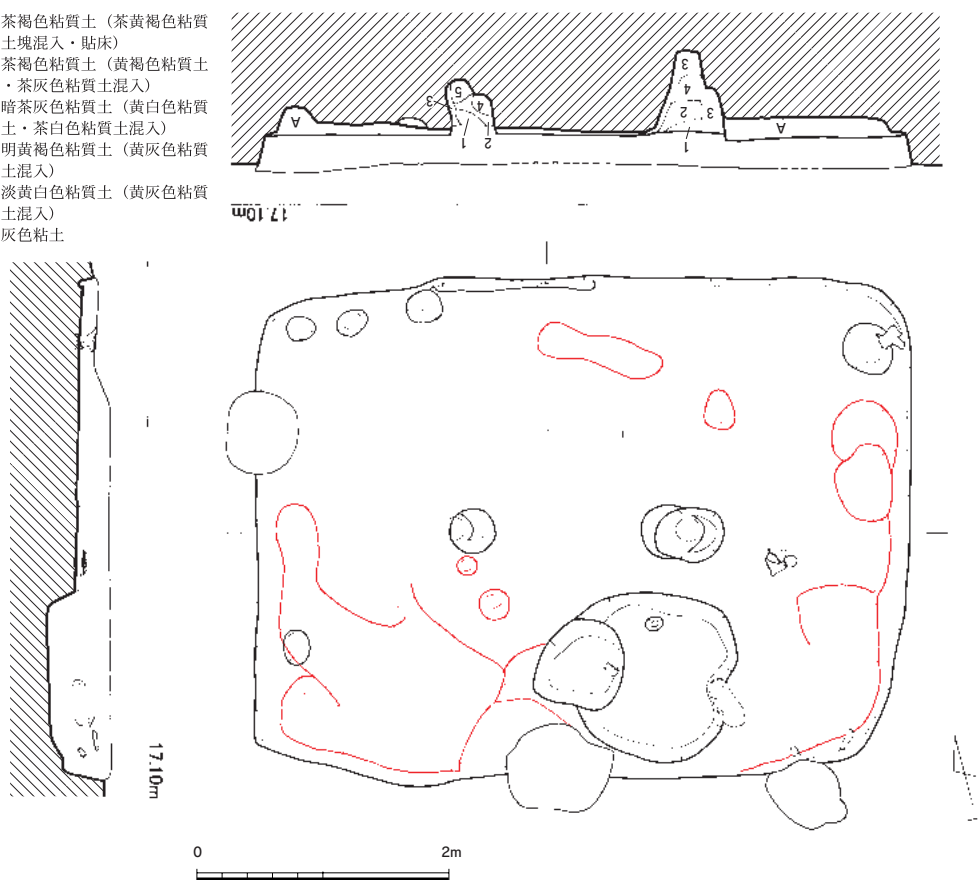
2号住居跡（図版3、第6図）

前述の1号住居跡の北西に約1.5m離れて検出した。遺構の重複関係では3号住居跡と3号掘立柱建物跡を切るが、2号掘立柱建物跡に切られる。主柱穴は2個、約5×4mの長方形プランを有する

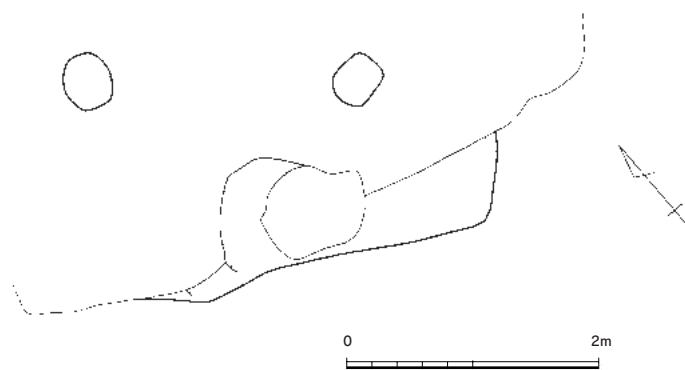


第5図 1号住居跡実測図（1/60）

- A 茶褐色粘質土（茶黄褐色粘質土塊混入・貼床）
- 1 茶褐色粘質土（黄褐色粘質土・茶灰色粘質土混入）
- 2 暗茶灰色粘質土（黄白色粘質土・茶白色粘質土混入）
- 3 明黄褐色粘質土（黄灰色粘質土混入）
- 4 淡黄白色粘質土（黄灰色粘質土混入）
- 5 灰色粘土



第6図 2号住居跡実測図（1/60）



第7図 3号住居跡実測図（1/60）

後期初頭の住居跡である。1号住居跡と同様に貼床され、住居南壁に屋内土壙を有しており、炉址は存在しない。覆土に炭化物・焼土塊がかなり含まれており、焼失住居と考えられる。取瓶の破片3点と銅矛中子2点など青銅器生産に関わる遺物が出土している。

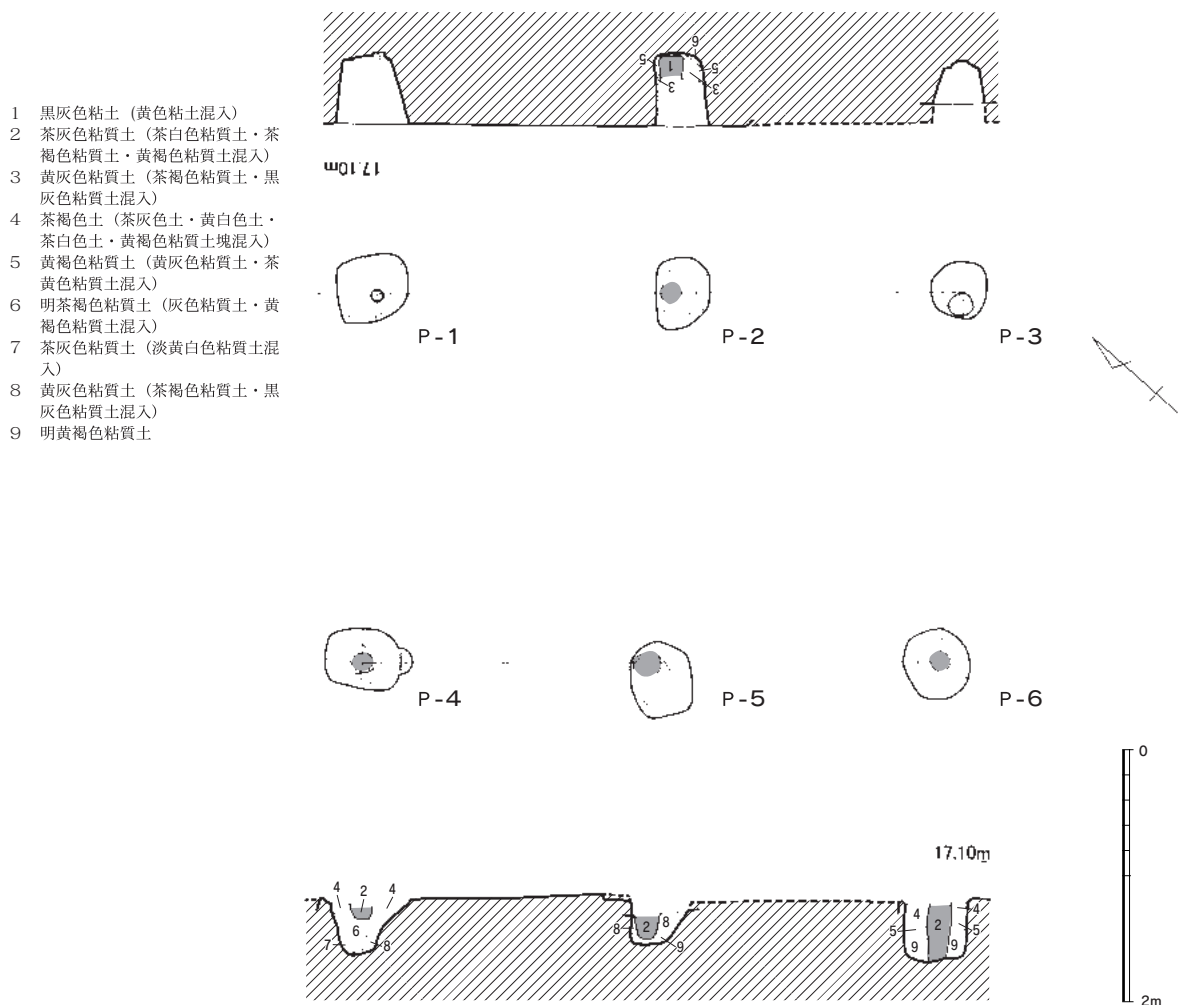
3号住居跡（第7図）

掘方の大半を2号住居跡に切られ、方形あるいは長方形のプランであること以外、規模は明確ではなく、支柱穴も不明である。2号掘立柱建物跡に切られるが、3号掘立柱建物跡を切る。中期末頃の住居跡と考えられる。

② 掘立柱建物跡

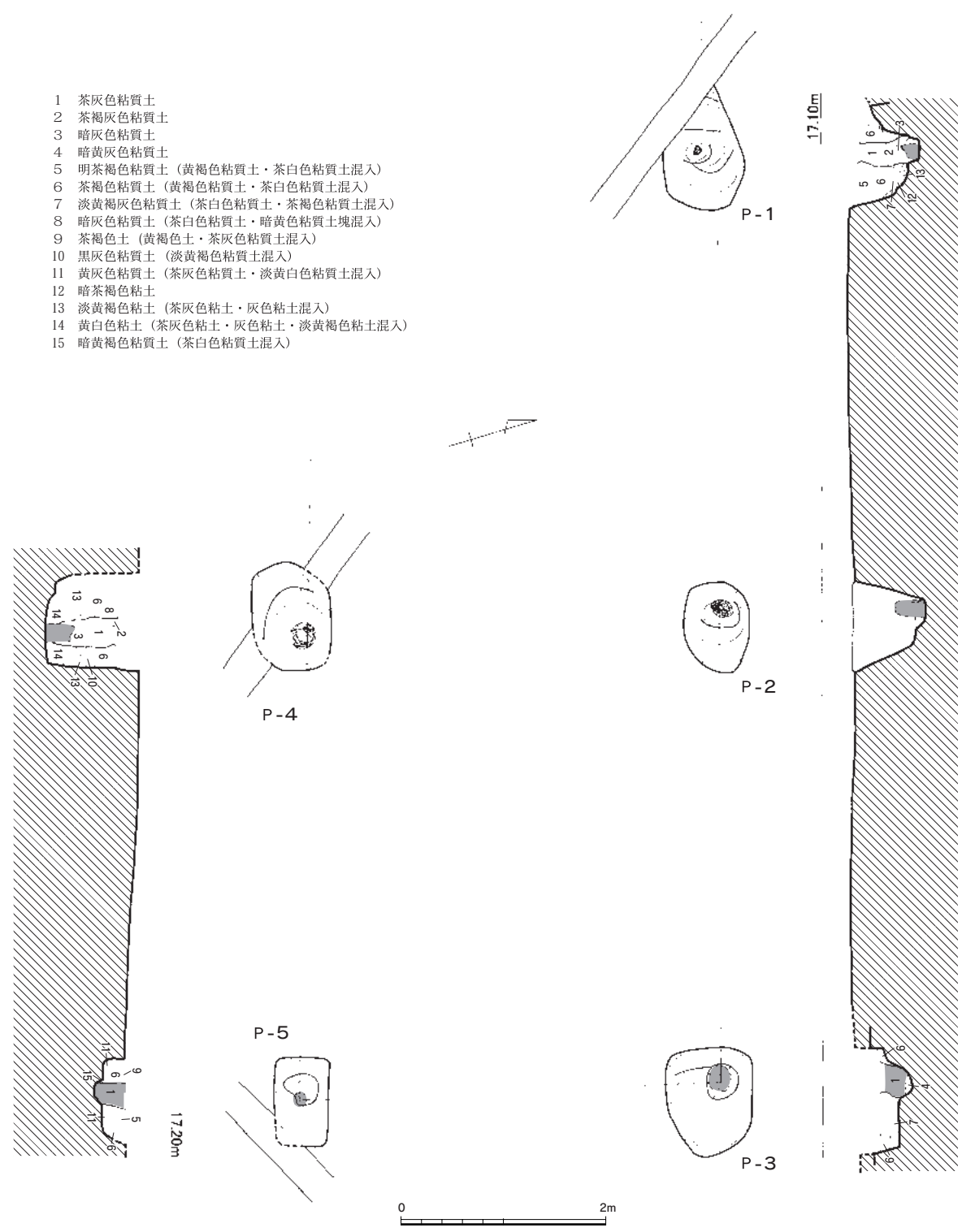
1号掘立柱建物跡（図版4、第8図）

調査区南部に検出した。1号住居跡の西半を切って重複する。桁行2間、梁行1間の建物で、規模は桁行長約4.5m、梁行長約3mを測る。柱穴の掘方はやや不規則であるが、平面形は概ね隅丸方形になるものと考えられる。P-2、P-4、P-5、P-6では直径20cm弱の柱痕を確認した。P-1から取瓶の小片が出土したが、他に図示し得る遺物は出土していない。



第8図 1号掘立柱建物跡実測図（1/60）

- 1 茶灰色粘質土
- 2 茶褐色粘質土
- 3 暗灰色粘質土
- 4 暗黄灰色粘質土
- 5 明茶褐色粘質土 (黄褐色粘質土・茶白色粘質土混入)
- 6 茶褐色粘質土 (黄褐色粘質土・茶白色粘質土混入)
- 7 淡黄褐色粘質土 (茶白色粘質土・茶褐色粘質土混入)
- 8 暗灰色粘質土 (茶白色粘質土・暗黄色粘質土混入)
- 9 茶褐色土 (黄褐色土・茶灰色粘質土混入)
- 10 黒灰色粘質土 (淡黄褐色粘質土混入)
- 11 黄灰色粘質土 (茶灰色粘質土・淡黄白色粘質土混入)
- 12 暗茶褐色粘土
- 13 淡黄褐色粘土 (茶灰色粘土・灰色粘土混入)
- 14 黄白色粘土 (茶灰色粘土・灰色粘土・淡黄褐色粘土混入)
- 15 暗黄褐色粘質土 (茶白色粘質土混入)



第9図 2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

2号掘立柱建物跡 (第9図)

調査区の南隅に1号住居跡、2号住居跡、3号住居跡を切って柱穴5個の配列を検出した。現況では2間×1間、規模にすると約9m×4mとなるが、柱間が長大で平面形も東西に細長くなりすぎる

ように思える。他の掘立柱建物跡に較べ柱穴の規模も一際大きく、この掘立柱建物跡はP-3を北東角にして調査区外に延びていくものと考えられる。P-1、P-4は特に掘方の規模が大きく、P-2、P-4では直径30cmほどの柱根が残っていた。P-1には礎板が敷かれていた。当遺構から図示できる遺物の出土は認められなかった。

3号掘立柱建物跡 (図版4、第10図)

1間×1間の小規模な建物で、約3.5m×3mを測る。2号住居跡、3号住居跡に切られる。柱穴の掘方は隅丸方形である。P-1から取瓶の小片が出土したが、他に図示し得る遺物は出土していない。

③ 土壌

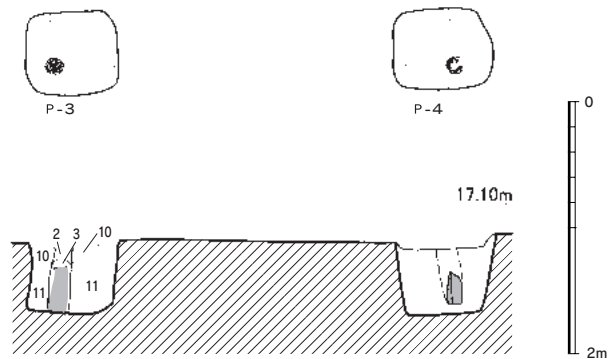
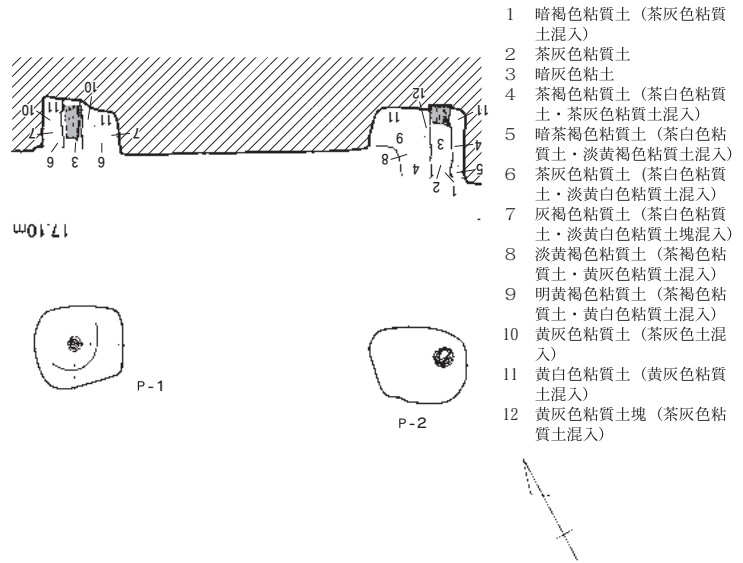
1号土壌 (図版4、第11図)

調査区の西辺中央付近にかかって検出した土壌で、東西方向に長い楕円形を呈すると考えられる。現況での深さ約20cmで、底面は小さな凹凸はあるが概ね平坦である。ほとんど遺物を包含せず、遺構の性格は不明である。

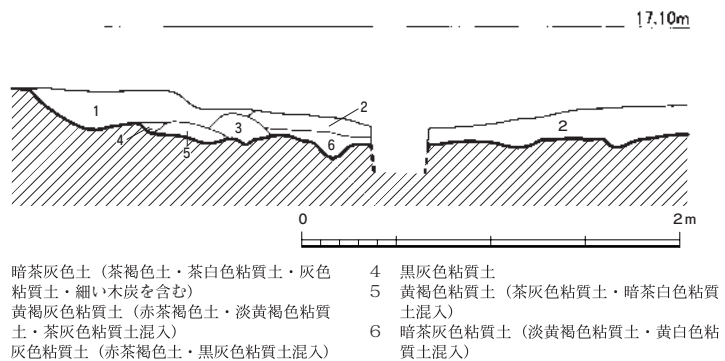
④ 溝状遺構

1～5号溝 (第12図)

調査区を薄く覆っていた弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器を含む砂質の遺物包含層を切り込んで掘られていた深さ約5cmの小溝。直線状の1～4号溝、湾曲する5号溝ともに緩やかに東方に傾いている。出土遺物には近代の磁器などが含まれており、近現代の耕作によるものであろう。

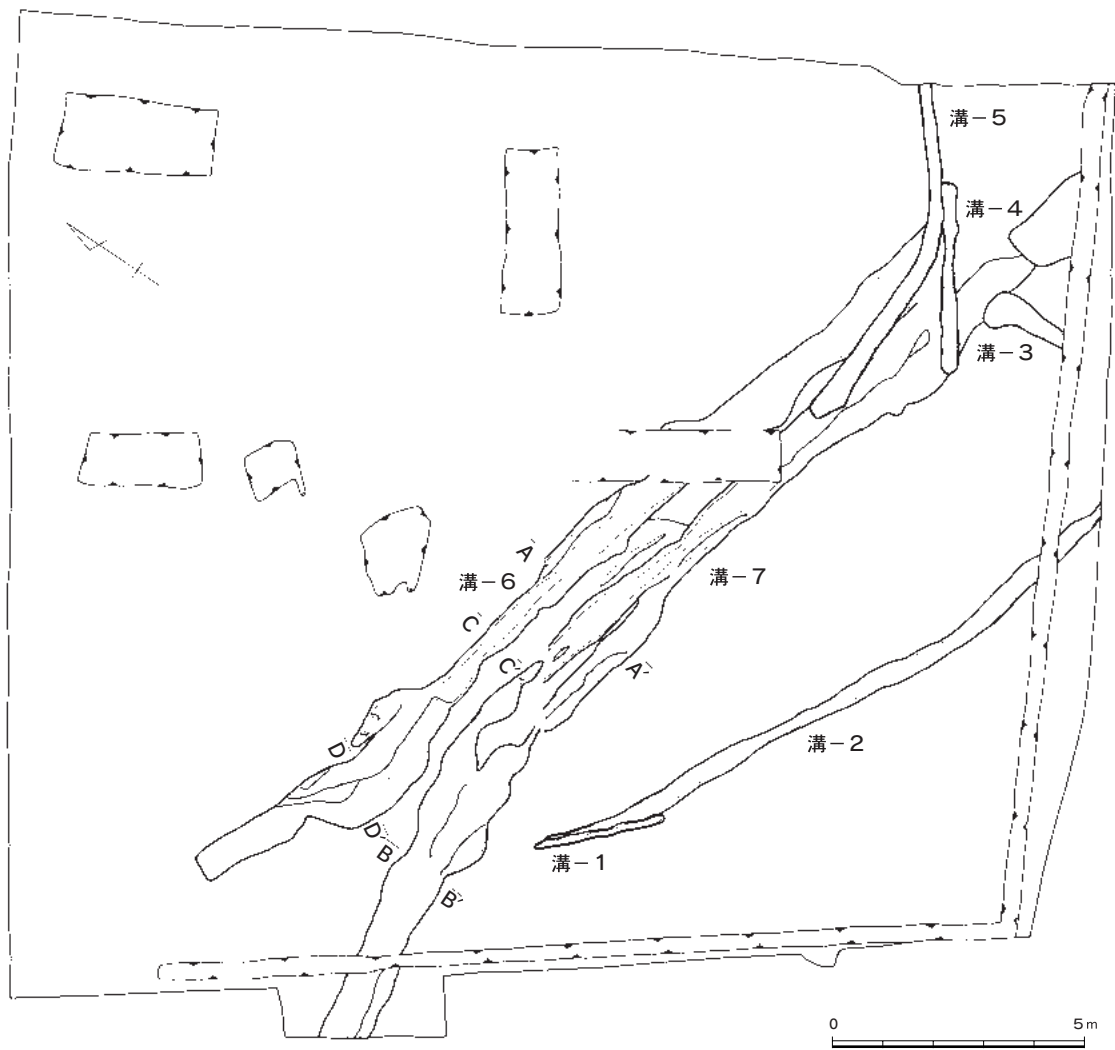


第10図 3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

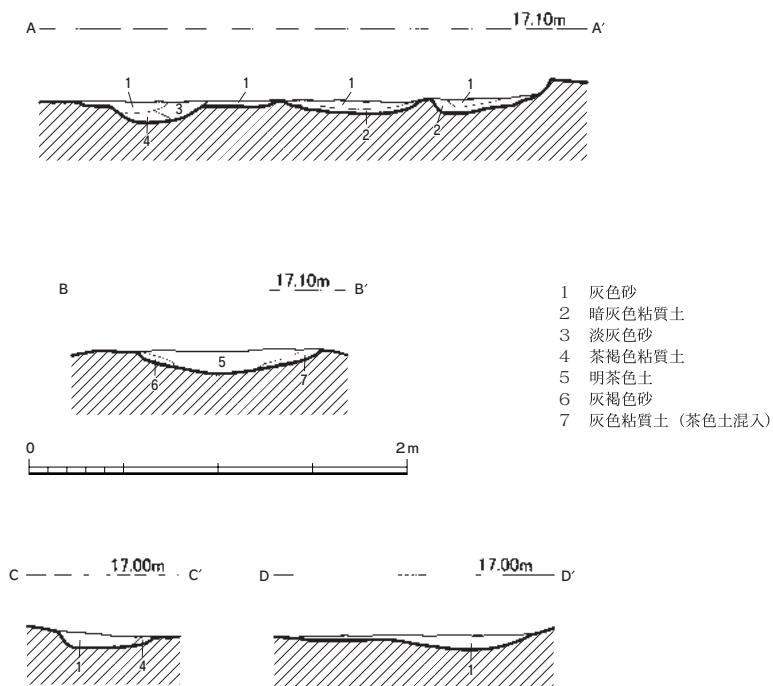


第11図 1号土壌断面土層実測図 (1/40)

- | | |
|-------------------------------------|------------------------------|
| 1 暗茶灰色土 (茶褐色土・茶白色粘質土・灰色粘質土・細い木炭を含む) | 4 黒灰色粘質土 |
| 2 黄褐色粘質土 (赤茶褐色土・淡黄褐色粘質土・茶灰色粘質土混入) | 5 黄褐色粘質土 (茶灰色粘質土・暗茶白色粘質土混入) |
| 3 灰色粘質土 (赤茶褐色土・黒灰色粘質土混入) | 6 暗茶灰色粘質土 (淡黄褐色粘質土・黄白色粘質土混入) |



第12図 1~7号溝状遺構配置図 (1/150)



第13図 6・7号溝状遺構断面土層実測図 (1/40)

6号溝 (第12・13図)

砂質の遺物包含層を除去後に検出した溝である。調査区の対角線上を東西に走る、深さ5～10cmほどの浅い溝で、長さ約19mを検出した。西端は3つに分かれ、掘り直しが行われた様子が看取される。溝底にはほとんど勾配が付いていないが、わずかに西方に傾斜しているようである。出土遺物には弥生時代中期末の土器から奈良時代の須恵器まで含まれるが、いずれも小破片が多い。量的には弥生後期の土器片が多いのだが、古式土師器の出土が目立っている。石製管玉1点が出土した。

7号溝 (第12・13図)

前述の6号溝の南側に平行して検出した。規模・埋没状況ともに同様の溝だが、やや湾曲して調査区の西方へ伸びだし、東端では掘方が不明瞭になり、6号溝と接合しているが、先後関係は明確でできなかった。弥生土器片、古式土師器や須恵器などに混じり、中子や取瓶の小片も出土しているが、4号溝と重複している部分の近くで検出した8世紀頃の平瓦の出土が目を引く。

⑤ 水田関連遺構

水田 (図版5・6、第4・14・15図)

調査区の対角線から北側の地形が落ち込んだ部分は、水田と考えられる。灰色砂と黄褐色砂が重なる洪水砂を除去すると、強グライ化した暗灰色粘質土になり、小畦畔と思われるわずかな立ち上がり認められた。区画を明確には出来なかったが、1枚の幅が約3mの細長い水田と考えられる。出土遺物は摩滅した弥生後期の土器が多い。取瓶や中子なども覆土の洪水砂中から出土している。

8号溝 (図版5・6、第4・14・15図)

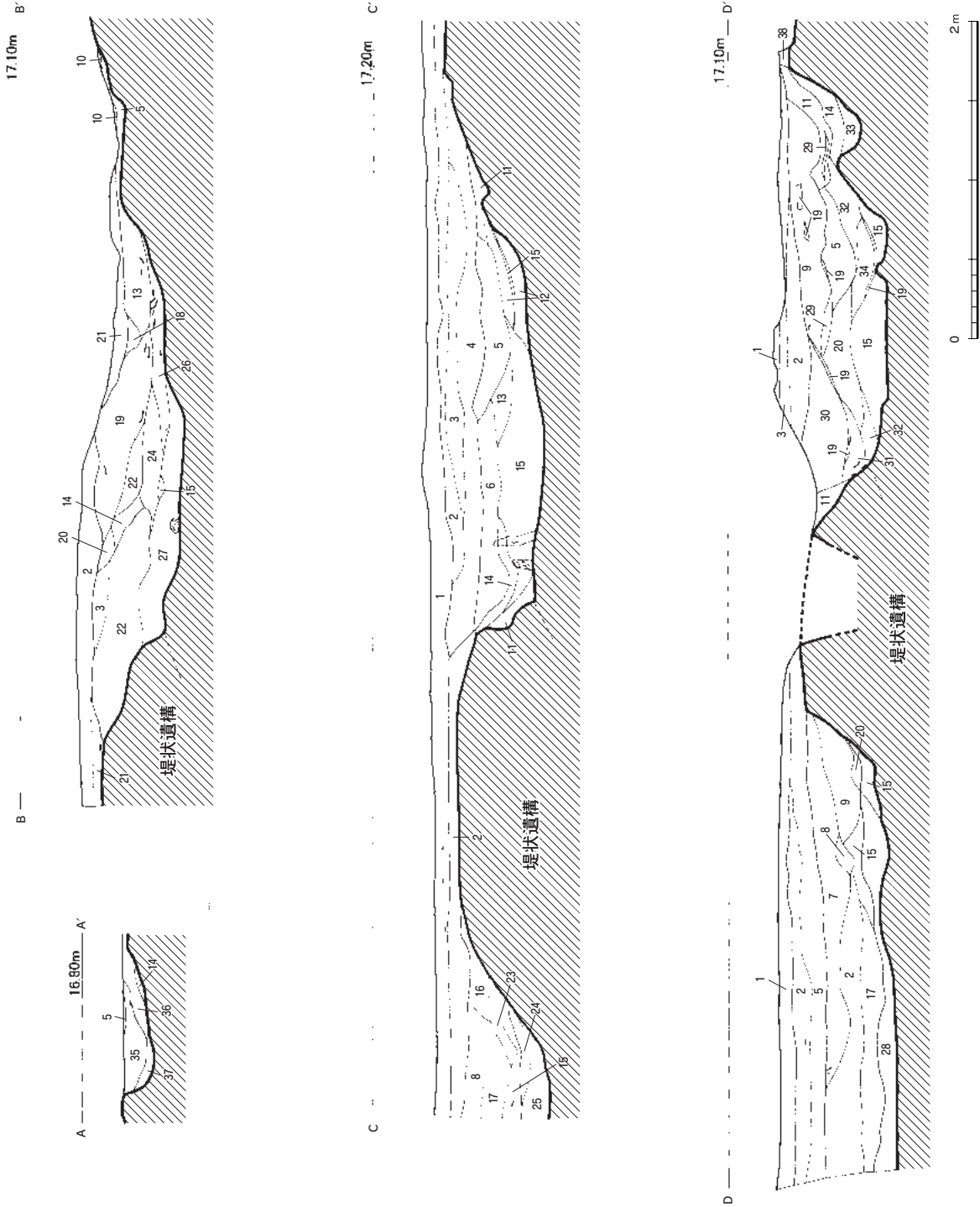
集落と水田の間に掘削された8号溝は、現存で幅約2～3.5m、深さ約60cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、調査区の対角を東西方向に直線的に走る。今回の調査区内では溝底の勾配はほとんど認められないが、平成5年に実施した2次調査の成果から、西に低くなることが判明している。東側には総数280本余りの堰と考えられる杭列を検出した。先を削いだ板材やミカン割にした杭を深く打ち込んでおり、溝の北壁に沿った一群と、溝に対して斜めに配置する2つの群列、少し離れた南壁際に板材を主体として1.2mほどの幅にまとまる一群に配置されている。覆土は黄褐色砂と粘質土ブロックが混じる灰色砂が層をなし、包含される遺物の状況から、この溝は弥生時代後期後半に、水田とほぼ同時期に短期間で埋没したと考えられる。

出土遺物は弥生後期の土器を主体とするが、青銅器鑄造に関わる遺物の出土の多さが注目される。地下水位が高く湛水状態にあったため、鍬、鋤など木質の遺物も残存していた。

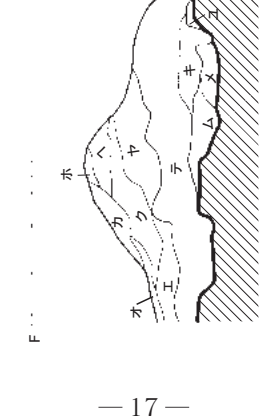
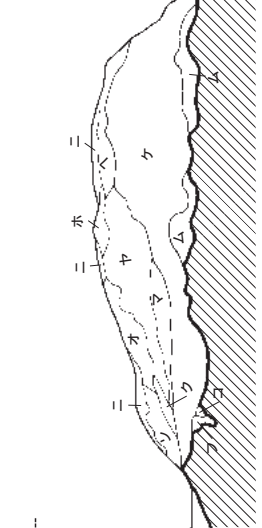
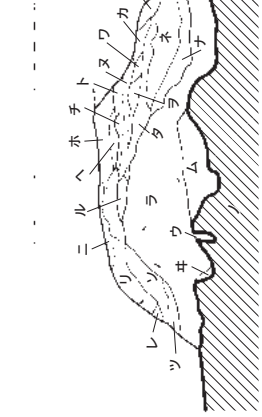
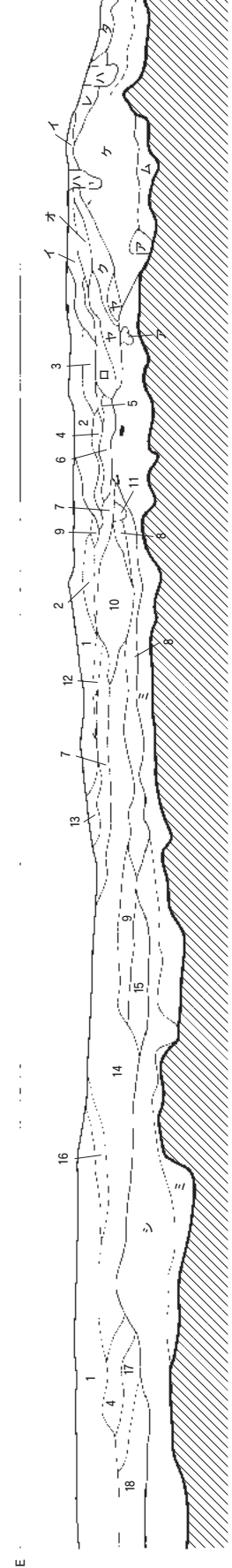
9号溝 (第4図)

8号溝の南西に接続する深さ約10cm、幅約50cmの溝。西側でさらに二又に分かれる。出土遺物は弥生土器の小片のみで図示できるものはない。

- 1 茶色土
- 2 灰色砂質土
- 3 暗灰色砂質土 (糸根状斑鉄)
- 4 暗灰色砂質土 (粗粒)
- 5 淡灰色砂
- 6 明灰色粗砂 (暗灰色粘質土塊混入)
- 7 淡茶灰色砂質土
- 8 茶白色砂
- 9 灰色砂 (細粒)
- 10 灰色粘質土 (砂粒多い)
- 11 暗灰色シルト
- 12 灰色粘質土
- 13 黄灰色砂
- 14 灰色シルト
- 15 黄色砂
- 16 暗茶灰色砂質土
- 17 灰色砂 (灰黑色粘質土混入)
- 18 灰色粘土
- 19 暗灰色粘質土 (糸根状斑鉄が目立つ)
- 20 灰白色細砂
- 20 淡灰色砂
- 21 灰褐色砂質土
- 22 灰黄色砂 (暗灰色粘土互層)
- 23 茶灰色砂
- 24 暗灰色粘土
- 25 灰色砂 (暗灰色粘土混入)
- 26 暗灰黄色砂
- 27 灰黑色粘土
- 28 暗灰色粘質土 (灰色砂少し混入)
- 29 灰色粗砂
- 30 黄色砂・灰色砂混在
- 31 黄灰色粗砂
- 32 淡黄灰色砂
- 33 暗灰色砂
- 34 黄褐色砂
- 35 明茶色砂質土 (灰色砂混入)
- 36 灰色砂 (茶色土混入)
- 37 茶灰色シルト
- 38 黄褐色粘質土



第14図 水田関連遺構断面土層実測図 ① (1/40)



- | | | | |
|-----------------------------|---------------------------|--------------------------------|-----------------------------|
| 1 灰白色細砂 | 17 黄褐色粗砂 | カ 茶灰色粘質土 (茶白色粘質土・茶褐色粘質土混入) | ア 灰黑色粘質土 (黄褐色土塊混入) |
| 2 灰色砂 (組・細粒互層) | 18 灰白色粗砂・黄色砂互層 (淡青灰色細砂含む) | キ 暗茶褐色粘質土 (黄褐色粘土塊を含む) | イ 灰褐色粘質土 (黄褐色土塊・炭化物を含む) |
| 3 暗灰白色砂 (灰黑色粘質土塊含む) | | ク 暗茶褐色粘質土 (黄褐色・茶褐色の小塊を含む) | ロ 灰黑色粘質土 (黄褐色粘土塊混在) |
| 4 青灰色シルト | | ケ 黄褐色粘質土 (黄褐色粘土塊を含む) | コ 灰黑色粘質土 (黄褐色粘土塊混在) |
| 5 暗青灰色粘質土 | | コ 暗茶褐色粘質土 (黄褐色粘土塊を含む) | ク 黒色粘質土 (黄褐色粘質土・茶灰色粘質土塊を含む) |
| 6 淡灰色粗砂 | | ケ 黄褐色粘質土 (黄褐色粘土塊を多く含む) | コ 淡青灰色土塊・灰褐色土塊混在層 |
| 7 暗青灰色砂質土 | | ケ 黄褐色粘質土 (黄褐色粘質土混入) | カ 暗青灰色土塊・灰褐色土塊混在層 |
| 8 灰黑色粘質土 (黄褐色粘質土小塊・粗砂含む) | | カ 灰褐色粘質土 (淡茶灰色粘質土塊を少し含む) | キ 黒色粘質土 (黄褐色粘質土の小塊を多く含む) |
| 9 黄褐色粗砂 (12層15層の境が黄化する) | | カ 灰褐色粘質土 (黄褐色粘質土塊を少し含む) | ク 淡黄白色粘土 (灰褐色粘質土を少し含む) |
| 10 白色粗砂 (12層15層の境が黄化する) | | カ 灰褐色粘質土 (茶白色粘質土・黄褐色粘質土塊を多く含む) | ク 茶白色粘土 (部分的にグライ化している) |
| 11 暗青灰色粗砂 | | カ 黄褐色粘質土 (灰褐色粘質土混入) | シ 灰黑色粘土 |
| 12 灰色粗砂 | | カ 黄褐色粘質土 (黄褐色粘質土混入) | |
| 13 黄褐色粗砂 (7層の境が濃黄色) | | カ 黄褐色粘質土 (黄褐色粘質土混入) | |
| 14 灰白色粗砂・青灰色シルト混在層 (縦縮状の斑鉄) | | カ 黄褐色粘質土 (黄褐色粘質土混入) | |
| 15 暗青灰色粗砂 (粘質土含む) | | カ 黄褐色粘質土 (黄褐色粘質土混在) | |
| 16 灰白色砂 (淡青灰色粘質土塊含む、縦縮状の斑鉄) | | カ 黄褐色粘質土 (黄褐色粘質土混在) | |

第15図 水田関連遺構断面土層実測図 ② (1/40)

堤状遺構（図版5・6、第4・14・15図）

前述した8号溝の北壁となっている堤状遺構は、丘陵の落ち際を掘削して作った溝の廃土を対岸に堤防状に盛土することで形成されている。丘陵下に堆積した腐植粘質土を盛上げて基底部とし、上半部は版築状に構築している。基底部幅は2.5～3m、現存の高さで約60cmを測るが、当地の耕作による削平を考慮すると、本来は1mほどあったと想定される。溝と水田を連結する小溝が約6m間隔で3ヶ所に設けられており、水田への取水口と見られる。盛土内には中期末から後期前半の土器が含まれ、鋳型や取瓶片などの鋳造関連遺物も多い。基底部のさらに下には中期末と見られる幅60～70cm、深さ約15cmの溝を検出した。

3 遺物

①土器・土製品

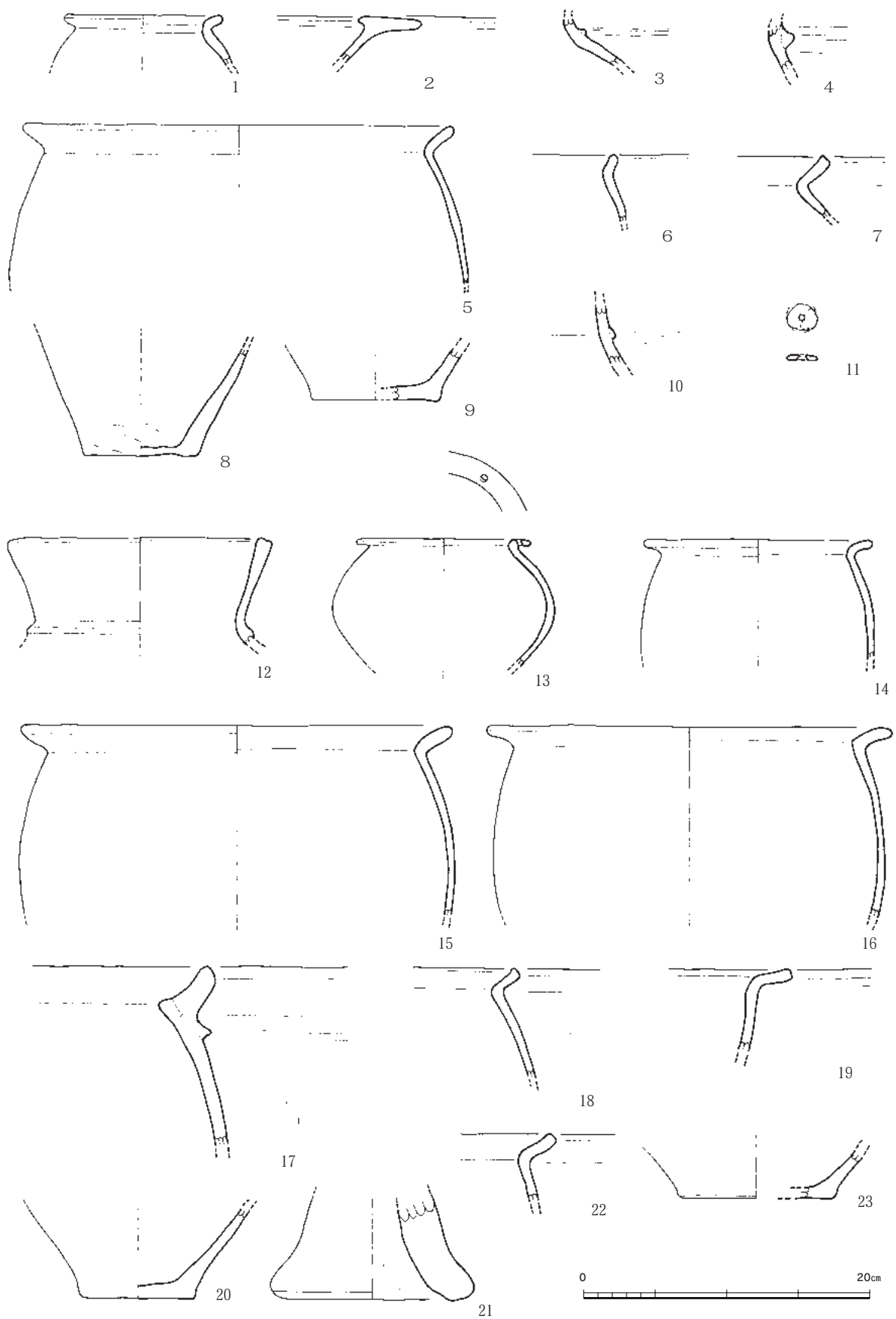
竪穴住居跡出土土器（図版8、第16図）

1号住居跡出土土器（1～11）

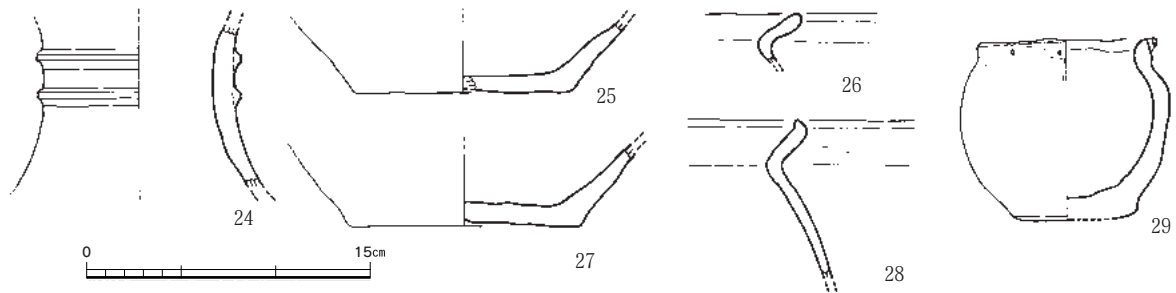
1は小型の無頸壺の上半部で外面に丹塗りの痕跡がある。胎土・焼成は普通である。2は鋤先状の口縁部片で貼床の下から出土した。上面に丹塗りの痕跡が認められ、胎土・焼成は普通。3は突帯を巡らす頸部片。淡黄褐色を呈し、砂粒を少し含み焼成は良好。屋内土壙から出土した。4は瓢形土器の括れ部で外面には丹塗りを施している。内面は暗灰色で焼成は良好。5～7は甕形土器の口縁部片。5は口縁部が「く」字に外反し、胴部はハケ目調整。胎土に粗砂粒を多く含み金雲母が少し含まれる。色調は褐色で焼成は良好。6は短い口縁がわずかに外反する。粗砂粒を多く含み、焼成は普通。黄褐色を呈する。7は「く」字に強く屈曲する。粗砂粒を多く含み焼成良好で、明褐色を呈する。8・9は底部資料。8は外面をハケ目調整し、内外面に工具を当てた痕跡が残る。胎土に粗砂粒を多く含み角閃石を少し含む。黄褐色で焼成良好。9は外面にハケ目を少し残す。粗砂粒を少し含み焼成は良好、明褐色を呈する。10は壺形土器の頸部で断面台形状の突帯を巡らす。砂粒を少し含むが焼成良好で、丹塗りの痕跡が認められる。11は直径2.2cmのボタン状の土製品で胎土に砂粒を少し含む。暗茶褐色で焼成は普通。

2号住居跡出土土器（12～21）

12は頸部に突帯を巡らし口縁部が直線的に立ち上がる壺形土器。胎土に雲母を少し含む。淡橙褐色を呈し焼成良好。13は口縁に穿孔を持つ有蓋無頸壺。表面の剥落著しく調整不明だが、外面に丹塗りの痕跡を認める。雲母を少量含み焼成は良好。14～19は口縁が外反する甕形土器。14は貼床下からの出土。胴部外面はハケ目をナデ消している。胎土の砂粒はやや多く淡橙褐色を呈し焼成良好。15・16の口縁はやや肥厚する。胴部はハケ目調整がナデ消されずに残る。砂粒をやや多く含み外面にはススが付着する。17は上面が少し内湾する口縁部の下に突帯が巡る。胴部はハケ目調整。胎土



第16图 1~3号住居跡出土土器実測图 (1/4)



第17図 1～3号掘立柱建物跡・ピット出土土器実測図（1/4）

に雲母を含み淡橙褐色を呈し焼成良好。18は貼床下からの出土。外面をハケ目、内面はナデ調整する。明茶褐色で焼成良好。19の口縁は水平に近い角度で伸びだす。胎土に角閃石を含み濃乳白色で焼成はやや軟質。20は甕の底部。赤褐色で焼成良好。砂粒の多い胎土は雲母、角閃石を含む。21は器台の裾部。外面は滑らかだが指頭押圧痕を残す。焼成良好で暗茶褐色を呈する。

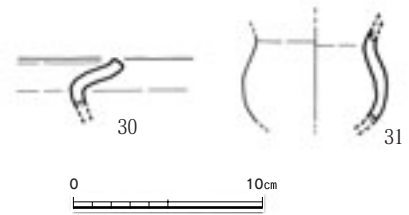
3号住居跡出土土器（22・23）

22は甕形土器の口縁部、断面形が「く」字状で、やや湾曲する。焼成は良好、胎土に角閃石を少し含む。色調は淡黄褐色。23は底部資料。ハケ目が明瞭で甕形土器の底部であろう。

掘立柱建物跡・ピット出土土器（図版8、第17図）

1号掘立柱建物跡出土土器（24）

24はP-1から出土した2条の突帯を付した器台であろうか。下半をミガキ調整する。明褐色で焼成良好。金雲母、角閃石を少し含む。



第18図 1号溝出土土器実測図（1/4）

2号掘立柱建物跡出土土器（25・26）

25・26はP-3出土。25の焼成は良好で胎土に角閃石、雲母を少し含む。26は甕の口縁部。雲母を少し含む焼成良好。胴部はハケ目調整する。

3号掘立柱建物跡出土土器（27・28）

27・28はP-2出土。27は胎土に砂粒多く角閃石、雲母を少し含む。淡黄褐色で焼成良好。28は口縁端部を摘み出している。粗砂粒多く雲母、角閃石を少し含む。黄褐色で焼成良好。

ピット29出土土器（29）

29は2号住居跡の北東隅に検出したピットから出土。小型の無頸壺で完形品。底部はやや凸レンズ状で口縁部に4個の小穴を穿っている。暗灰色で焼成は普通。砂粒がやや多い。表面はヘラ状工具で粗くナデ、全体に粗雑な印象を受ける。

溝状遺構出土土器（図版9、第18～21図）

1号溝出土土器（30・31）

近代の遺物に混じり若干の弥生土器が出土している。30は甕形土器の口縁部。31は祭祀に用いたミニチュアの甕形土器であろう。

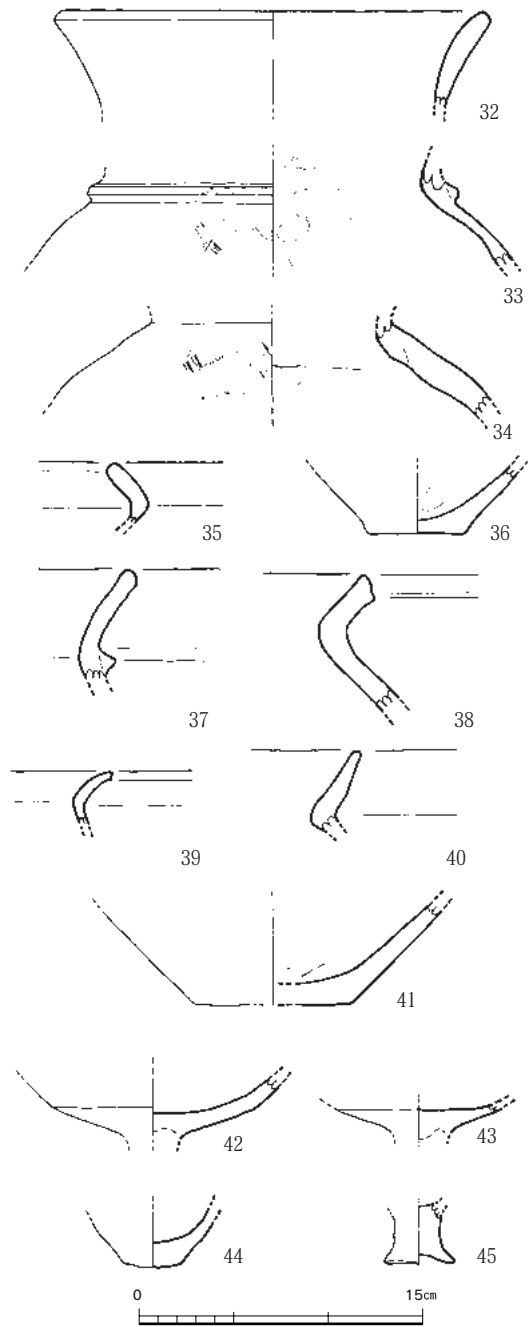
6号溝・7号溝出土弥生土器 (32~45)

35・39・42・43は7号溝、それ以外は6号溝からの出土。32は直口壺の口縁部で表面を丹塗りし、ヘラ磨きを施す。33は頸部に刻み目を持つ突帯を巡らす。胴部をハケ目調整し、内面には指頭押圧痕を残す。雲母がやや多く含まれる。茶褐色で焼成良好。34は胴部のハケ目がナデ消されずに残る。内面の指頭押圧痕の上に接合痕を残す。黄褐色で焼成良好。35は丸みのある複合口縁壺。淡黄灰色で焼成不良。36は壺底部。表面をナデ、内面には指頭ナデを認める。淡橙褐色で焼成良好。37~39は「く」字状口縁の甕。37は頸部に断面三角突帯を巡らす。砂粒多く含み茶褐色で焼成良好。38は端部を凹ませている。砂粒多く焼成良好。淡橙褐色を呈す。39はシャープな作りで胎土に砂粒多く含む。茶褐色で焼成良好。40は口縁部が緩やかに外反し上半で少し直立する。焼成がやや軟質のため磨滅著しい。41はわずかに凸レンズ状になる底部。内面底のハケ目は明瞭である。橙褐色で焼成良好。42・43の高坏は坏部と脚部の接合部で剥離している。茶褐色で胎土・焼成は普通。44は小型の甕底部で凸レンズ状を呈する。胎土に砂粒を非常に多く含む。45は上端部を欠失するがミニチュアの器台と考えられる。表面は指頭による押圧ナデ調整。茶褐色で焼成良好。

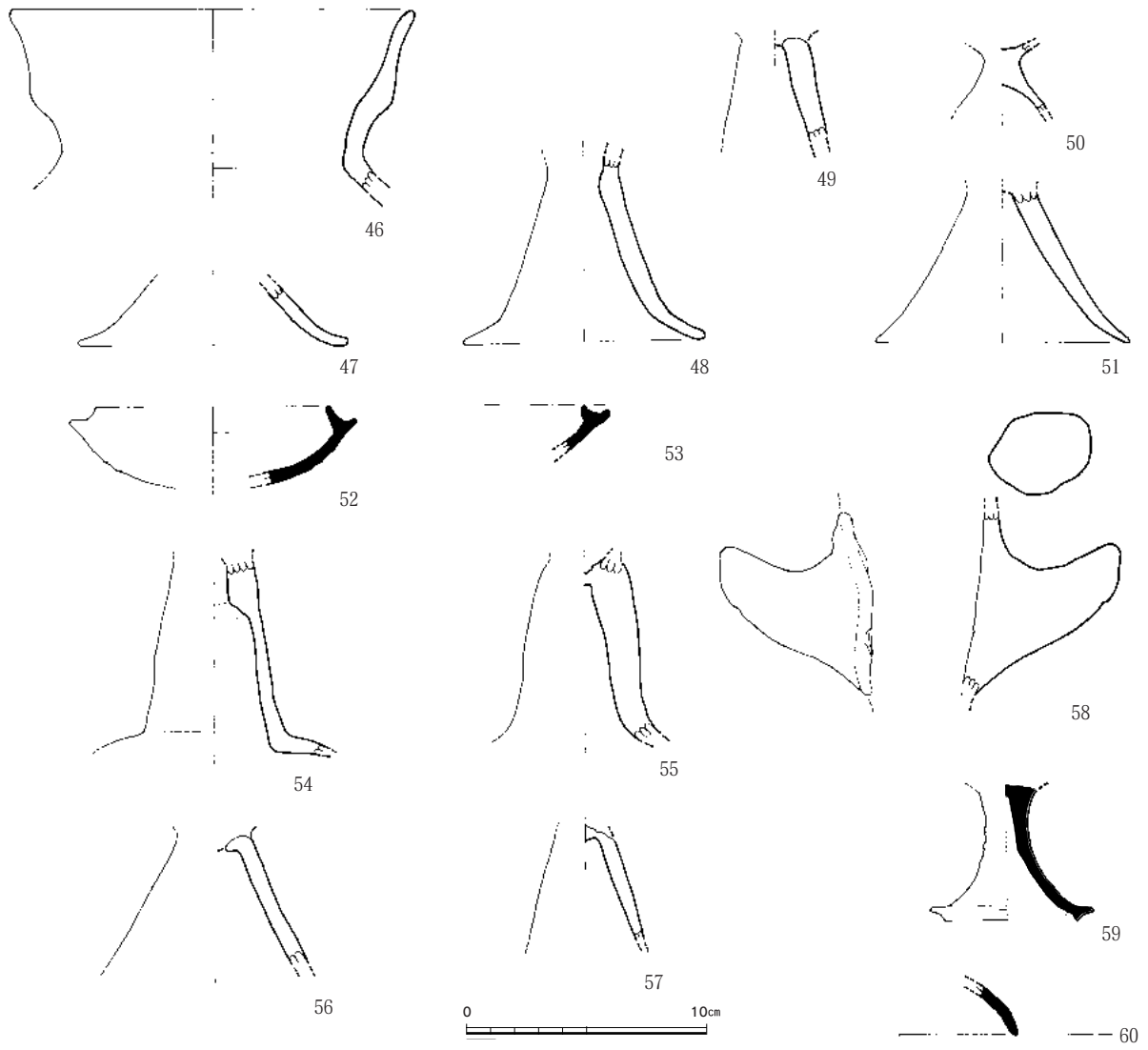
6号溝・7号溝出土土師器・須恵器 (46~60)

46~53は6号溝、54~60は7号溝からの出土である。46~51は古式土師器の壺形土器と高坏、52・

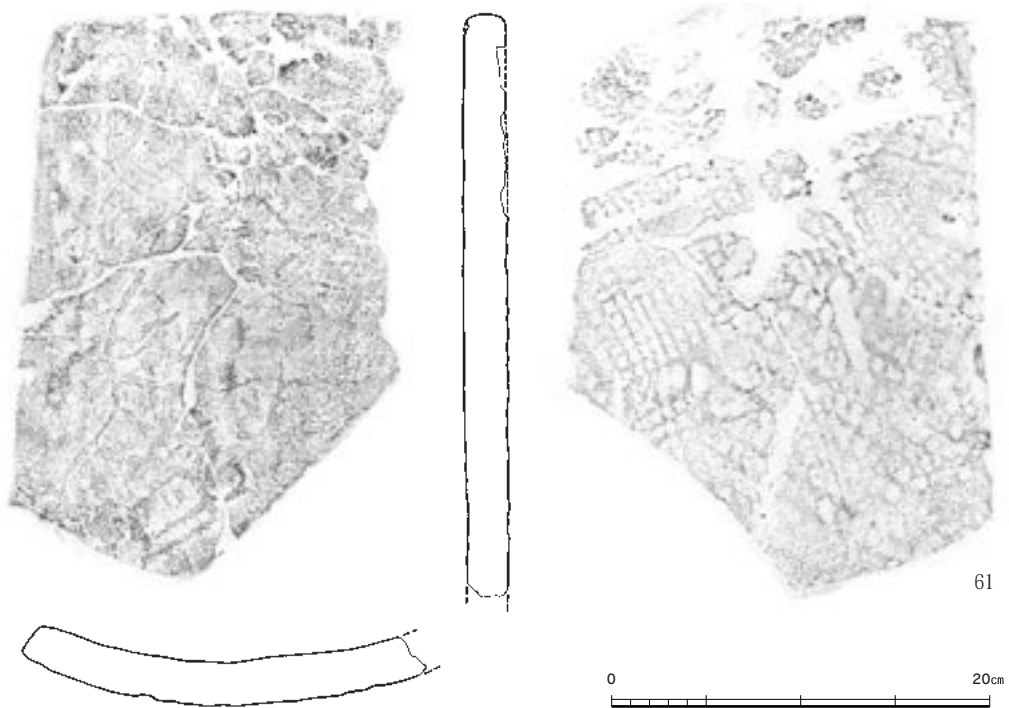
53は須恵器の坏身。46は外反する擬口縁から上方に外反する口縁部を有する大型の壺で、屈曲は鈍い。砂粒を多く含み焼成は良好。47・48は裾が少し屈曲して広がる。橙褐色で胎土・焼成良好。49は裾が鋭く屈曲するタイプのもつと見られる。50は小型で坏部、脚部ともに屈曲のないタイプと思われる。51の脚部は端部まで直線的に広がる。胎土に雲母を少し含み焼成は良好。52の内面は不定方向のナデ。淡青灰色で焼成良好。53は立上り受け部とも短い。胎土は密で暗青灰色、焼成良好。54~57は古式土師器の高坏脚部。54は裾が鋭く屈曲する。外面は一部ハケ目がナデ消されずに残っている。橙褐色で焼成良好。55は54と同様の器形だが厚手でシャープさに欠け、やや軟質。56は直



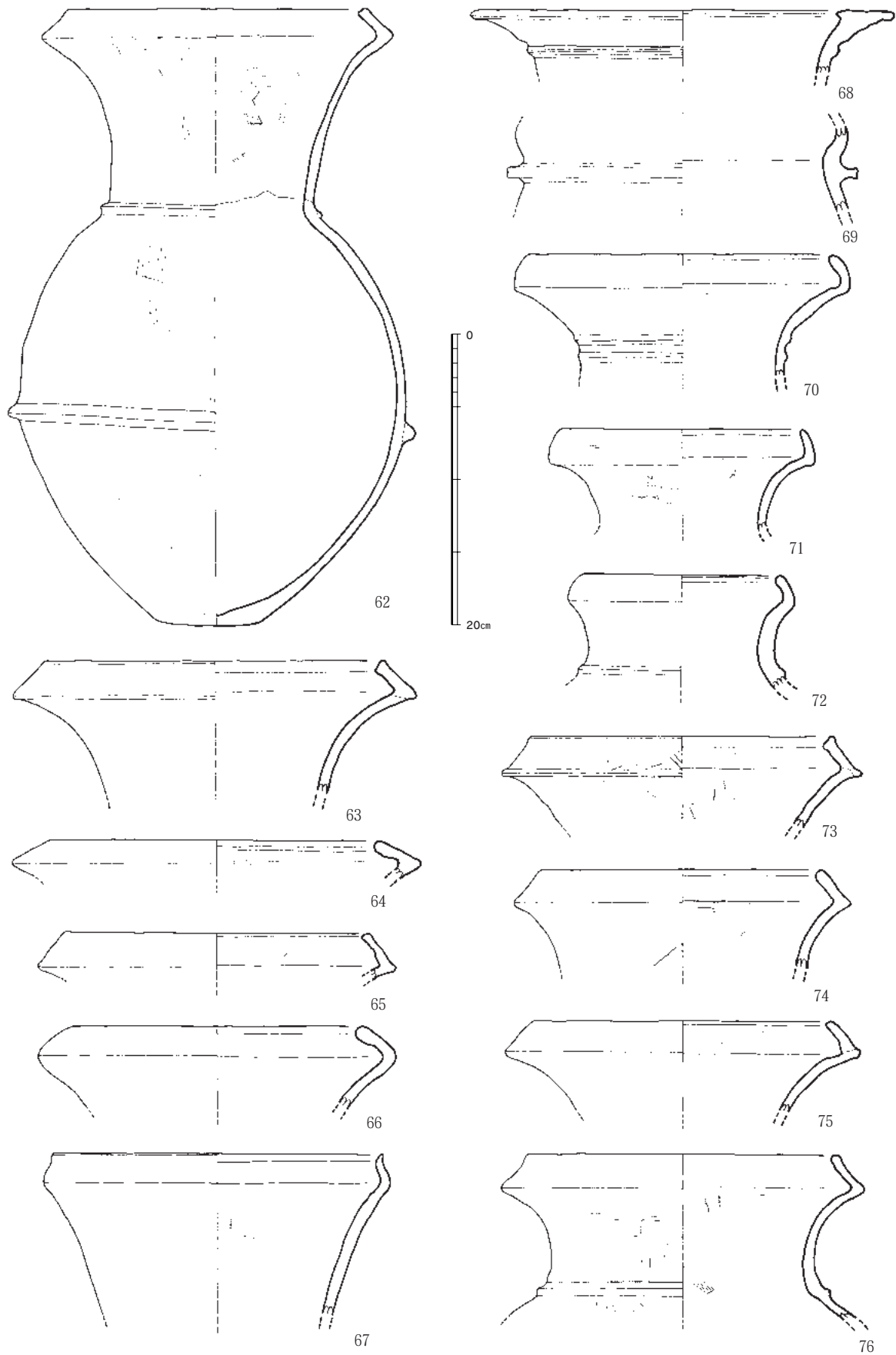
第19図 6・7号溝出土土器実測図 ① (1/4)



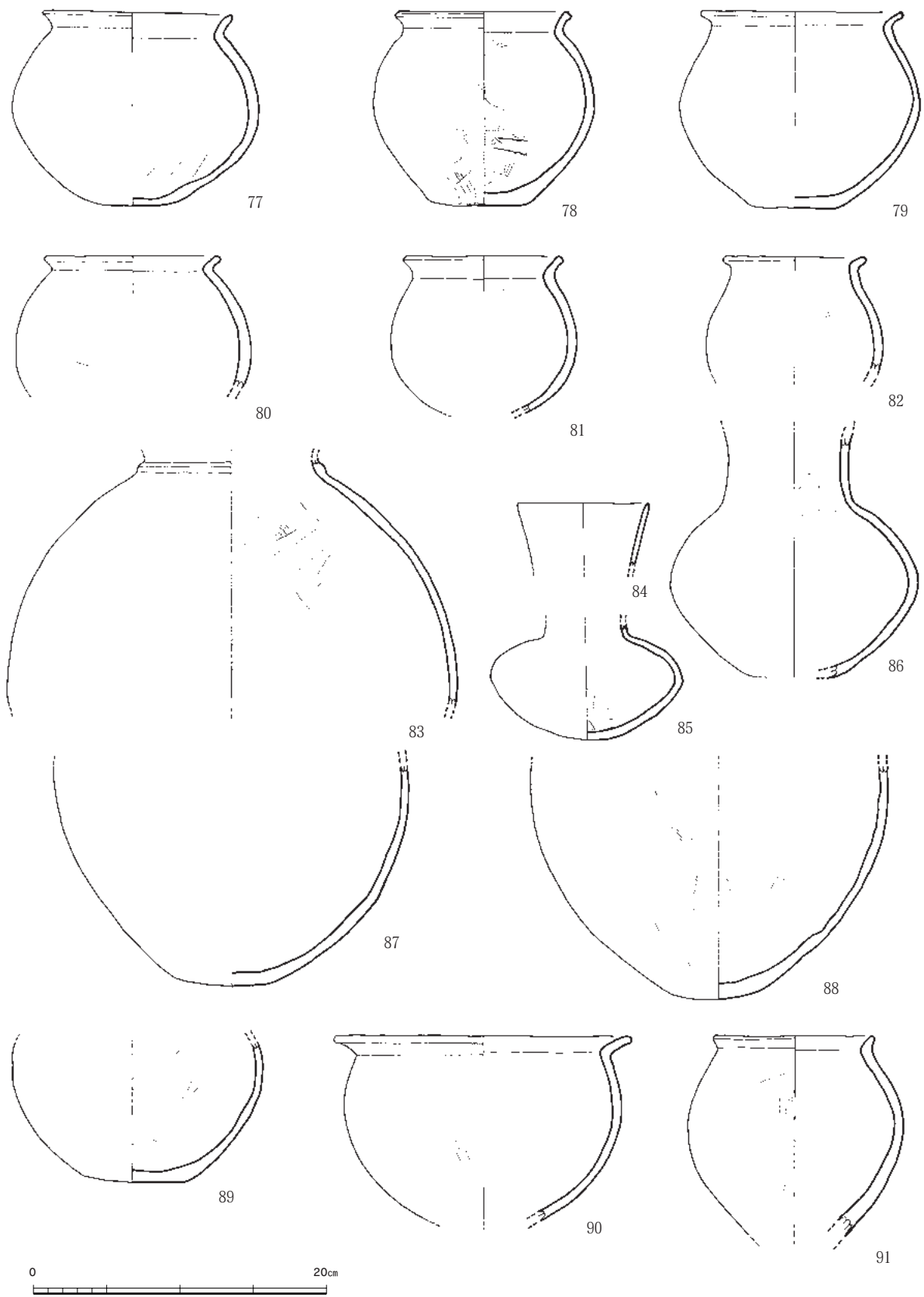
第20图 6·7号沟出土土器实测图 ② (1/3)



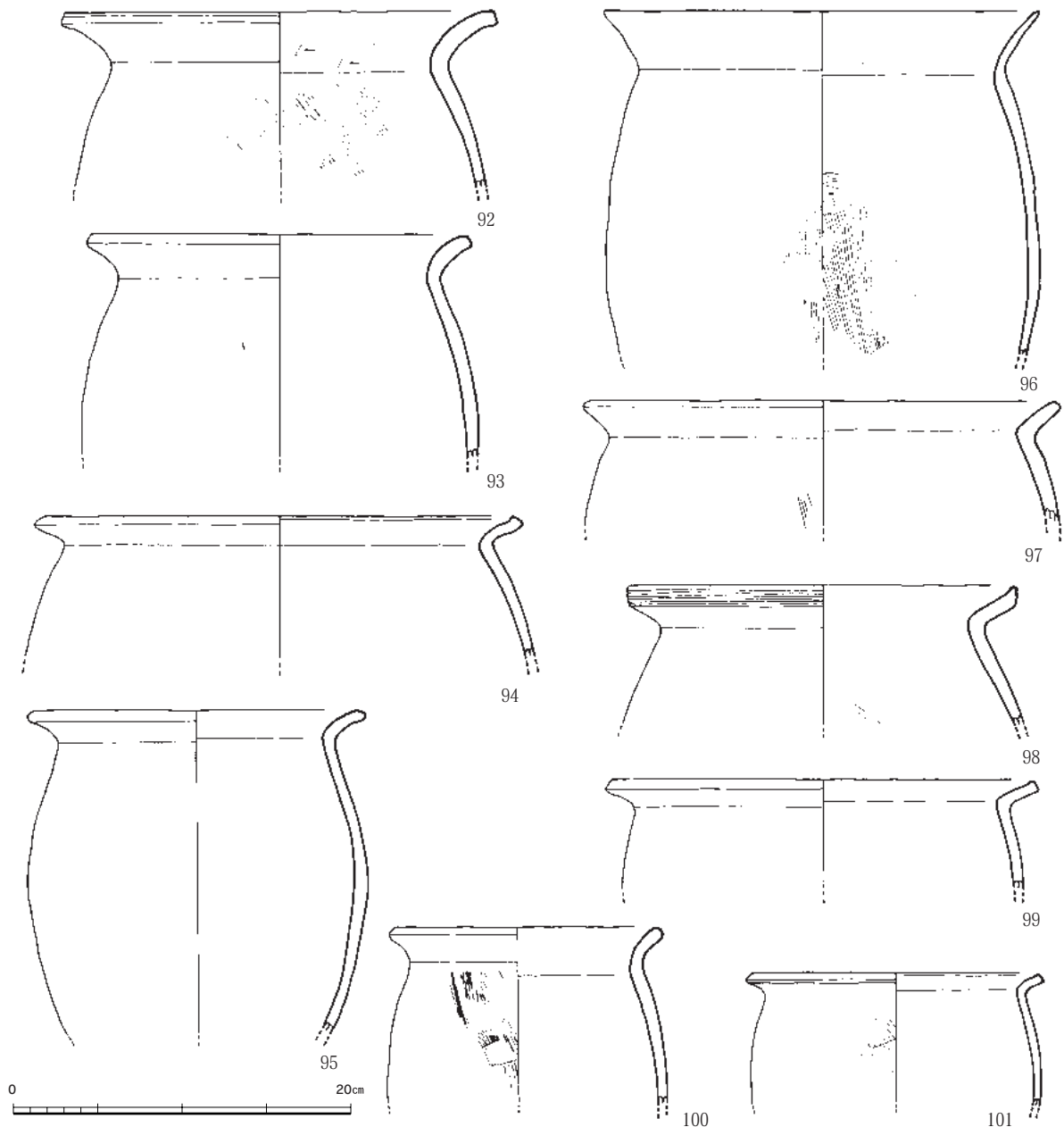
第21图 7号沟出土古瓦实测图 (1/4)



第22図 水田関連遺構出土弥生土器実測図 ① (1/4)



第23図 水田関連遺構出土弥生土器実測図 ② (1/4)



第24図 水田関連遺構出土弥生土器実測図 ③(1/4)

線的に広がるタイプ。57は裾が屈曲するタイプであろう。焼成はやや軟質である。58は甑の把手。指頭ナデで成形し、器内面は横位のへら削りである。59・60は須恵器の高坏脚部と坏蓋。59は端部を鋭く摘み出し、沈線状の段を3条有する。胎土は密で焼成良好。60は端部鋭く胎土は密で焼成良好。

7号溝出土古瓦(61)

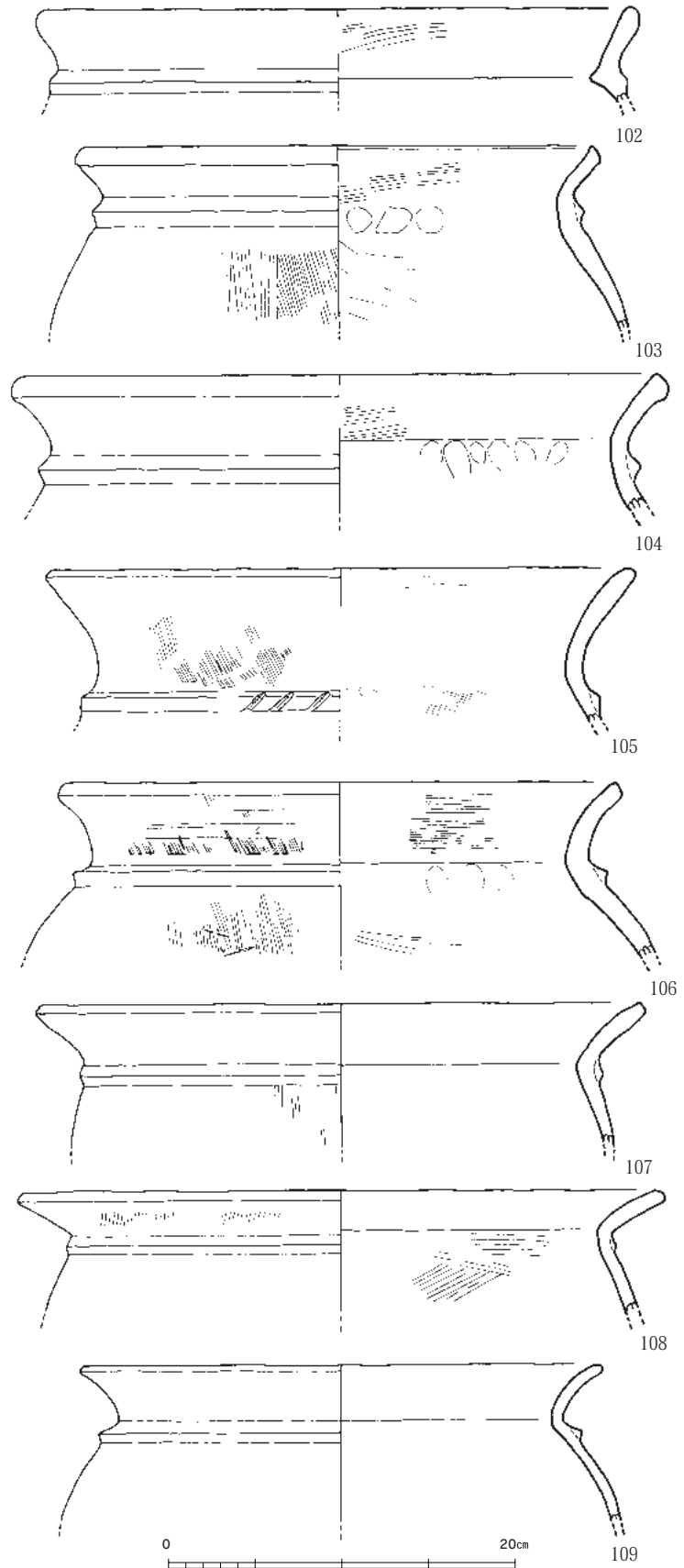
61の平瓦は酸化炎焼成で淡茶灰色を呈し、やや軟質。広端辺と右側辺を欠く。凹面には模骨の枠板痕と布目が残る。凸面は正格子タタキを一部ナデ消す。他にも図示していないが、遺構検出時や遺物包含層から同様の瓦の碎片が11点と須恵質で堅緻な碎片2点が出土している。

水田関連遺構出土土器

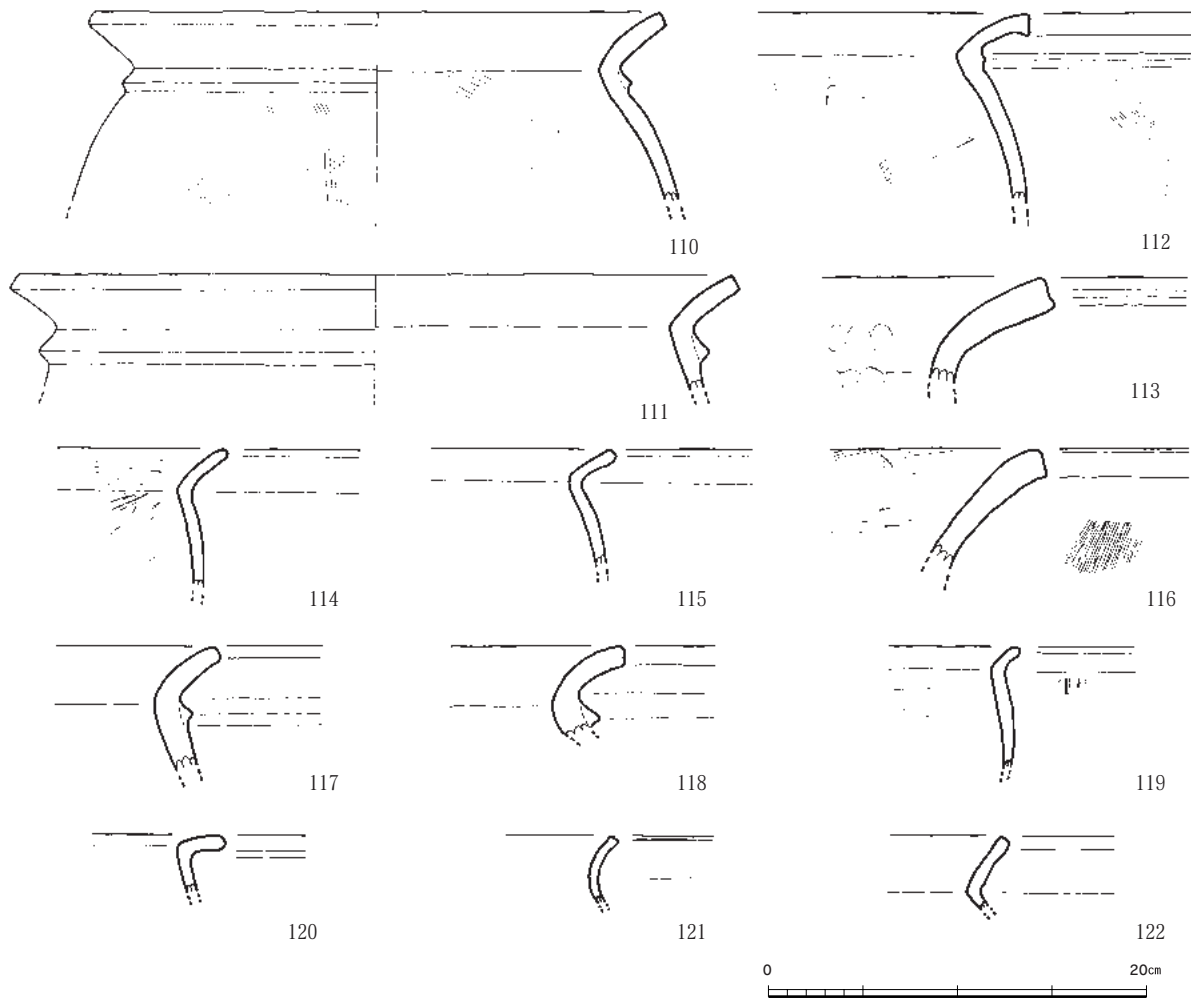
(図版7・8、第22～30図)

8号溝出土壺形土器(62～89)

62は溝底からほぼ完形で出土した。頸部と胴部に突帯を巡らせる複合口縁壺で、底面は凸レンズ状を呈する。内外面ともハケ目調整を施し、口縁部と胴部内面はナデている。雲母を少し含む。明茶褐色を呈し焼成良好。63～66は複合口縁。63はハケ目後ナデ調整する。淡黄褐色で焼成良好。64は強く屈曲する接合部に指押さえ痕が残る。雲母、角閃石を含む。65は屈曲部の上で口縁を接合しており、口縁直下の内面に指押さえ痕が並ぶ。66の屈曲は丸みがあり袋状口縁に近い。67は屈曲の角度が直立気味で端部は鋭い。内外面をハケ目調整し胎土に雲母を含む。68は鋤先口縁の丹塗り壺で口縁下に突帯を付す。69は丹塗りの瓢形土器。胎土に雲母を少し含む。70は頸部が外反を始める部位に2条の突帯を付す。内面のハケ目はナデ消されずに残る。71は屈曲部から上が厚みを持ち内面に指頭押圧痕を残す。内外面をハケ目調整後ナデている。72は口縁の屈曲が丸みを持つ。短い頸部には一部ハケ目を残す。橙褐色で焼成やや悪い。73は複合口縁の接合部内面に指頭押圧痕を残す。内外面ともハケ目後ナデ

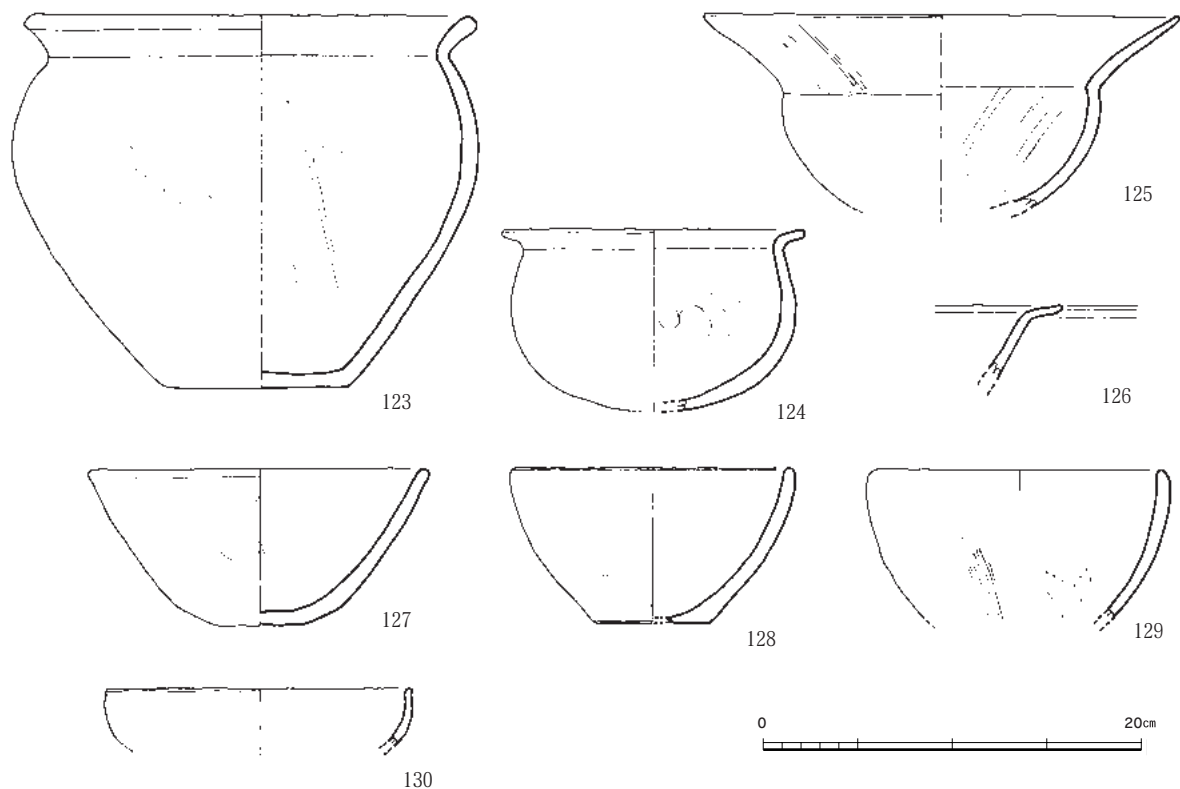


第25図 水田関連遺構出土弥生土器実測図 ④ (1/4)



第26図 水田関連遺構出土弥生土器実測図 ⑤(1/4)

調整し、端部を強調したシャープな作りである。雲母を少し含み橙褐色。焼成良好。74は全体にハケ目後ヨコナデ調整。淡黄褐色で焼成良好。75は口縁部内面に強い指頭押圧痕がある。口縁から内面はヨコナデ、頸部外面はハケ目後ナデ調整する。砂粒には雲母が含まれ、淡黄褐色で焼成良好。76は短めの頸部をハケ目調整する。口縁部はヨコナデ。砂粒少なく焼成良好。橙褐色を呈する。77～82は無頸壺。77は完形で最下層からの出土。口縁部ヨコナデ、体部は内外面とも丁寧にナデている。底部に指頭押圧痕、ヘラ状工具を当てた痕跡を残す。内外面にスス、内底に炭化物が付着している。78は胴部の内外面をハケ目調整する。口縁端部をヨコナデで少し凹ませている。79は薄手の作りで内外面とも丁寧にナデている。80は口縁部をヨコナデ、胴部はハケ目後ナデ調整する。内面中位に指頭押圧痕を残す。81は球形の胴部をナデ調整する。内面は指頭ナデ。82は胴部上半が直線的で頸部の括れが少ない。粗いハケ目が残る。83は壺胴部の上半。複合口縁壺であろう。外面はナデ調整だが肩部に少しハケ目を残す。内面はハケ目調整。84・85は直口壺。84はごく薄手の作りで内外面をナデる。85は扁球形の胴部で丸底である。頸部はヨコナデ、胴部はハケ目調整する。86の壺は口縁部と底部を欠く。頸部外面ヨコナデ、内面ヘラナデ調整。胴部外面はミガキ状にナデており、内面



第27図 水田関連遺構出土弥生土器実測図 ⑥ (1/4)

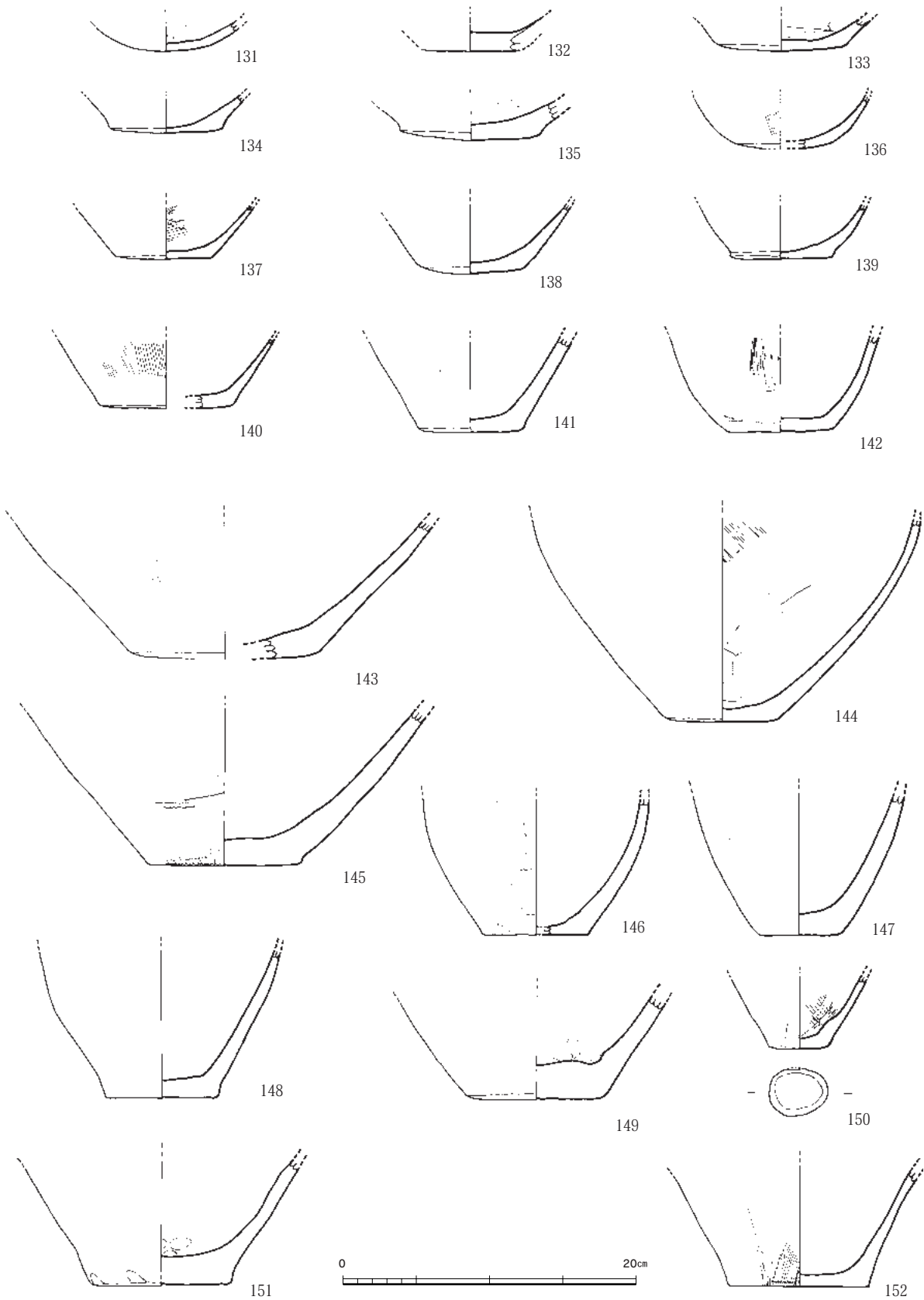
はハケ目をナデ消している。87・88は丸底壺の胴部下半。87の内面は底に指頭押圧痕、中位に板状工具の擦過痕を残す。89は内面の指押さえ痕が顕著である。外面はハケ目をナデ消す。

水田出土壺形土器 (90・91)

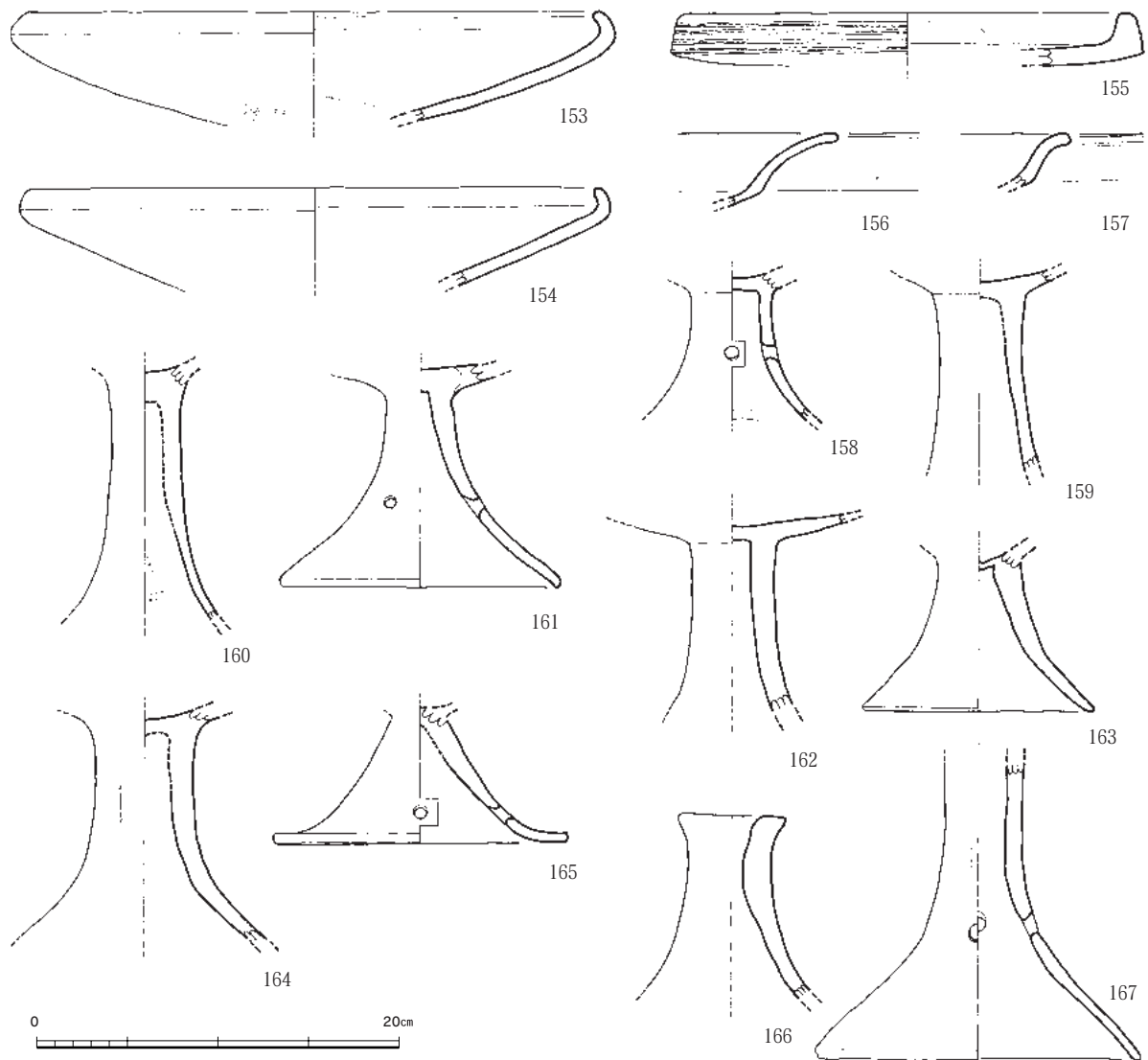
水田の覆土は弥生土器を多く包含していたが、ほとんどが碎片のため図示できた土器は無頸壺2点に止まる。90は口が広く端正な作りで胴部下半にハケ目を残す。外面にススが付着する。91は口縁部の造作が小さく、やや縦長の胴部はハケ目調整する。

8号溝出土甕形土器 (92~122)

全て口縁部を外反させる後期の甕形土器である。92の口縁部内面はヘラ削り。胴部内外面はハケ目調整する。93は表面の磨滅が著しい。胴部のハケ目はかすかに判別できる。94は端部を摘みあげ、内外面ともナデ調整。95・96は長胴の甕。96は薄手の作りで内外面にハケ目調整を残す。97は風化が著しく外面にかすかにハケ目残る。98は口縁部外面に粗いハケ目を凹線状に巡らせている。99は最下層からの出土。胴部外面はハケ目後ナデ。ススが付着する。100の口縁部は緩く外反し、外面をハケ目、内面はナデ調整する。101は端部が少し摘み上げられている。外面をハケ目、内面はナデ調整。ススが付着する。102~112は口縁下に断面三角突帯が巡る甕。102は口縁内端部が大きく突出する。口縁部は直線的に外反し端部がやや肥厚する。103・104・106は突帯貼り付け部の内側に指頭押圧痕を残す。104は口縁端部が肥厚する。105は口縁部が長く伸び、ハケ目後ナデ調整する。突帯にはハケ原体によるキザミ目を付す。106は丸みをもつ胴部で、内外面をハケ目後ナデ調整する。



第28図 水田関連遺構出土弥生土器実測図 ⑦ (1/4)

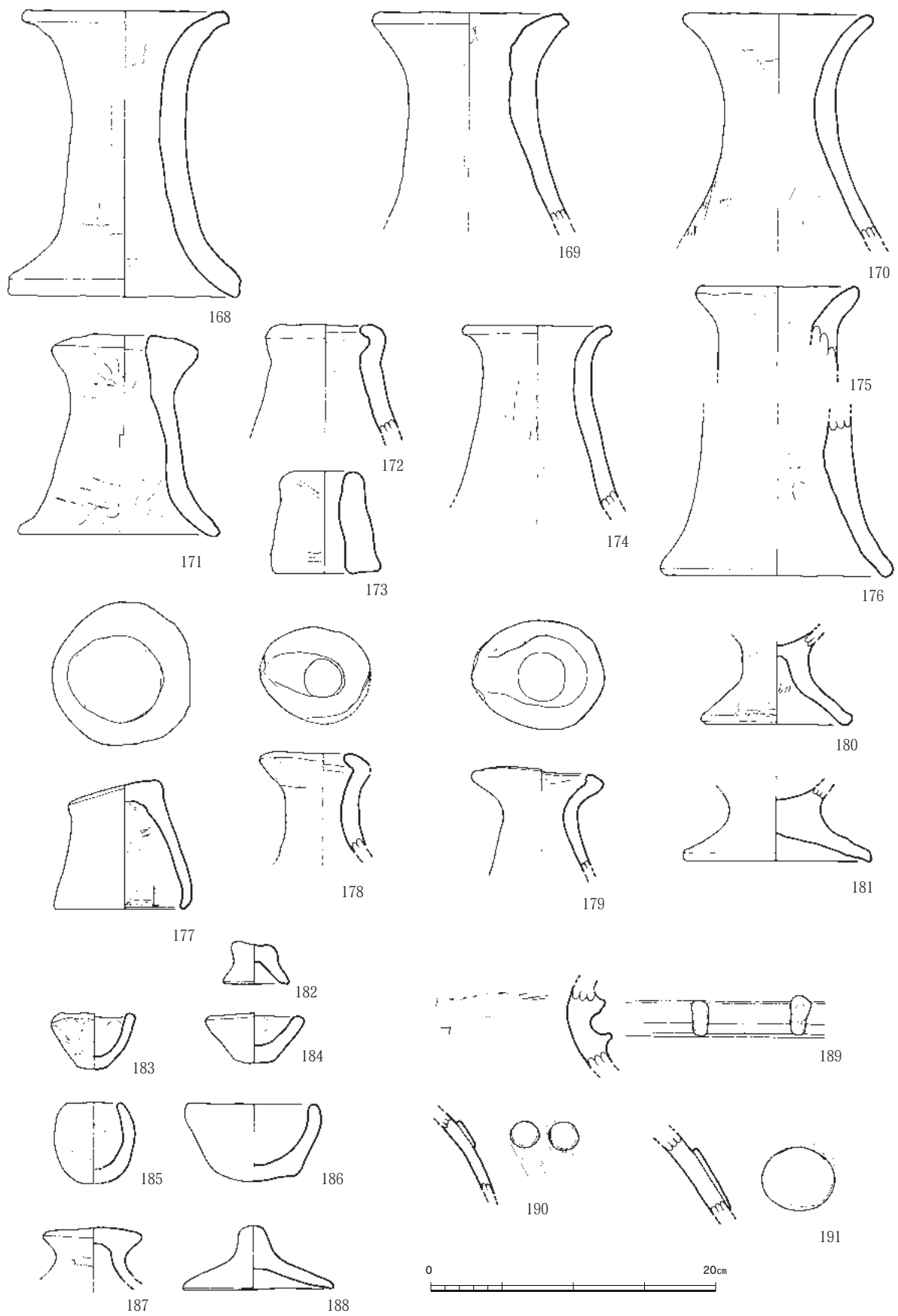


第29図 水田関連遺構出土弥生土器実測図 ⑧ (1/4)

107は突帯が不明瞭。胴部はハケ目後ナデ調整。108は内外面のハケ目がナデ消されずに残る。109は薄手で端正な作りで、ナデとヨコナデで仕上げている。110は口縁部をヨコナデ、胴部はハケ目後ナデ調整する。111は全体にススが付着する。112は口縁端部を強調した成形がなされ、胴部はハケ目調整。外面にススが付着する。113は口縁が端部に向かって厚くなる。胴部とのつなぎ目の内面に指頭押圧痕を残す。114は外面は磨滅しているが、内面はハケ目調整や稜線が明らかである。115は口縁をヨコナデ、胴部をナデ調整し、黒塗りする。116は内外面にハケ目を残し、内面下部はヘラ削りする。117・118は口縁下に突帯を付し、ヨコナデとナデで調整する。119は口縁部が小さく外反する。胴部内面に板状工具の擦過痕を残す。120の口縁はほぼ水平に屈曲する。121の口縁は緩く外反する。122は内面の稜線が明瞭である。

8号溝出土鉢形土器 (123~130)

123~126は口縁が屈曲する。123は内外面にハケ目を明瞭に残し、口縁は少し肥厚する。124は



第30図 水田関連遺構出土弥生土器実測図 ⑨ (1/4)

扁球形で丸底。内面に指頭押圧痕を残す。125は扁球形の体部から口縁が大きく広がる。体部内面、口縁部外面にヘラ状工具で下から上に強くナデた痕跡を残す。126は薄く直線的な作り。127～130は特に口縁部を作り出さない器形。127は丸底状で内外面にハケ目を残す。128は内面ナデ、外面をハケ目調整。129は内面に強い指ナデの痕跡を残す。130は鉢というよりも椀形を呈する。非常に薄手の丁寧な作りで胎土も精良である。口縁下がわずかに凹む。

8号溝出土弥生土器底部（131～152）

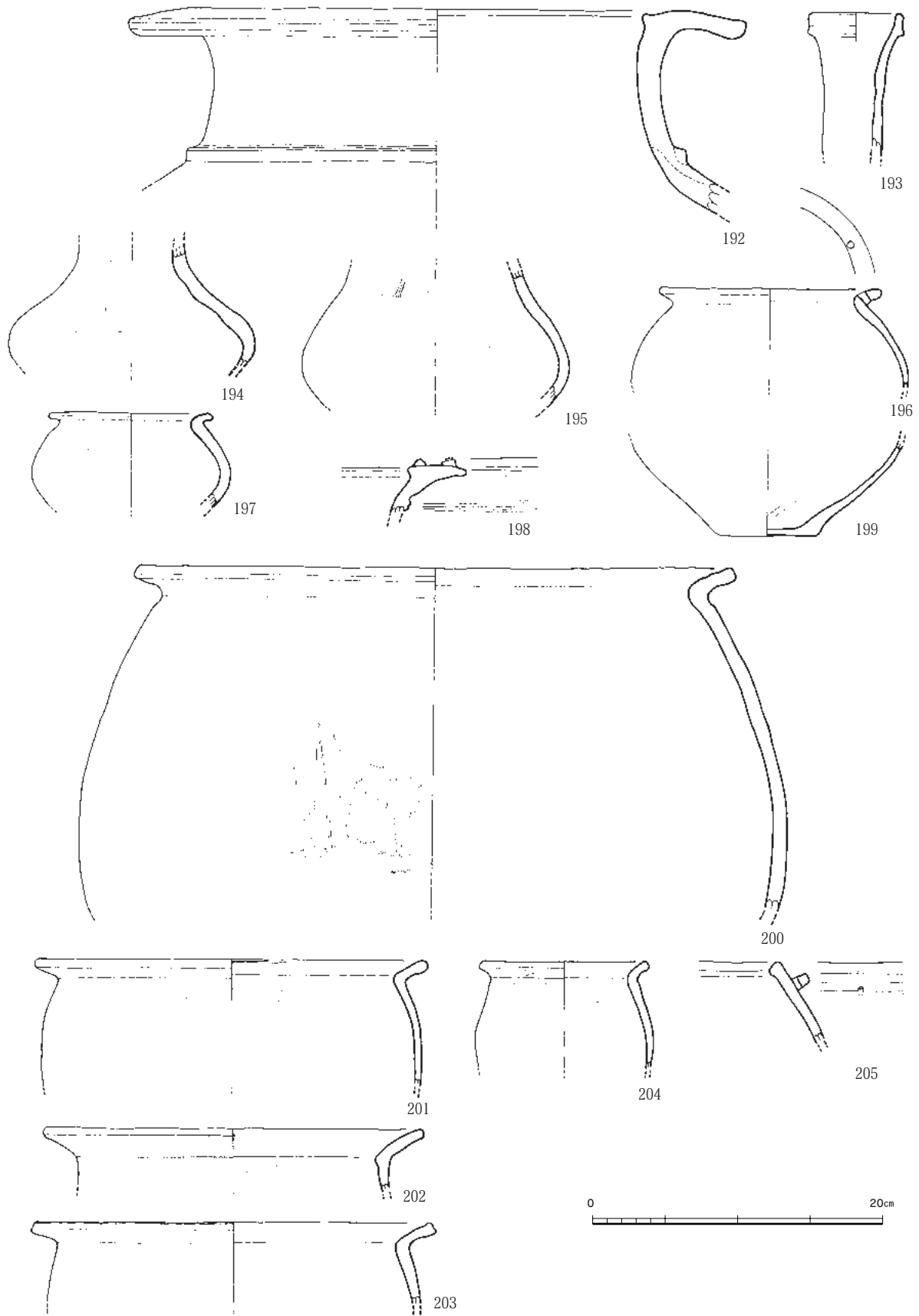
弥生土器の底部であるが、壺、甕、鉢形土器いずれかの判別が付け難いものが多い。131は丸底で外面ナデ、内面にハケ目を残す。132は内面に厚く炭化物が付着している。133～135は凸レンズ状の底部である。136はほぼ丸底で内面を丁寧にナデている。137は内面にハケ目を残す。138は凸レンズ状で内外面ともナデ。139の少し膨らんだ底部直上には段が付く。140～151は底部が丸みを帯び、140・141・143は凸レンズ状を呈している。144の内面はハケ目後ナデで、底に指頭押圧痕を残す。149の分厚い底は内面が指頭押圧痕で凸凹している。150の底部平面形は楕円である。外面は指ナデ、内面をハケ目調整する。151は内外ともナデ調整するが内面の指頭痕が目立つ。152は中期の甕形土器底部か。外面ハケ目、内面ナデ調整する。

8号溝出土高坏形土器（153～167）

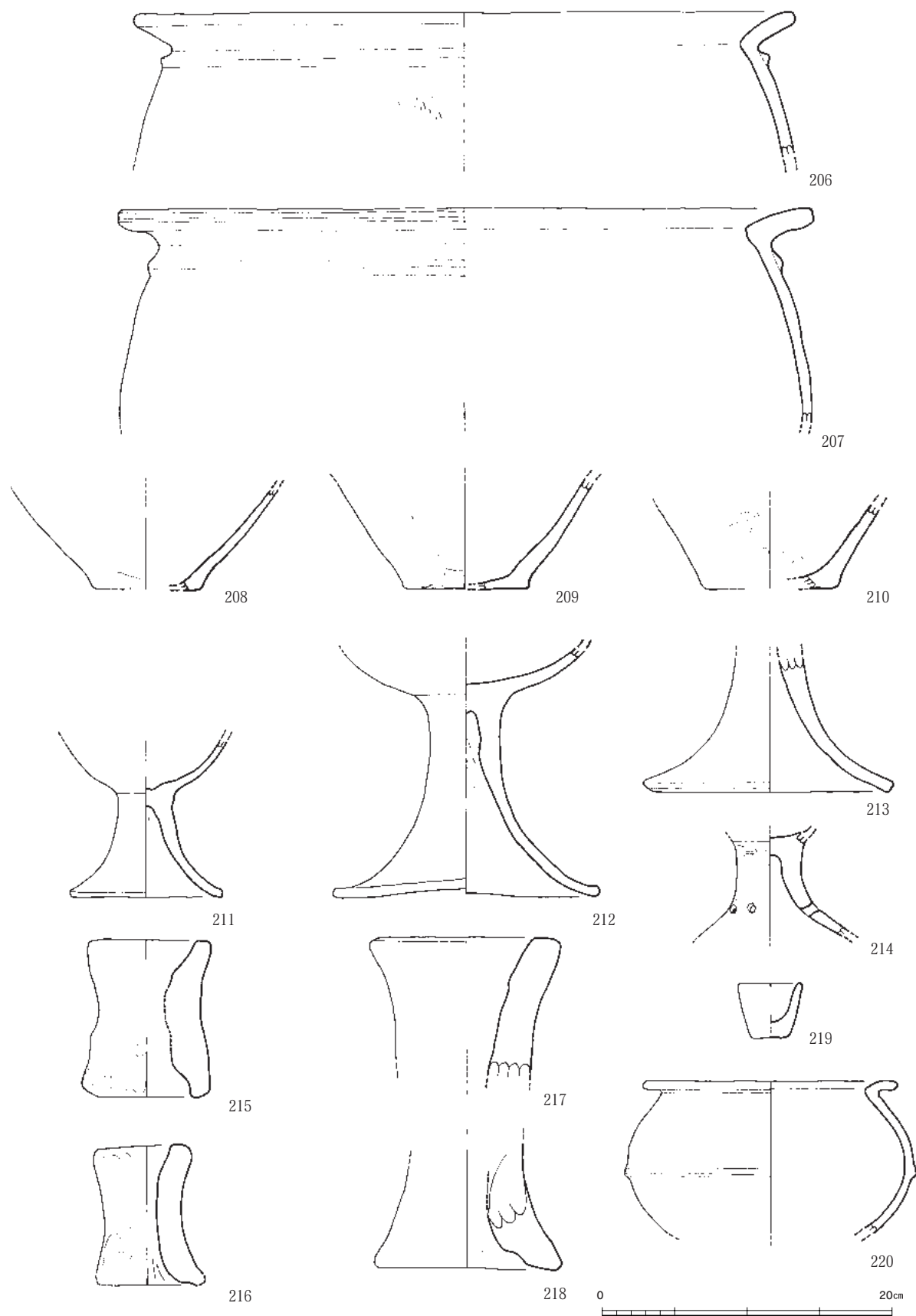
153・154は口縁端部が内側に湾曲する。153は内外面ともヘラ磨きの痕跡が認められ、端部はヨコナデである。154は断面形が直線的で、風化のため器面調整は不明である。155は厚手の口縁に4本の凹線が巡り、内側に指頭押圧痕を残す。山陰系の土器との共通性を感じさせるが、胎土は当地で普通に見られるものである。156は口縁部が外反し、外面には暗文風にヘラ磨きが残る。157は口縁部が短く、やや直立気味。内面はヘラナデを施している。158～167は脚部で、159・160・162・167は高くスマートな器形。158は外面に丹塗り、ヘラ磨きの痕跡をわずかに残す。裾部内面はハケ目調整。159は磨滅し調整不明、本来は丹塗りか。160は外面を丁寧なナデ、内面はヘラ削りを残す。161は器面ナデ調整。162は外面ヘラ磨き。163は内面奥にはシボリ痕、調整工具が当たった痕跡を残す。164の外面は粗いヘラナデ。165は脚柱部なく裾が広がる。ミガキ状のナデを施し、本来は丹塗りと思われる。166は外面にハケ目の痕跡を残す。167はなだらかに裾が広がる。外面と裾部の内面はハケ目調整する。

8号溝出土器台形土器・支脚（168～179）

168～170・174～176は上下が広がる大ぶりの器台である。176を除き外面はハケ目調整する。内面の調整は168は上下位にハケ目を施すが、それ以外は指頭押圧痕や粗い指ナデの痕をそのまま残している。171は上端部を著しく肥厚させる。器表面には指頭押圧痕や調整工具の痕跡を残す。172は上端部が内側に屈曲しており、表面はナデている。173は小型品で表面はナデ。タタキ目が少し残る。177～179は支脚。177は伏せたコップのような形状の支脚で上面が傾いている。外面はナデ、内面をハケ目で調整する。178・179は上部が扁円形に広がり端部で内湾する。178は成形時の凹凸を器表に残すが、磨滅して調整不明。179は裾部をハケ目調整し、その他をナデるが、頸部には爪跡



第31図 堤状遺構出土弥生土器実測図 ① (1/4)



第32図 堤状遺構出土弥生土器実測図 ② (1/4)

付きの指頭押圧痕が残る。

8号溝出土土器脚台部 (180・181)

180は基本的に表面をナデ調整するが、上面と裾部にハケ目、括れ部に指ナデの痕が残る。181は器底が分厚く、表面は強いヨコナデで調整している。

8号溝出土手捏土器・蓋 (182~188)

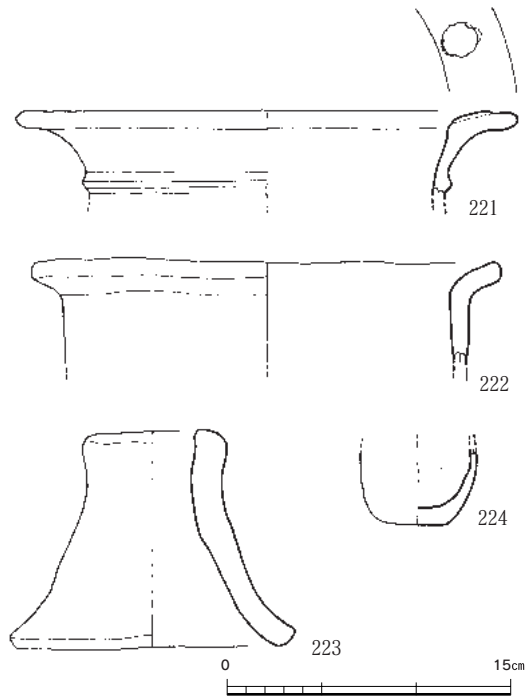
182はミニチュアの支脚だが磨滅して調整不明である。183~186は手捏土器。183は指頭痕を明瞭に残す。184の外面は磨滅している。185は卵球形で口が少し窄まっている。外面を指ナデ、内面はヘラ削りである。186はやや大ぶりで丸底状。器面が磨滅している。187は蓋の頂部。全体を丁寧にナデしており、括れた部分にハケ目が残る。188は市女笠のような形状の土器で頂部が偏っている。全体をナデ調整する。

8号溝出土浮文付き土器 (189~191)

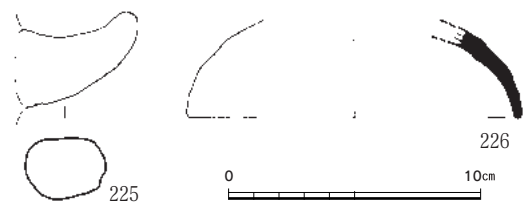
189は大型の甕の頸部小片だが、2条の突帯上に巴形の浮文を貼り付けている。190・191はボタン状の浮文を貼り付けた壺の肩部と思われる小片だが正確な傾斜は不明である。

堤状遺構出土土器 (192~220)

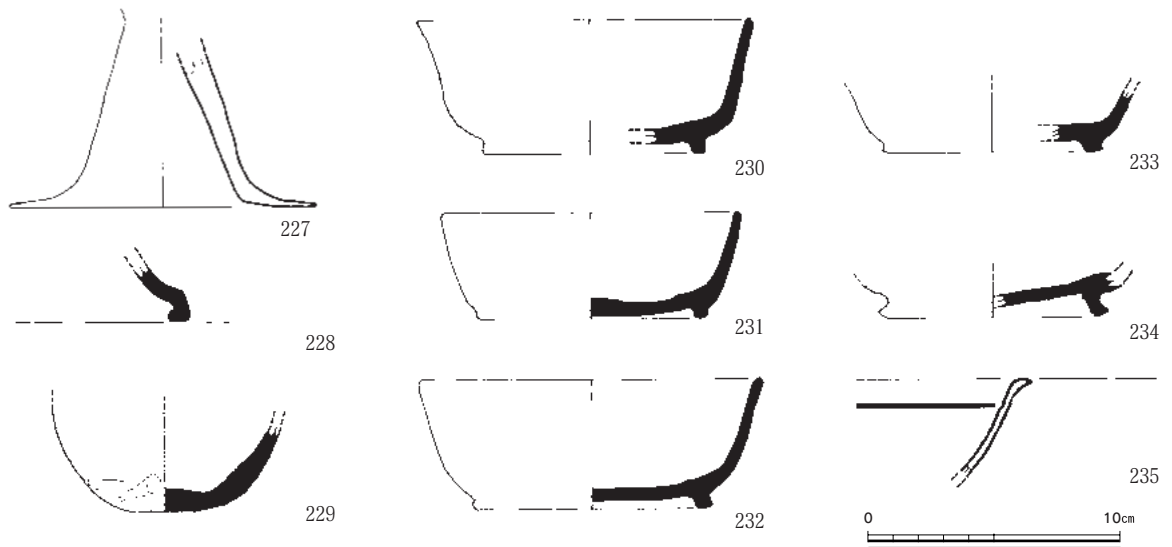
192は丹塗り壺だが、器面が荒れて丹はほとんどが剥落している。193は鶴首状の長頸壺で丹塗りの痕跡をとどめる。194は扁球形の胴部。袋状口縁の長頸壺であろう。外面は丹を塗り、ミガキ状のナデで調整する。195は丹塗り壺の胴部。肩の曲線はなだらかで、外面はハケ目後ナデ調整し、頸部にヘラ磨きを暗文状に付す。内面はヘラ削り、指ナデ痕が残る。196は口縁に蓋を綴じる小孔を穿った無頸壺。丹塗りの痕跡をわずかにとどめる。197は小型の無頸壺。外面に丹を塗りヘラ磨きを加える。内面はハケ目後にナデ調整する。198は鋤先状の口縁部。口縁下にM字突帯を巡らす。上面に装飾を取り付けていた痕跡があり、子持ち壺か高坏と考えられる。外面から口縁内端部まで丹塗りする。199は黒塗りの壺底部。丁寧にナデ調整するが、内底に調整工具を当てた痕跡が残る。200~204は甕の上半部と口縁部。200の外面はハケ目、口縁部をヨコナデ、内面はナデ調整する。201は口縁端部から内側をハケ目後ナデ調整する。胴部外面はハケ目でススが付着する。202は口縁内端部が強調されている。口縁内側をハケ目、外側はハケ目後にナデ調整する。胴部内面はヘラナデされる。203は端部が角張りシャープな作り。丁寧にナデ調整で黒塗りする。204は小型の甕。頸部をヘラナデし、直上に工具を当てた痕が付いている。胴部をハケ目調整する。205はいわゆる樽形土器で鏝に約3cm間



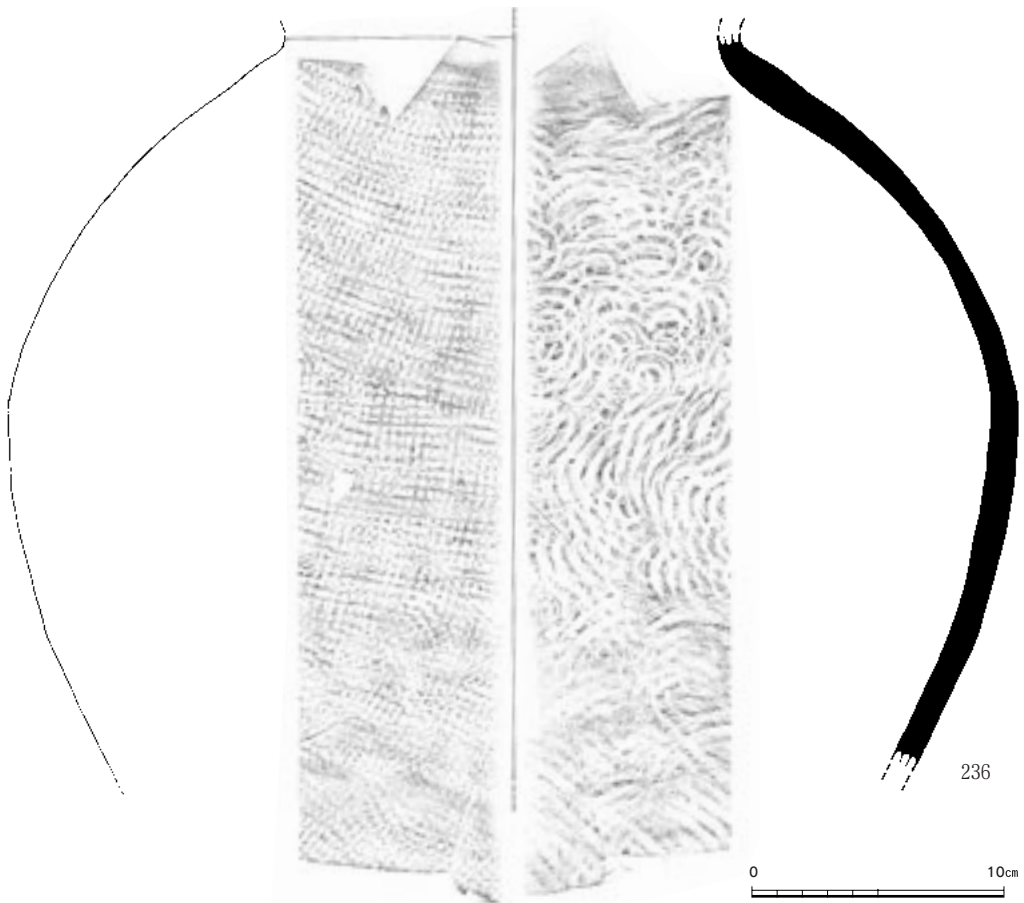
第33図 遺構検出時出土弥生土器実測図(1/4)



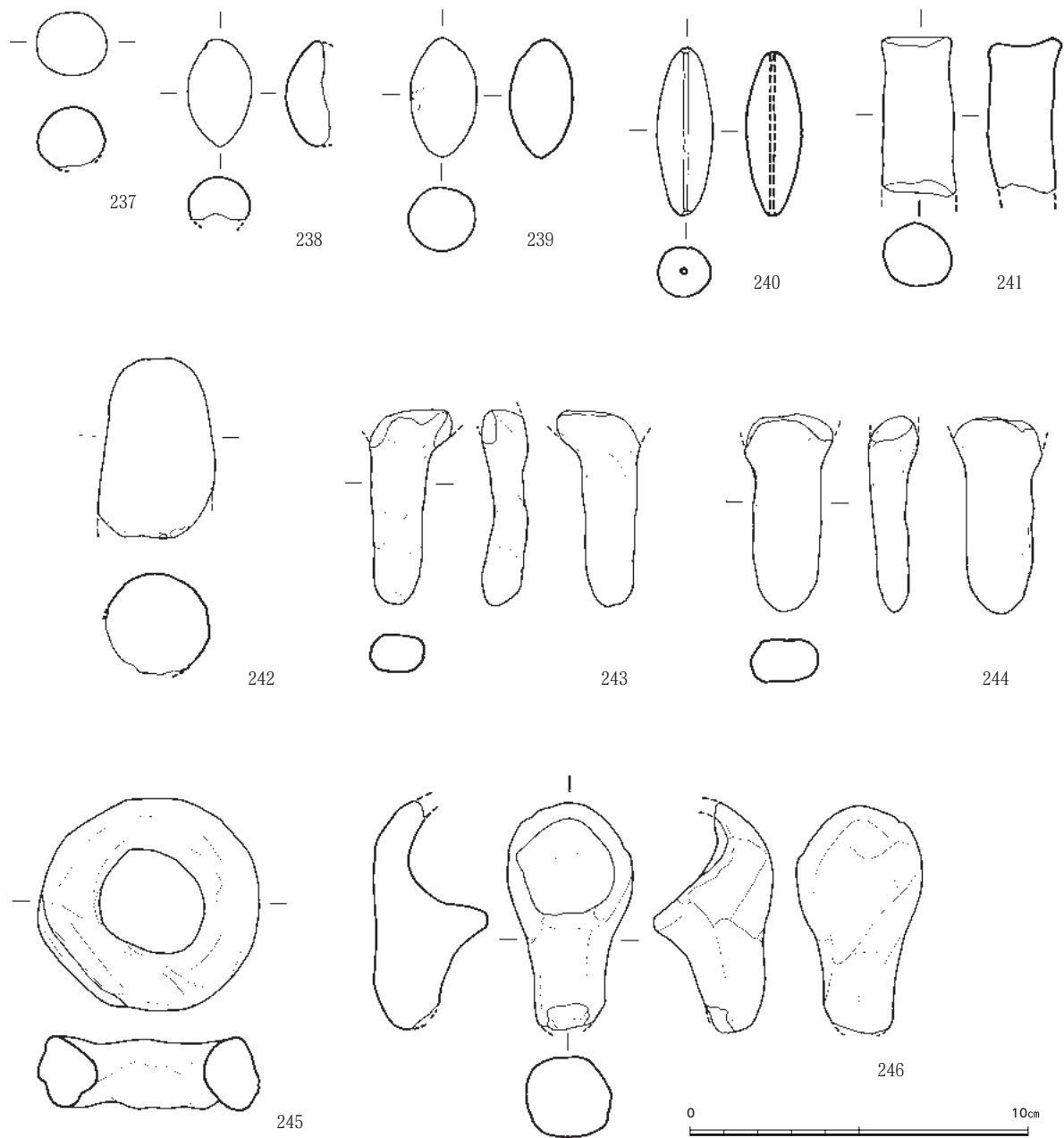
第34図 8号溝検出時出土土器・須恵器実測図(1/3)



第35図 遺物包含層・遺構検出時出土土器実測図（1/3）



第36図 遺構検出時出土土器実測図（1/3）



第37図 土製品実測図 (1/2)

隔で小孔を穿つ。丹塗りされ丁寧にナデ調整する。206・207は口縁下に突帯を巡らす甕。206は外面をハケ目調整し、黒塗りする。207は磨滅して調整を判別し難い。208～210は底部資料で、内面はナデ、外面をハケ目調整する。210は内底に指頭押圧痕を残し、ススが付着する。211～214は高坏。211は器面を丁寧にナデ、外面を丹塗りする。212は器面の風化著しいが、丹塗りの痕跡と脚部のヘラ磨き調整が認められる。213は磨滅して器面の調整が判別できない。214は脚柱部をヘラ磨き、裾はナデ調整する。対になった小孔は4対で8個あったものと見られる。215～218は分厚い作りの器台。指頭ナデ調整で押圧痕を残す。217・218は表面が荒れている。219は手捏土器で全体をナデるが、外面に調整工具の痕跡を残す。220は堤状遺構の基底部下に検出した溝から出土した。丹塗り

の無頸壺で胴部に突帯を巡らしている。

遺構検出時出土土器（図版9、第33～36図）

弥生土器（221～224）

221は8号溝の平面プラン確認時に出土した壺の口縁部。上面にボタン状の浮文を貼り付け、口縁下に突帯を巡らす。222は3号・2号住居跡の切り合い確認時に出土した甕の口縁部。磨滅して調整不明だが全体に粗雑な印象の土器である。223は8号溝プラン確認時に出土した裾広がりのあまり見ないタイプの器台。224の手捏土器は表土除去時に採取。土師器の可能性もある。内面の指頭痕が顕著である。

土師器・須恵器（225～236）

225の甑の把手と226の須恵器坏蓋は、8号溝上層からの出土で混入品と見られる。227～236は6号溝以前の遺構に薄く被っていた遺物包含層からの出土。227は古式土師器の高坏脚部。228は須恵器の脚台部で端部を内側に折り込んでいる。回転ナデ調整される。229は体部が球形の壺底部。カキ目と手持ちへら削りで調整され、「二」形のへら記号を刻む。内面は強い回転ナデ。230～234は須恵器の坏身。回転ナデ調整後に器底をナデる。234の高台は他に比して踏ん張っており、端部が鋭い。235は白磁碗の口縁部小片。小さく外反させた口縁の内側に沈線を付し、灰白色の釉には微細な気泡が入っている。236は須恵器の甕。球形の胴部破片で頸部以上と底部を欠く。外面は正格子タタキ、内面は青海波タタキである。

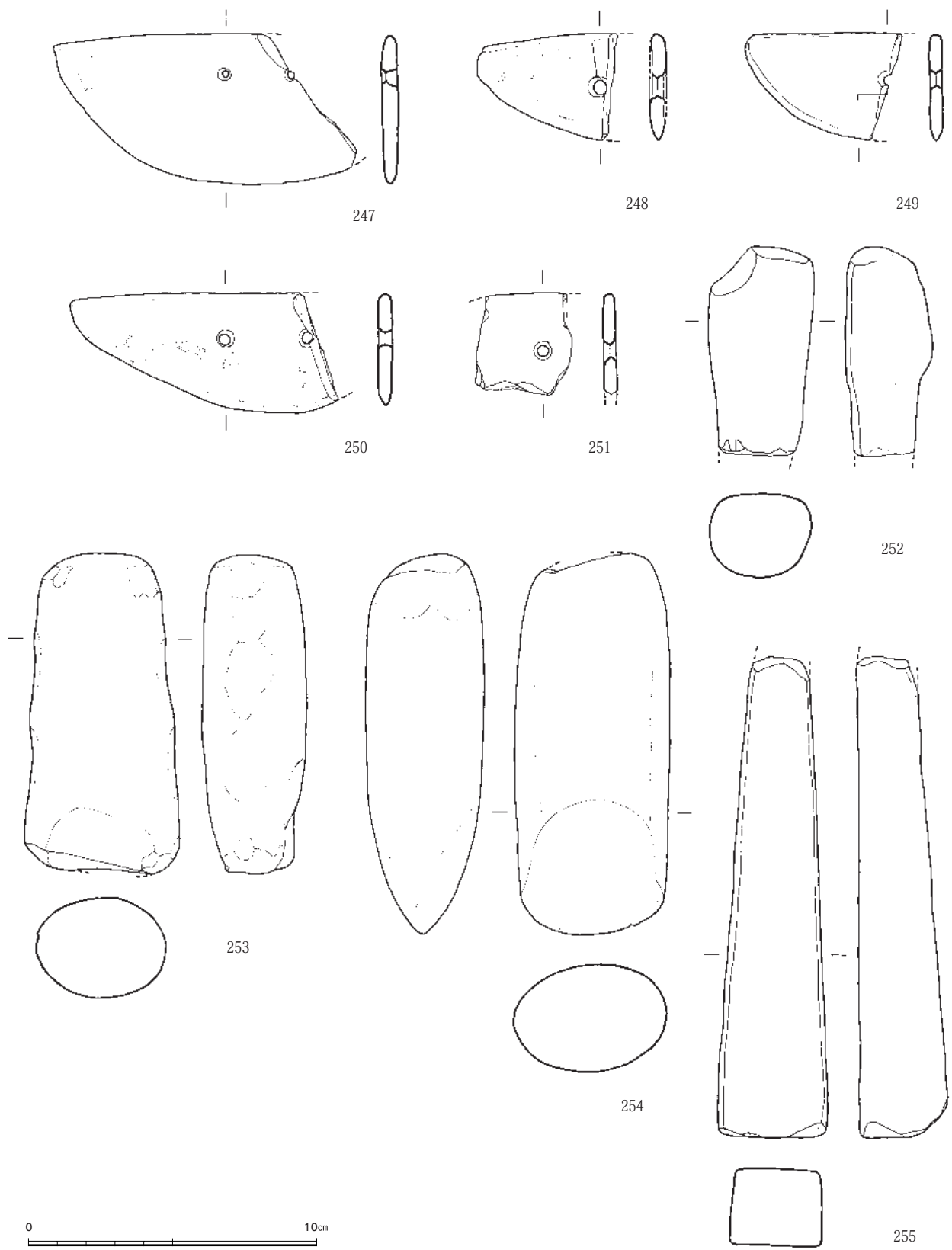
土製品（図版8、第37図）

238は5号溝、245・246は水田、他は8号溝から出土した。237～239は土弾で、237は直径2.1cmの球形、重さ7.1g。淡橙褐色を呈す。238は長さ3.2cm、直径1.9cmの紡錘形で淡橙褐色。半分ほどを欠く。239は長さ3.6cm、直径1.9cmの紡錘形で完形。重さ12.5gである。胎土精良で淡茶褐色を呈する。240の土錘は長さ5.0cm、直径1.7cmの紡錘形で1条の溝を有する。孔の直径は約2mm。淡茶褐色を呈し、重さ11.4gである。241は棒状の土製品で端部が少し凹む。直径2cm、折損しており本来の長さ、用途は不明である。242は頂点が丸まった円錐形で、直径3～3.5cm。長さ、用途は不明。243・244は手捏の匙状土製品の柄と見られる。砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。245は手捏の円環状土製品。外径約6.5cm、内径約3cm、断面径は1.8cm前後だが形状は一定しない。何かを載せる台のようなものであろうか。砂粒を少し含み、焼成良好、赤褐色を呈する。246は手捏の匙状土製品。柄は太く短い。砂粒に雲母を少し含み、暗茶褐色を呈する。焼成良好。

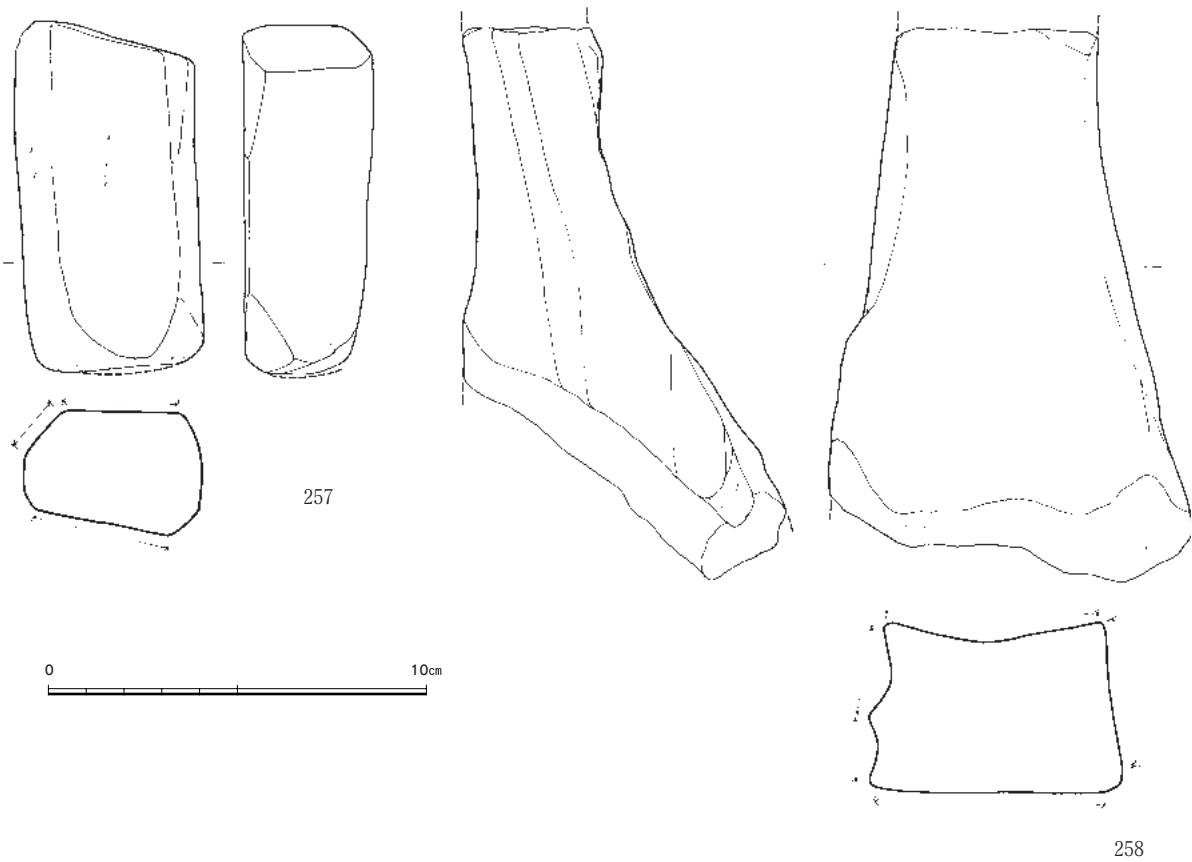
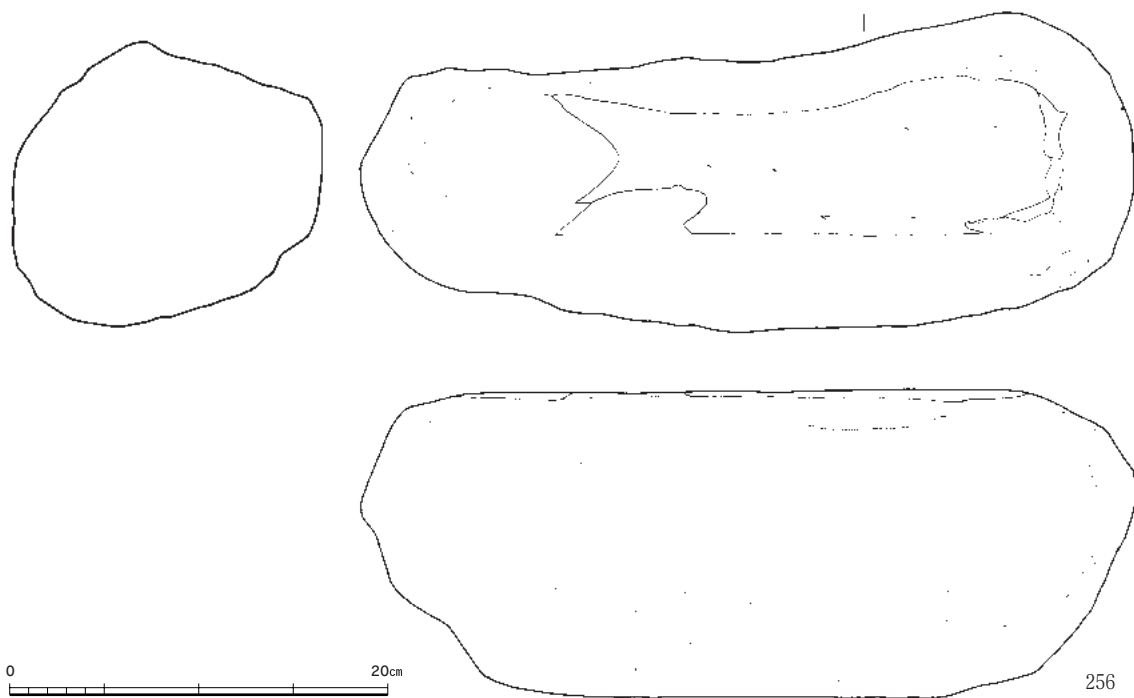
② 石器

磨製石器（図版10、第38図）

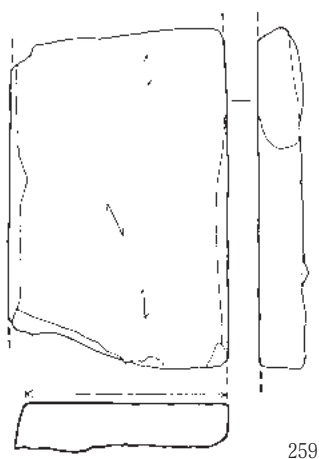
247～251は石庖丁の残欠で、2個ないし1個の紐孔が残る。全て両側から穿孔されている。247・248・251は8号溝、249・250は水田の覆土から出土した。247は凝灰岩製で、本体の大きさに比



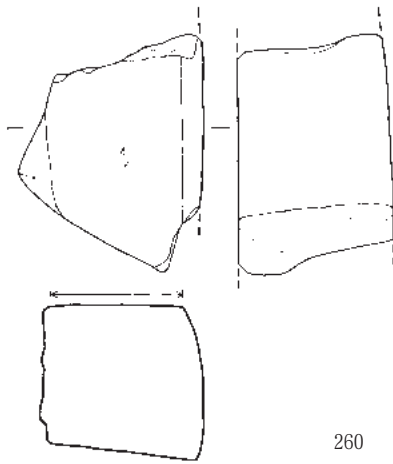
第38図 磨製石器実測図 (1/2)



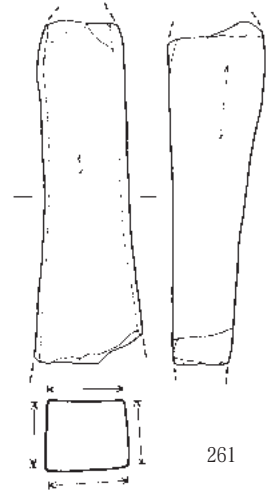
第39図 砥石実測図 ① (1/4 · 1/2)



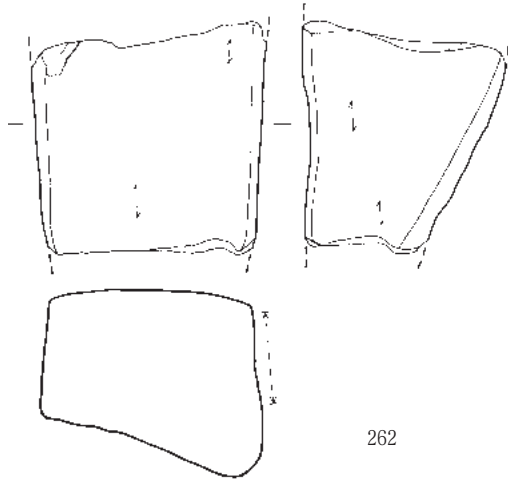
259



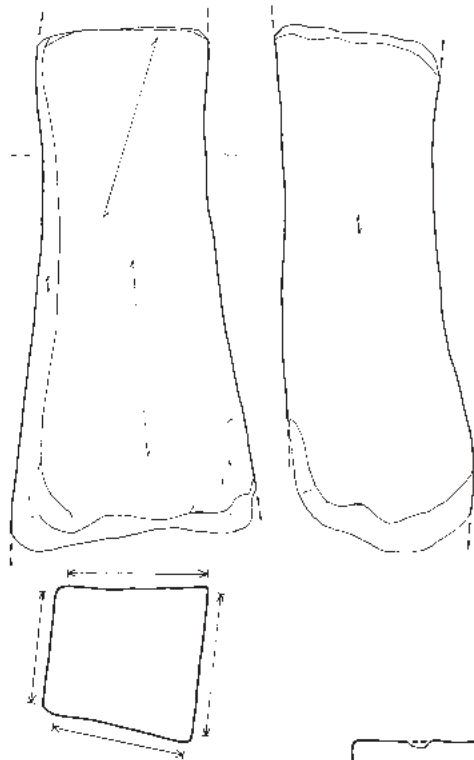
260



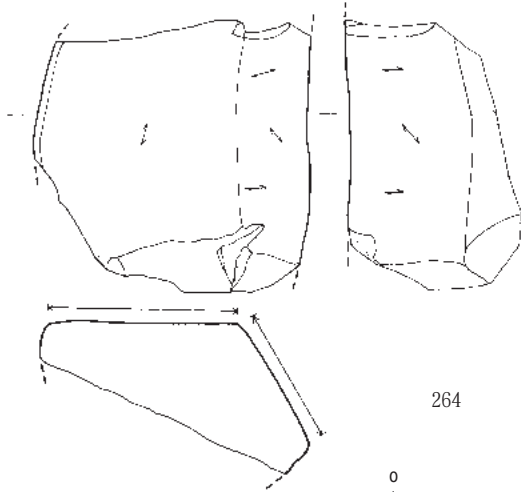
261



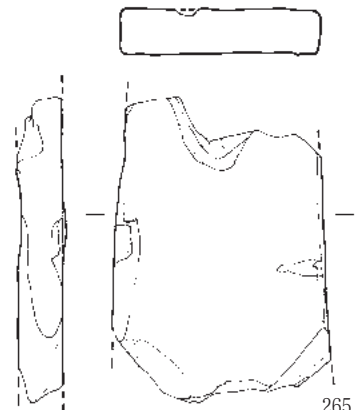
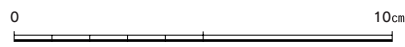
262



263

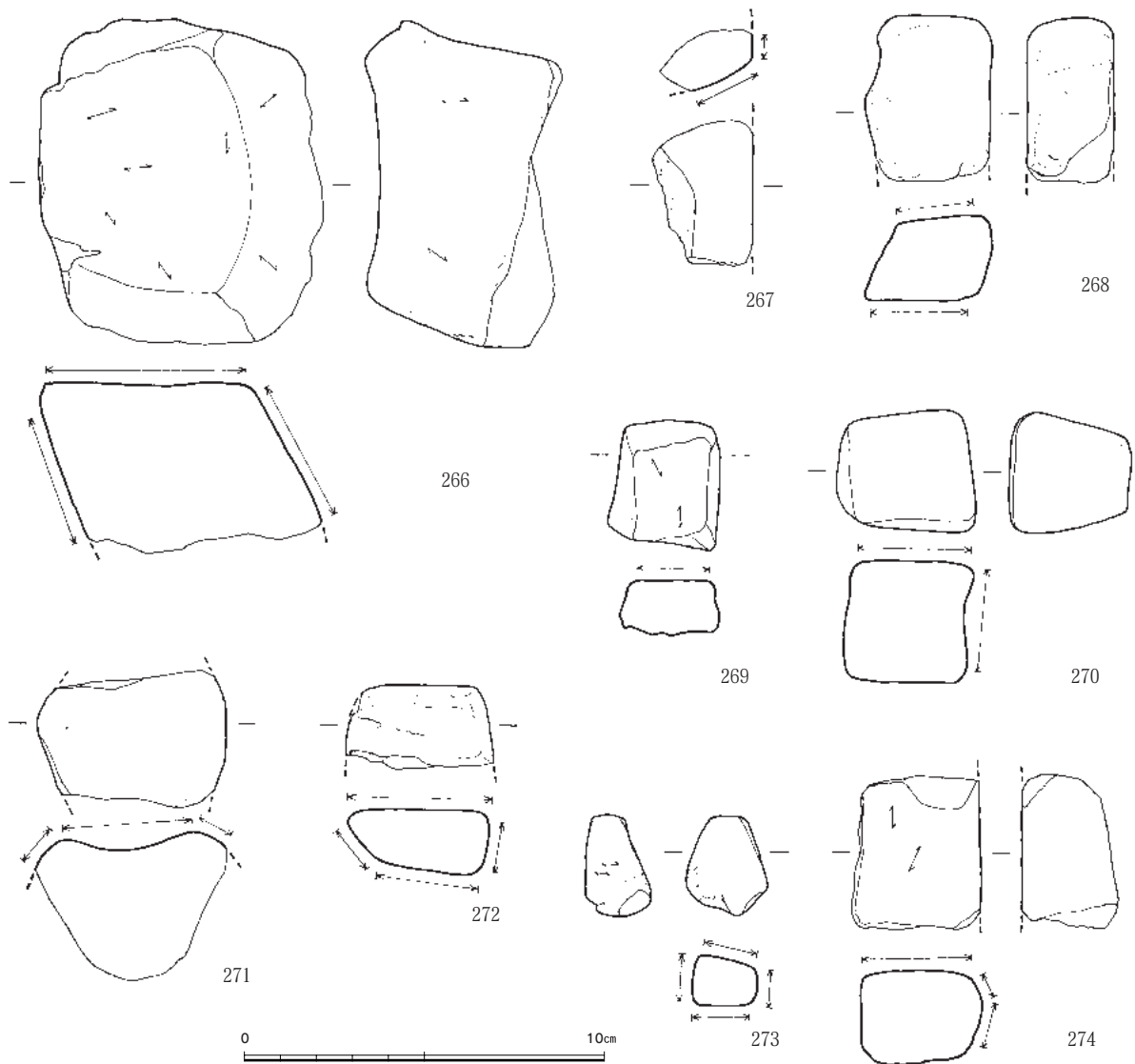


264



265

第40図 砥石実測図 ② (1/2)

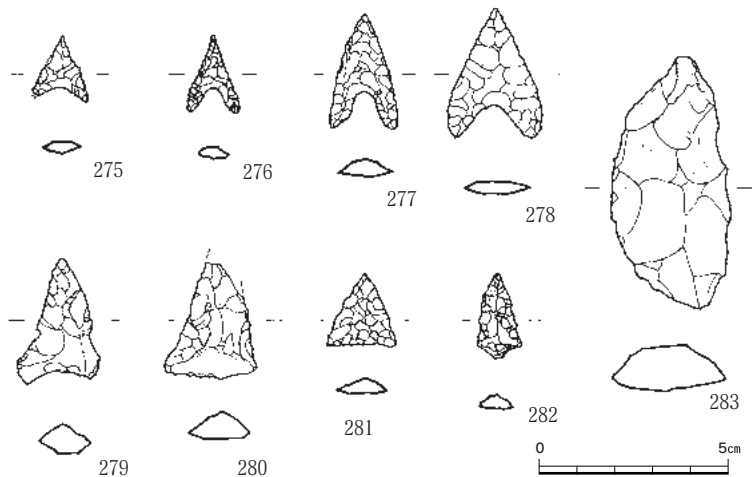


第41図 砥石実測図 ③ (1/2)

して穿孔の径が小さく、あまり使い込まれていないものと思われる。背縁は少し外湾する。248は輝緑凝灰岩製で紫灰色を呈する。立岩産か。249は背縁が直線的で、淡灰色の細粒砂岩製。250は背縁と刃部の斜辺が直線的。凝灰岩製で淡青灰色を呈する。251は乳灰色で凝灰岩か粘板岩と見られる。252は堤状遺構の内部から出土した棒状の石製品。折損しているため全長は不明だが、一方の端部に段を設けて太くしている。細粒砂岩製で灰褐色を呈する。253は刃部が欠けた石斧のように見えるが、これは損耗によるものではなく叩打具と推察される。両側に2対の擦れて凹んだ部分が認められる。グリップを良くするためのものか、何かを取り付けるために出来たものか判断は致しかねる。8号溝出土。安山岩製で灰褐色を呈する。254は2号住居跡の屋内土壌から出土した蛤刃石斧。淡青灰色の凝灰岩製。255は2号住居跡北隅壁際の床面から10cmほど浮いた状態で出土した。形状は非常に整った四角錐だが先端を折損する。淡灰色の砂岩製で用途は不明である。

砥石 (図版10、第39～41図)

256は2号住居跡から床面に着いた状態で出土した。全長約41cm、淡青灰色の砂岩製で、上面の一部が磨かれており、何らかの作業台としての用途があったものと考えられる。257は3面を砥石として使用している。2号住居跡北隅壁際の床面に着いた状態で出土した。258は1号住居跡屋内土壌の落ち際から出土した灰色砂岩製の

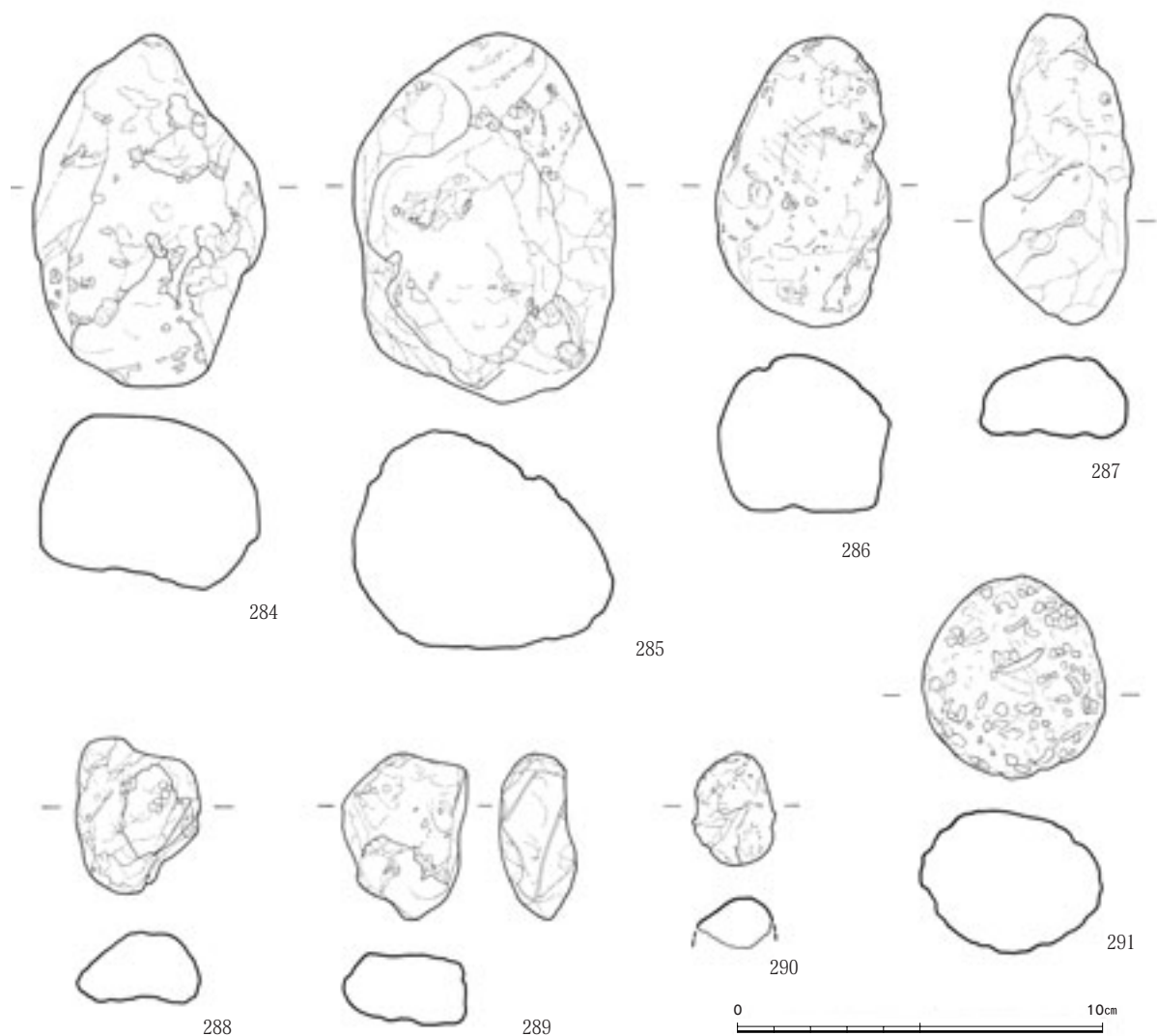


第42図 石鏃・打製石器実測図 (1/2)

の砥石。4面をよく使い込んでいる。259～263は8号溝出土。259は3面を磨いて平滑にしている。灰褐色の細粒砂岩製。260は3面を平滑にしているが、砥石としては1面のみ使用したようである。白色の細粒砂岩製。261は4面を使用し、上面は上端部が少し凹む。262は灰白色の砂岩製で2面を使用している。263は砂岩製で、遺構覆土に含まれる鉄分のため表面が橙黄色を呈するが、本来はやや緑味がかかった灰色と思われる。4面を使用している。264は裏面が剥落しているが2面に砥ぎ痕を残す。石材は白色で粒度が細かい。石英-長石斑岩か。265の石材は灰色の泥岩もしくは粘板岩と思われる。4面は活着しているが表面の剥落が多い。266・267は7号溝出土。266は裏面以外の5面が磨かれて平滑。石材は粒度の細かい凝灰岩であろうか、灰白色を呈す。267は白色の石英-長石斑岩。青銅器鑄型の破片と見られる。268～272は8号溝出土。268・269は鑄型石材の転用と思われる。270は明灰褐色の砂岩で6面とも平滑である。271は粗目の砂岩を多面的に磨き、鞍状を呈する。272は5面が活きる。273は3号住居跡の検出時に出土した。2.7cm余りの小さな砥石だが、多面的に使用され、側面には2条の溝状の凹みを有する。細粒砂岩で灰色を呈する。274は遺物包含層からの出土。鑄型石材の転用と見られ、上面と右側面が平滑である。灰白色を呈するが、左側面のみ赤変している。

石鏃・打製石器 (図版10、第42図)

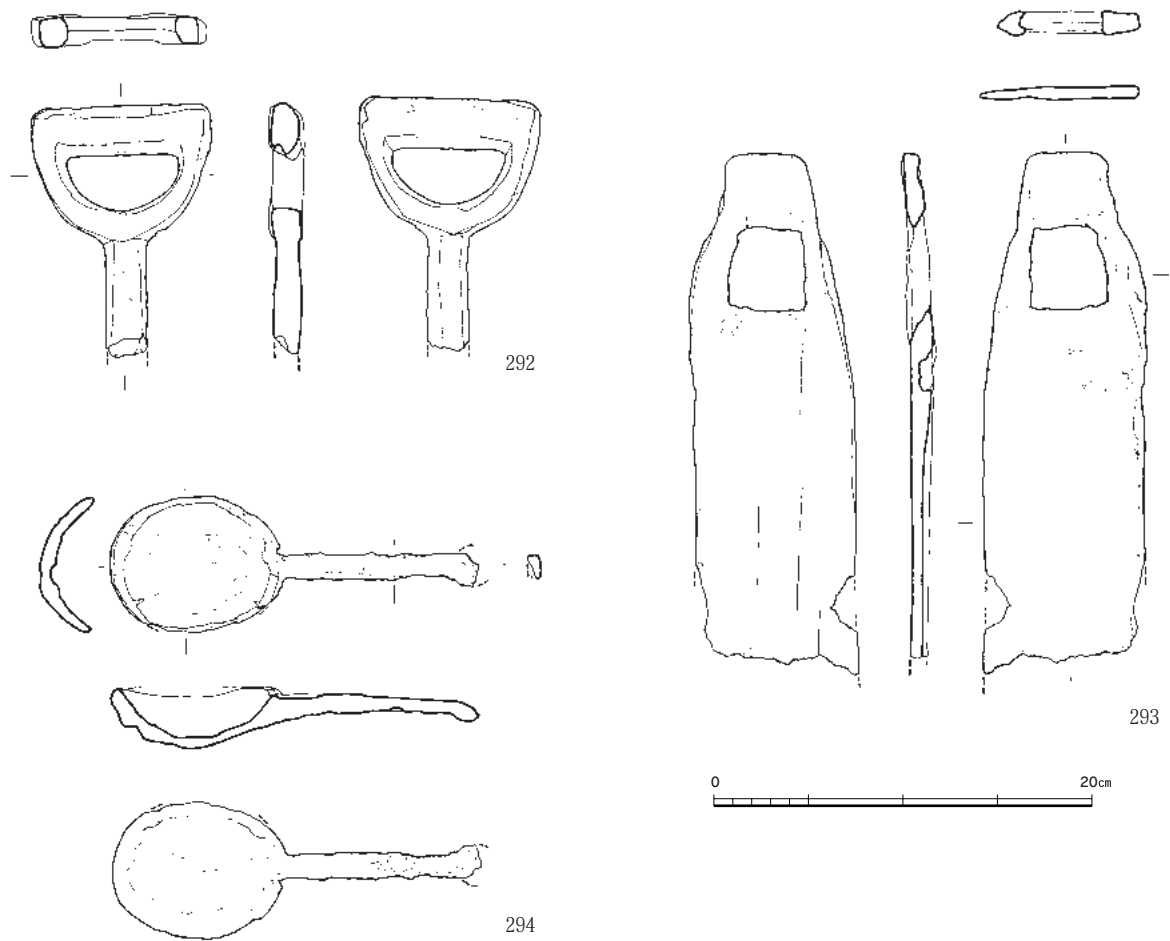
275は安山岩製の石鏃で、抉りは小さく重量0.45g。7号溝から出土した。276は8号溝出土の黒曜石製石鏃で0.55gを量る。277はサヌカイト製で重量1.45g。8号溝出土。278は2号住居跡出土。安山岩製。大きさに比して薄く、重量は2.15gである。279は7号溝出土。黒曜石製で両端が欠けるが、現存での重量3.7gを量る。280も黒曜石製で先端を欠くが、現存の重量4.35g。水田上の洪水砂層から出土した。281は8号溝出土。黒曜石製で整った三角形を呈す。重量0.97gである。282は遺物包含層からの出土。基部中央が突出するあまり見かけない形状である。黒曜石製で重量0.75g。283は厚みのあるサヌカイトの剥片を半月形に整え、両面を加工している。旧石器時代のスクレイパーと見られるが、槍先の可能性も考慮される。7号溝から出土した。



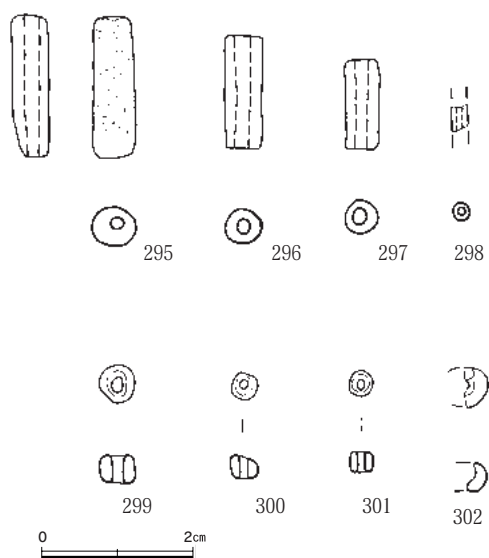
第43図 軽石実測図（1/2）

軽石（図版10、第43図）

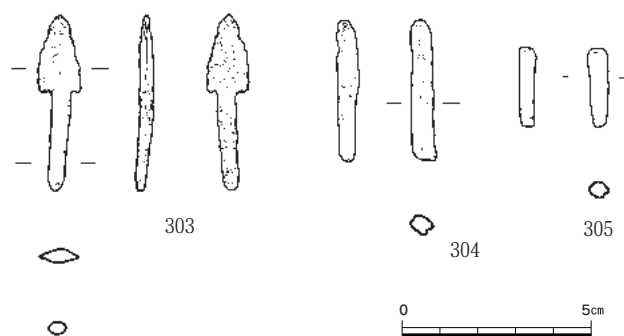
当遺跡からは大小の軽石が出土している。284～290は淡茶褐色を呈する典型的な軽石であるが、用途として漁撈用の“浮き”とするには、意図的な加工が認められず疑問が大きい。むろん、軽石自体は特別に珍しいものではないが、当地では自然に表土に軽石が混入することはなく、これまで発掘調査を行ってきた遺跡でもそう頻繁に出土するものではない。しかし、須玖黒田遺跡、須玖永田遺跡、須玖岡本遺跡（坂本地区）など青銅器生産に深く関わりと想定される遺跡で、しばしば出土することは注目される。284・287・290は8号溝出土。285・286は水田覆土から、288は遺物包含層、289は7号溝から出土している。291は真っ黒で軽石より硬く比重も大きい、大小・長短様々な無数の小穴が表面を覆っており、火山碎屑物の一種と思われる。



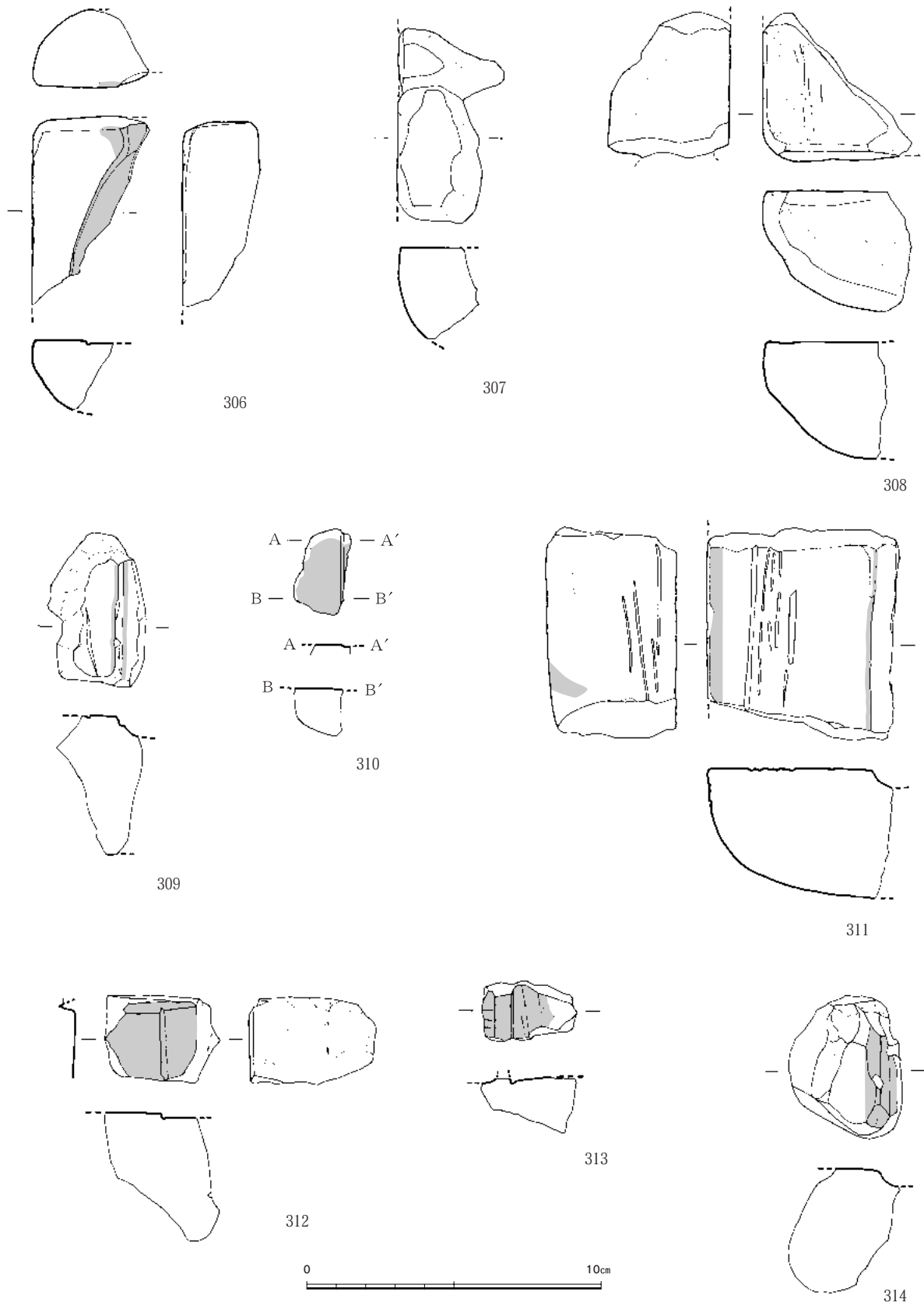
第44図 木製品実測図 (1/4)



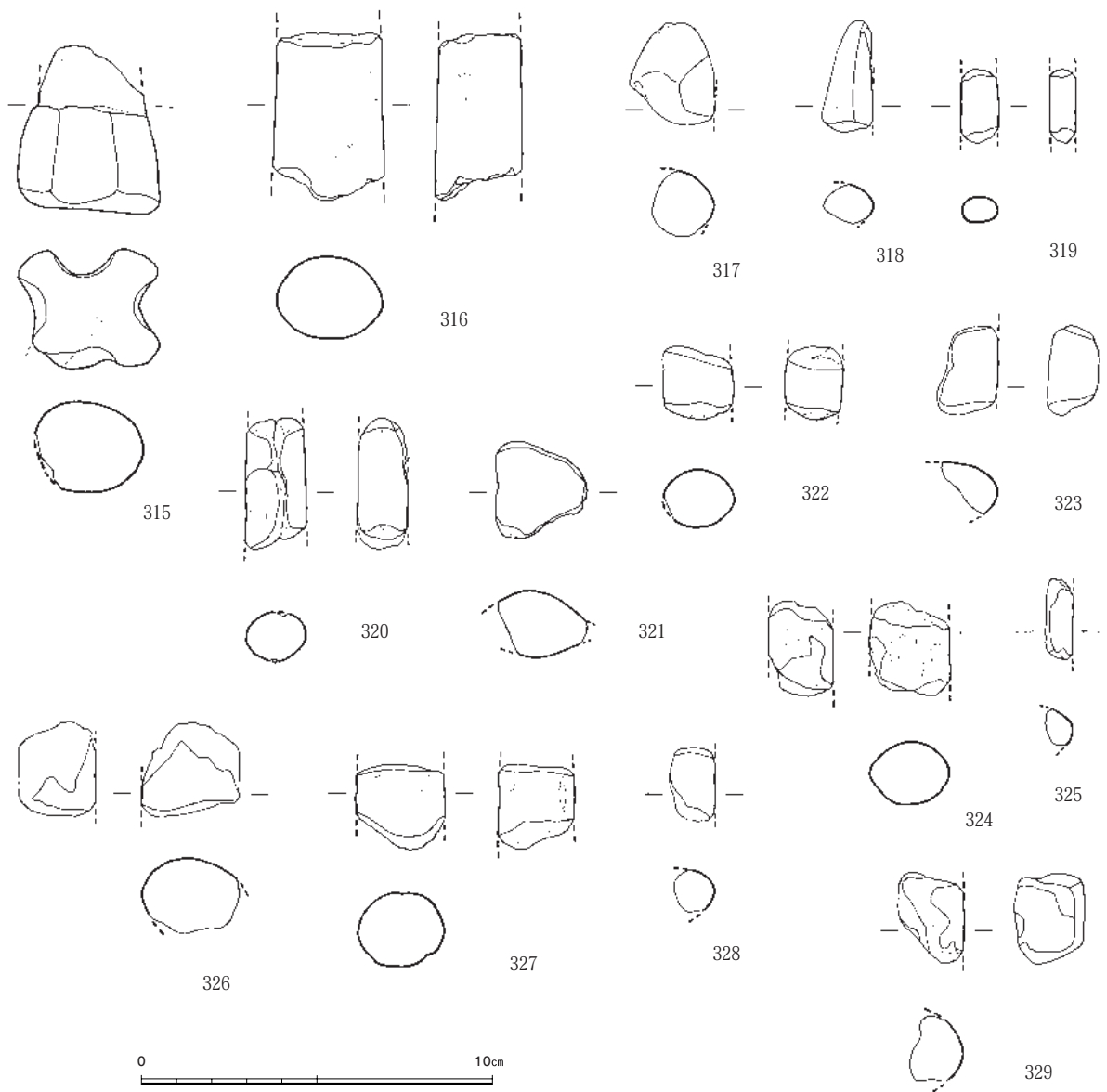
第45図 管玉・ガラス小玉実測図 (1/1)



第46図 青銅器実測図 (1/2)



第47図 石製鑄型実測図 (1/2)



第48図 銅矛中子実測図 (1/2)

③ 木製品

木器 (図版10、第44図)

292は8号溝の最下層から出土した鋤の柄尻。最大幅9.6cm、孔幅5.9cmを測る。柄幅2.3cmで握り部をやや太くしているが、鋤としては小振りである。293は鍬で刃先部を欠く。現存で長さ27.5cm、刃幅8.7cmを測る。かなり薄い作りで、柄の取付け角度は30～35度と鋭角である。294は柄が身に対してほぼ水平に付く杓子である。柄の先端部はわずかに欠けている。水田面から出土したが、本来は堤状遺構に埋まっていた可能性もある。292～294はいずれもカシなどの広葉樹を素材にしているものと見られる。

④ 装身具

管玉・小玉（巻頭図版、図版10、第45図）

295は水田と堤状遺構の境目の確認時に出土した。全長18.5mm、ライトブルーのガラス管玉である。表面に大小無数の気泡が浮き出ており、それが波紋のような縞状に白化している。孔は少し片側に寄り、孔径は上で2.2mm、下で1.7mmを測る。発掘時に下部が少し削り取られている。296は6号溝検出時出土。茶灰色の石材をよく研磨し光沢がある。両端から穿孔されている。297は暗緑褐色の石製で表面に小傷が多い。6号溝出土。298は両端を欠いたガラス管玉としたが、ガラス管を裁断して製作した小玉の可能性もあろう。水田覆土から出土。透明感のある青緑色を呈す。299～302はスカイブルーのガラス小玉。299は5号溝出土。300は遺物包含層出土。301と半分に欠けた302は1号住居跡検出時に出土した。また、図示していないが、遺物包含層からは碧玉製管玉の碎片が出土している。

⑤ 青銅器

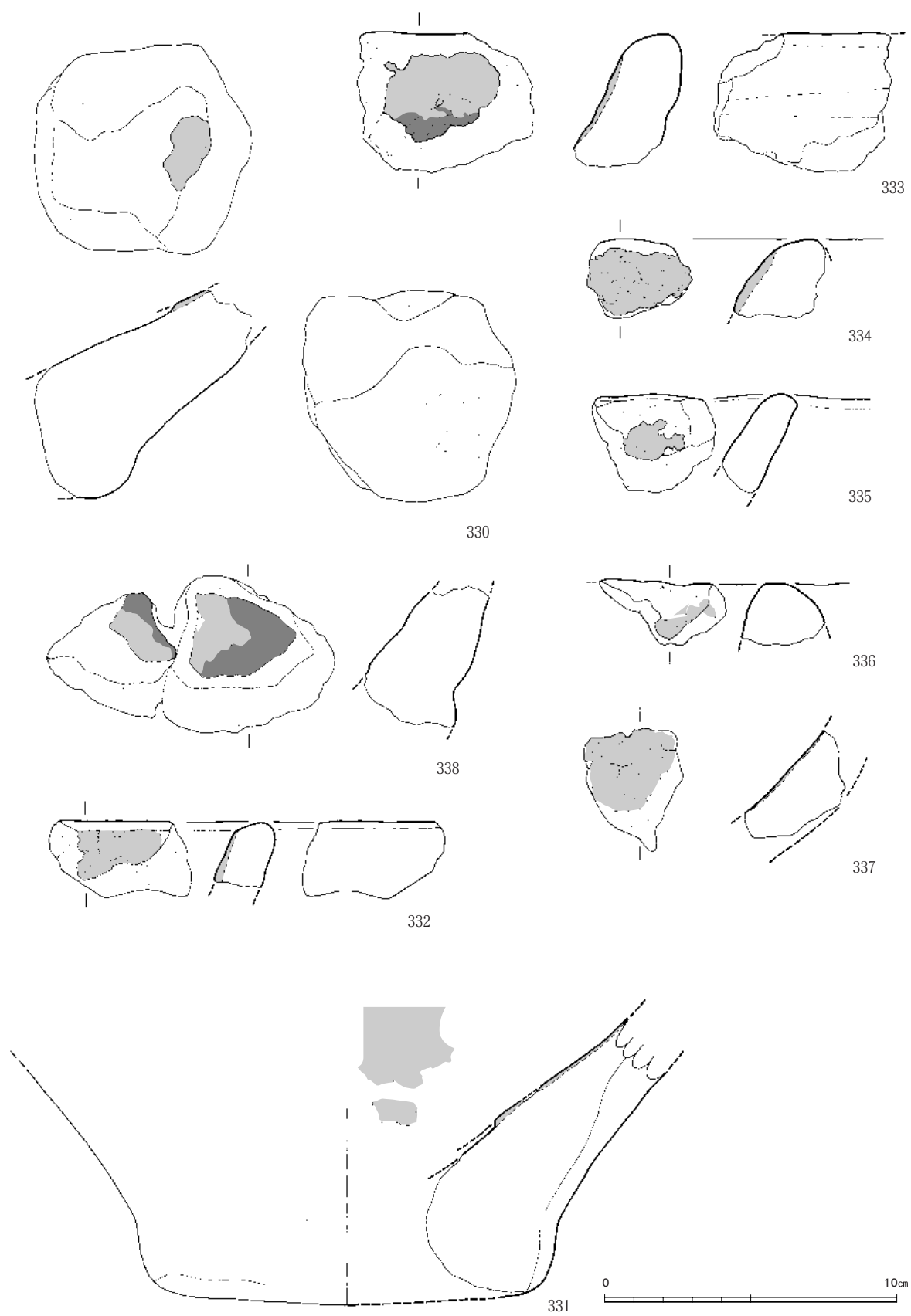
青銅器（巻頭図版、図版10、第46図）

8号溝から小さな青銅製品が3点出土しているが、覆土に含まれる鉄分が付着し、303・305は一見、鉄器のように見えるほどである。303は銅鏃。かえりは小さく刃部の横断面は菱形を呈する。鏃のため鏃は明瞭ではない。茎は長目で少し曲ってしまっており、両サイドには鑄型の合せ目の線が認められる。304は棒状で小銅鐸の舌であろうか。鑄上がりが悪く表面に凹凸が多い。断面形も対称になっていない。両サイドの下半部に合せ型の線が認められる。305は銅鏃の茎あるいは小銅鐸の舌であろうか。両サイドの合せ型の線が顕著で鑄造の痕跡が明らかである。上下の鑄型が対称ではなく、断面形が少し歪んでいる。

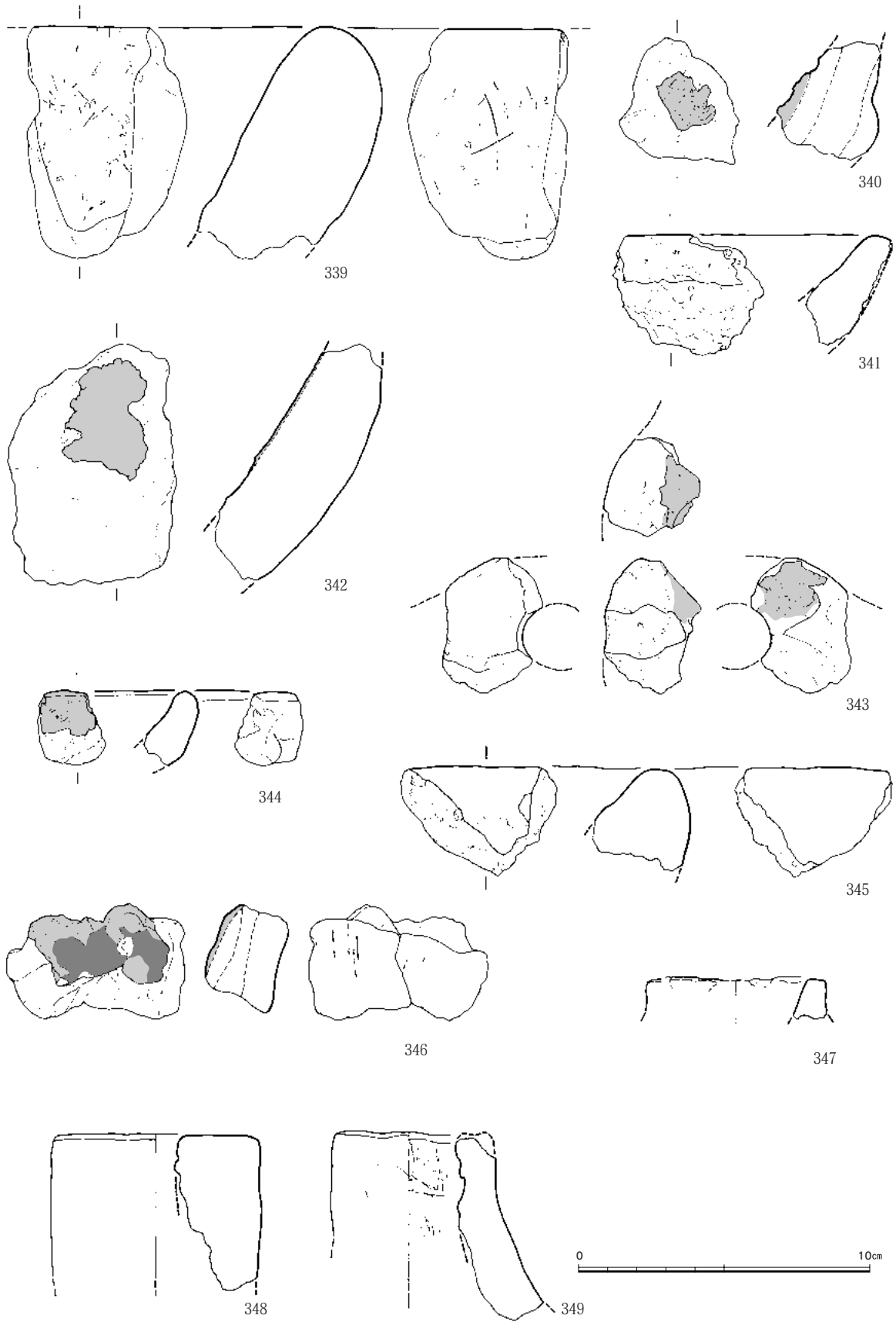
⑥ 鑄造関連遺物

石製鑄型（巻頭図版、図版9、第47図）

306～314は石英 - 長石斑岩製の青銅器鑄型の破片である。これらは彫込み面がないものでも、その形状などから鑄型と判断されるものについて出来る限り図化に努めたが、図化に耐えない碎片が他に7点あり、また、石英 - 長石斑岩のチップが堤状遺構の内部や遺物包含層から8点出土している。306～310は1号住居跡からの出土。311～313は8号溝、314は8号溝中央部の攪乱坑から出土した。306は南壁際で検出した武器形青銅器鋒部の鑄型である。鑄造面から湯流しにかけて黒変している。横断面は蒲鋒形を呈し、鑄型の厚みが2.5cm程度であることから、銅矛ではなく銅戈と思われる。中細C～中広タイプに位置付けられよう。307は2片からなり、屋内土壌から出土した下部と8号溝



第49図 取瓶実測図 (1/2)



第50図 取瓶・鞆羽口実測図(1/2)

から出土した上部が接合した。型の彫込みは認められないが、材質や形状などから鑄型と判断した。活きた面に敲打痕はなく、きれいに研磨されているが、側面は黒変している。308も彫込みが明確でなく器種不明だが、上面は褐色に変色しており注湯されたものと見られる。石材の転用を図ったものと見られ、下側面は周囲を1/3ほど擦り切って折截した痕跡を残している。側面の上部はきれいに研磨されている。屋内土壙から出土した。309は脊部の形状から中広形銅矛と見られる。裏面も黒変していることから両面使用していたことが分かる。北壁際で床面から少し浮いた状態で出土した。310は剣・矛・戈・鏃いずれかの鑄型と思われるが、1面のみが活きた碎片であるため判然としない。合せ面から彫込み面の深さは0.5mmだが、黒変はプライマリーなので研磨は受けていないと判断される。屋内土壙から出土した。311は中広形銅矛の鑄型と見られる。上面右側の深い部分が脊で、左端の上下を貫く細い溝は刃部の際を表しているものと考えられる。上面左半と側面上部を縦筋状に引掻いたうえ、上面を再研磨している。研磨痕は縦筋の左が粗く、右側は精密になっている。脊のエッジ部と上面左端に黒変した痕跡が残り、側面から裏面にかけても一部黒変している。312は銅戈の内の部分が彫込まれている。上面全体が黒変しており、胡の部分で特に黒味が強い。鑄型は破損後に再利用が図られたらしく、胡の部分で擦り切って折截し、この面を粗く研磨している。313は鑄造面の一部だけが残っている。樋の部分と判別出来るが、銅戈の鑄型であろうか。表面は強く黒変し、型を彫込んで凹んだ部分にはカーボンの付着が残っている。鑄型として突出する部分が剥離しているため、断面形状の凹凸が小さくなっている。314は剣あるいは矛の鑄型と思われるが判然としない。脊の部分が黒変しているが、破損後は砥石に転用しており、鑄造面を含め多面的に研磨している。

銅矛中子（図版9、第48図）

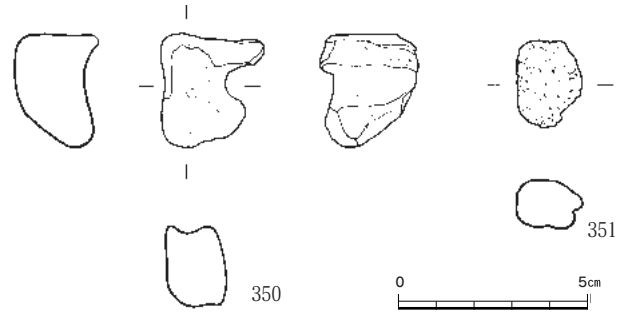
315～329は銅矛の袋部を作り出すために使う鑄型の中型である。“鑄型”と言った場合は、一般に石製の外型を指すのに対し、キメの細かい砂質の粘土（真土）を用いる中型は“中子”と呼ばれている。315・319・320は堤状遺構の内部、316は堤状遺構下に検出した溝から、317・318は8号溝、321～323は水田覆土、324・325は2号住居跡、326は7号溝、327・328は7号溝検出時、329は8号溝検出時に出土した。いずれもかなり軟質で、淡黄灰色から暗茶褐色にかけての色調である。315は中広形銅矛基部の湯口部分にあたる。ハバキ部の境に段を設け、4条の溝から鑄型と中子の間隙に湯（溶銅）が流れ込むようにしている。下端部の中央を少し凹ませ、ハバキ部の横断面形はやや横広のX状を呈する。胎土は灰黄褐色の真土だが、湯口は離型剤が塗布されているためか、やや灰黒色を呈している。316は基部近くのもので、断面形は少し横広の楕円形だが両側の稜線は明瞭ではない。最大幅3.15cmの部分で厚み2.45cmを測る。317・318は碎片で表面が磨滅しているため、断面形上に活きた面が僅かしかないが、本来の横断面形は316に近いものであろう。319はかなり扁平で径が小さい。先端に近い部位であろう。320は3片に割れている。横断面の形状は316と大差ないが、最大幅1.72cmの部分で厚み1.43cmを測る。321の断面は紡錘形になるものと思われる。322は左側辺の下部が僅かに削られているが、ほぼ本来の断面形を保持している。323は左半を大きく損なうが、316より少し扁平な断面形状を呈すものと思われる。324は表面が荒れているが、本来の断

面形状は保持している。325は左側を半分以上失っている。本来は320に近い大きさであろうか。326は表面の右下半分ほどが剥落している。327は表面が少し荒れているが、横断面の全周が活きており、幅2.5cm、厚さ2.15cmを測る。328は左半を失うが、本来は320に近いところであろう。329は左半が失われ、表面も剥落して活きた面が少ない。327に近い大きさと見られる。

取瓶・鞆羽口（図版9、第49～50図）

青銅器の鑄造に使われる土器に坩堝と取瓶がある。坩堝は其中で銅や錫などを溶かし、青銅の“湯”を作るための溶解容器である。また、取瓶は坩堝で溶かした湯を受け、鑄型に注ぎこむための容器であるが、両者とも煮炊きなどとは比較にならない高温を受けるため、普通の土器にはない共通点が見られる。取瓶は高熱のために内面が硬化・変色していたり、真土を塗りつけるなど特殊な造作を施すものが多く、坩堝はより激しい高熱に曝されることが想定される。近年は比恵遺跡や須玖岡本遺跡（坂本地区）などで全体像を想定しうる資料も知られるが、なお、弥生時代の段階では器の形そのものに不明な点が多く、破片資料で両者を判別することは困難である。ここでは、内外面とも硬化・変色が見られる資料はないため、330～346の土器片を取瓶として扱う。330～337は8号溝から出土した。330・331は取瓶底部の破片と考えられる。磨滅が進み活きた面が少ないが、内面に塗付された暗灰色の真土のごく一部が残っており、強い二次焼成を受けた痕跡が認められる。胎土は砂粒を多く含むが普通の土質で、内面の真土にも粗砂が少し含まれている。全体的に厚手で、外面はヘラ状工具の粗いナデを残し、造作が粗雑な印象を受ける。接合面はないが同一固体の可能性はある。332～336は口縁端部の小片。332は上面が平坦に均され直線的である。胎土に石英、長石をやや多く含み、微細な黒雲母をわずかに含む。土器自体の焼成は普通だが、内面に塗りつけた真土は二次焼成のため硬化し、下半は鬆立ったような気泡が出来ている。暗灰褐色を呈し、内面の真土は青灰色である。333は分厚い作りで、直径20～25cmの鉢形になると考えられる。胎土は砂粒を多く含んで粗く、スサを混入させている。内面は二次焼成のため硬化し、青灰色に変色しているが、この部分にも砂粒が多く、土質自体に大きな相違は認められない。濃いアミ掛け部分は、検出時は緑青をふいていた。334は胎土に砂粒をやや多く含む。焼成・色調は本体部分は普通で橙灰色だが、内面は強い二次焼成のため3mm以上の厚さで青灰色に硬化・変色している。335は表面が荒れて調整不明だが、厚みは12～15mmで一定し、割と丁寧に成形されている。胎土は砂粒やや多く、スサがかなり多く混ぜ込まれており、外面に小孔が目立つ。色調は橙灰色を基調とするが、内面は白っぽく、一部は淡青灰色に焼けて硬化している。336はかなり分厚く、丸みのある口縁先端部の破片で、傾きなどは明確ではない。胎土はキメの細かい粘土に砂粒を少しとスサを含む。淡茶褐色で普通の焼成だが、内面の下部は高熱を受けて青灰色に変色・硬化している。337は器外面に活きた部分が残っていないため、厚みが2.1cm以上としか分からず、傾きも不詳である。胎土・焼成は砂粒を少し含む普通であるが、内面にはキメの細かい真土を薄く塗付けている。青灰色のこの真土には二次焼成で硬化し細かいヒビが入っている。338は水田覆土から出土した2片を接合したものである。底部近くの部位であろう。外面はナデ調整するが、指頭押圧痕や工具の当て傷が残っている。外径23cm程度で分厚い作りの浅い鉢状

の土器になるものと見られる。胎土に砂粒多く含み、スサを混入する。焼成・色調については、外面は普通で橙灰色だが、内面は高熱を受け赤っぽく変色し、一部（濃いアミ掛け部）溶銅が付着し灰色になっている。339は金属の付着や硬化面などは認められないが、胎土にスサを大量に含み、厚みは4cmを超え



第51図 銅滓・その他実測図（1/2）

る。器面はナデ調整されるが外面に指頭圧痕を残す。340は胎土に砂粒、スサを含む。内面に塗られた真土は青灰色に焼けて硬化するが、質が粗く、粗砂粒やスサを混入する。土器本体は外面が淡茶灰色、内部が橙色、内面が白色と明瞭な層をなしている。341は直径20cm前後の鉢状になると思われる。口縁端部は平坦に仕上げている。胎土に大小の砂粒を大変多く含み、粘土の質も粗い。外面は表面のほとんどが剥落している。内面にはキメの細かい粘土を薄く塗りつけ、さらに真土を塗り重ねている。真土は青灰色に変色し硬化しており、細かいヒビが入っている。342の胎土はスサとともに大小の砂粒を非常に多く含んでいる。土器自体の焼成は普通。内面の一部は二次焼成のため青灰色に変色・硬化しているが、特に真土を塗りつけたようには見えない。外面はナデ調整するか指頭圧痕による凸凹が多い。343は直径約2cmの注口を有する取瓶と見られる。器壁の厚みは注口部で2.7cm程度。浅い鉢状を呈し、注口部の上縁が少し盛り上がり、やや外側に突き出た形状と考えられる。本体の胎土は普通で砂粒を少し含みスサ等の混入は認められない。焼成も普通だが、注口内面の外側がやや強く熱を受けたように赤変している。器内面に塗られた真土は明らかに高熱を受けて硬化し、青灰色を呈している。外面の調整は概ね横方向にナデ、指頭圧痕も残る。残存面が少ない小破片だが、須玖岡本遺跡（坂本地区）や比恵遺跡40次調査^{註1}で出土した取瓶と近似した形態になるものと考えられる。344は厚みが1～1.4cm前後で、直径4～5cm程度の小さな坏状になると考えられる。胎土にはスサを混ぜ込み、内面に薄く塗り付けた真土は青灰色で硬化している。345は厚みが3.3cmを超え、丸まった端部である。直径20cm前後の浅い鉢状を呈すると考えられる。胎土に大小の砂粒やスサを大量に混ぜ込んだ極めて粗い粘土を用いているが、表面を均した後に内外面ともキメの細かい真土を薄く塗付している。土器自体は普通に焼成されて淡橙灰色だが、真土は淡青灰色を呈す。内面下部が高熱を受けたためか少し赤変し、真土が剥げて荒れている。346は直径20～25cm程度になると見られ、外面をハケ目調整する。胎土には砂粒を少し含み、スサ等の混入は認められない。土器の破断面は層をなし、外側は普通に橙色だが内部は白～桃色で、内側は二次的な被熱のためか赤変している。内面は厚く真土が塗り付けられ、明らかに高熱を受けて硬化し、青灰色に変色している。339・343・345は堤状遺構の内部からの出土。340・341は堤状遺構基底部下の溝から出土した。344は1号掘立柱建物跡P-1から、346は8号溝の掘方確認時に出土した。347は5号溝からの出土。口縁径を復元すると6.2cm程度になると見られる。胎土は砂粒を少し含み、全体が明灰色で硬く焼け締まっているが、二次焼成によるものと思われる。下部断面は滑らかに凹んでおり、剥離した面であることを窺わ

せる。以上の特徴から須玖五反田遺跡などで出土した“ガラス罎埴”と同様のものを想定したが、ガラス質の付着などは認められない。鞆羽口の先端部の可能性も考慮されよう。348・349は鞆羽口であろう。8号溝から出土した。348は特に強い熱を受けた痕跡や、特殊な粘土の使用などは認められず、鞆羽口と断定するには根拠に乏しいとも思えるが、上端を極めて扁平に整えるなど、通常の器台などには見られない形状である。表面を丁寧にナデ調整し、直線的な筒型で、外径7.2cm、孔内径1.5cmに復元される。349は先端部の外径5.6cm、孔内径3.2cmである。胎土は粗砂を多く含み、スサを混ぜ込んでいる。焼成は普通で橙褐色を呈する。外面は粗くヘラ状工具でナデ成形した後、軽く縦方向にナデている。内面に見られる凹凸は、縄を巻いた筒状のものに粘土を貼り付けて、この土器が製作されたことを示すものと思われる。裾部は全周均等に広がるのではなく、片方に偏って湾曲した形態となる可能性もあろう。

註1 田中壽夫『比恵遺跡13』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第368集（1994）

銅滓・その他（図版9、第51図）

350は8号溝の遺構検出時に出土した石製品。青銅器鑄型に多く用いられる石英 - 長石斑岩に似た感触の石材だが、表面が著しく焼けており肉眼観察では判別しがたい。上面と右側面に幅1cmほどの溝状の凹みが作られており、凹みの中に赤色の付着物がある。単なる砥石とは思われず、用途不明ながら取り上げたものである。351は堤状遺構の内部から出土した銅滓。白っぽい青灰色を呈するが、検出時は少し緑味がかっていた。不純物が多いためか、全体が鬆立ったように大小の気孔が無数に認められる。重さは2.3gと大きさに比してかなり軽く感じられる。

IV まとめ

調査面積が狭小で、遺跡の全体像は未だ明らかとはいえないが、今回の調査で得た成果を周辺の状況と併せて考察し、若干の所見を述べてまとめとしたい。

前述した通り、須玖尾花町遺跡は春日丘陵先端部の東斜面、丘陵と低地の境目に展開する集落遺跡である。約400㎡の調査区はまさに丘陵裾部と低地とに分かれ、丘陵上には弥生時代中期から後期末にかけての竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡3棟、低地に水田跡を検出した。当然、建物跡と水田はきわめて近接するが、その間には幅2～3.5mの直線的な8号溝が通り、集落と水田を明確に区画している。東西方向に一直線に走るこの大溝は、西側では須玖岡本遺跡（坂本地区）を経て、約340m離れた須玖坂本B遺跡まで続く可能性があることから、広範な“街区”を構成するものとの指摘^{註1}がある一方、単純に連続するのではなく、それぞれに重要施設との連関を想定する論も示されており、とりわけ、須玖遺跡群の北部に展開する工房地帯で検出される溝には、強い関心が集まっているところである。ともかく、当地点ではこの溝は丘陵に沿って落ち際をカットして、その廃土を対岸に堤防状に盛土することによって形成されており、現存で深さ約60cmを測るが、当地の削平状況を勘案すると本来1m以上の深さであったものと見られる。いくつかのまとまりを持った杭列が溝を斜行するように検出されたことから、堰のような施設が設置されていたことは確実で、この溝が水田とは不可分の用水路として機能していたことを裏付けている。また、溝の北壁を形成する堤状遺構は、中期末の小溝を水田耕作土と同様の黒色粘質土で埋めて幅約3mの基底部を作り、溝の掘削土を盛り上げて上半部を版築状に築成している。これを単なる水田の大畦畔と見るには、水田面との比高差が大きいように思える。溝と水田を覆う砂層は、ほとんど同様の粗砂粒で構成されており、この溝が水田とともに短期間に埋没したことを示している。堤状遺構が内包する土器には、ほとんど中期末頃より新しいものが見受けられない一方、溝と水田の覆土に包含される遺物は、ともに中～後期の土器が混在するものの、後期の土器が主体を占め、特に溝底において後期後半の土器が良好な状態で出土していることから、この溝は後期前半に掘削され、後期後半まで機能していたものと理解される。本遺跡を含めた春日丘陵北部の東側に広がる弥生時代から古代にかけての水田の範囲については、当遺跡を西限として北東方は日の出小学校にかけて、南側は県道31号線に沿って陸上自衛隊駐屯地の大部分を含んだ約15haを想定^{註2}している。今回の調査地に限れば、当地周辺の低地は中期末頃には開田されていたものと見られる。そして後期前半に丘陵上の集落が低地の際まで広がってきたことから、区画の明確化のため溝が掘削されたものと考えられる。しかし、やがて奴国中枢域の縮小に伴い集落が廃れて行くと、機能を失い管理が行き届かなくなった溝は水田とともに、急速に埋没したとする想定が成り立つのではなかろうか。

丘陵上の建物跡については、概ね溝と方向を同じくしている点は注目される点である。もちろん地形的に建築物の配置が制約されたものとも解されるが、これほど近接した位置にあり、同時期に存在していた建物と溝が互いに関連を持たないものと考えすることは、むしろ不自然であろう。今回の

調査では竪穴住居跡と掘立柱建物跡を合わせて6軒検出したが、遺構配置から見て同時に存在する建物がないことは明らかである。出土遺物によって先後関係を判断することは困難だが、遺構の切り合い関係から推測すると、まず、小規模な3号掘立柱建物が建てられた後に竪穴住居が造られ、再度、掘立柱建物へと規模を拡大しながら建て替えられていったものと考えられる。特に2号掘立柱建物跡は少なくとも一辺9mを越える大型の特別な建物と見ることができ、須玖岡本遺跡の首長層墓域の東側から須玖尾花町遺跡にかけての緩斜面に後期の中心的集落が展開する可能性を濃くしている。この想定が成り立つならば、先述した堤防状の盛土と溝には、単なる水田の大畦畔と用水路にとどまらず、重要施設を守備する土塁や濠のような防御的機能が、兼ね備えられていた可能性を見ることも出来るのではなかろうか。



第52図 春日丘陵東部低地における弥生時代の水田域

なお、住居跡や大溝、堤状遺構の内部から、鋳型片など多数の青銅器生産関連の遺物が出土したことは特筆されよう。当遺跡の堤状遺構は中期末には築成されたものと見られ、それまでには当地に近接する位置において青銅器生産が開始されていたことを物語っている。平成5年4月には県道を挟んで西方20mの位置で2次調査を行い、8号溝の続きを検出しているが、1次調査に比して他の遺構の密度は薄く、鋳造関連遺物の出土も格段に少ない。また平成13年は南西隣地を試掘しており、掘立柱建物跡と考えられるピットおよび竪穴住居跡や溝と見られる遺構を確認した。いずれにしても、1次調査地点の南方で本格的な青銅器生産が行われていたものと見られる。当地の西方約230mは奴国最大の青銅器生産工房である須玖岡本遺跡（坂本地区）が同時期に展開しており、周辺の調査が進展するにしたがい、これらの遺跡はより一体的に捉えられるようになるものと思われる。今後、この奴国中枢域の工業センターは私たちの前にどのような姿を現してくれるのであろうか。

註1 武末純一『日本史ブレット3 弥生の村』山川出版社（2002）

註2 境靖紀『大荒遺跡 天田遺跡』春日市文化財調査報告書第30集（2001）

土器・土製品観察表

挿図	No.	出土遺構	器種	残存度	胎土	色調	焼成	調整および特徴
16	1	1号住居	無頸壺	口縁部1/6	1.0~2.0mmの砂粒を少量含む	淡黄褐色	普通	ヨコナデ、ナデ、丹塗り痕跡
16	2	1号住居 貼床下	壺	口縁部小片	0.5mmの砂粒を含む	淡黄白色	普通	ヨコナデ、丹塗り痕跡
16	3	1号住居 屋内土壌	壺	頸部小片	0.5~2.0mmの砂粒を含む	淡黄褐色	良好	ナデ、ヨコナデ、風化進む
16	4	1号住居	瓢形 土器	くびれ部 小片	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	橙褐色~ 暗灰色	良好	ヨコナデ、ナデ、丹塗り
16	5	1号住居	甕	上半部1/6	粗砂粒を多く含む、赤色粒子・ 金雲母少量含む	褐色	良好	ヨコナデ、ナデ、外面ハケ目
16	6	1号住居	甕	口縁部小片	粗砂粒を多く含む、赤色粒子少 量含む	黄褐色	普通	ヨコナデ、風化進む
16	7	1号住居	甕	口縁部 1/8	粗砂粒を多く含む	明褐色	良好	ヨコナデ、ナデ
16	8	1号住居	甕	底部片	粗砂粒を多く含む、角閃石少量 含む	黄褐色	普通	外面ハケ目
16	9	1号住居	甕	底部1/4	粗砂粒を少量含む	明褐色	良好	外面ハケ目、底に煤付着
16	10	1号住居	壺	頸部突帯部 小片	0.5~1.0mmの砂粒を含む	橙褐色	良好	ナデ、ヨコナデ、丹塗り痕跡
16	11	1号住居	土製品	ほぼ完形	0.5mm程度の砂粒を少し含む	暗茶褐色	良好	径2.2cmのボタン状
16	12	2号住居	壺	口縁部片	0.5~3.0mmの砂粒を含む、雲母 少量含む	淡橙褐色	良好	ヨコナデ、ナデ
16	13	2号住居	無頸壺	上半部	0.5~2.0mmの砂粒を含む、雲母 少量含む	淡橙褐色	良好	丹塗り痕跡、器面剥落著
16	14	2号住居 貼床下	甕	上半部	0.5~2.0mmの砂粒を多く含む	淡橙褐色	良好	ハケ目ナデ消し
16	15	2号住居	甕	上半部	0.5~3.0mmの砂粒を多く含む	淡黄褐色	良好	ハケ目、ナデ、煤付着
16	16	2号住居	甕	上半部1/3	0.5~1.0mmの砂粒を多く含む、 雲母少量含む	暗茶褐色	良好	ハケ目、ナデ、内外面に煤付着
16	17	2号住居	甕	口縁部小片	1.0~3.0mmの砂粒を含む、雲母 やや多く含む	淡橙褐色	良好	ヨコナデ、ナデ、外面ハケ目
16	18	2号住居 貼床下	甕	口縁部小片	1.0~4.0mmの砂粒を含む	明茶褐色	良好	外面ハケ目、内面ナデ
16	19	2号住居	甕	口縁部小片	0.5~2.0mmの砂粒を含む、角閃 石少量含む	濃乳白色	やや 不良	風化のため調整不明
16	20	2号住居	甕	底部片	1.0~4.0mmの砂粒を多く含む、 雲母角閃石含む	赤褐色	良好	ナデ
16	21	2号住居	器台	裾部1/2	1.0~4.0mmの砂粒を含む	暗茶褐色	良好	ナデ、指頭押圧痕
16	22	3号住居	甕	口縁部小片	0.5~2.0mmの砂粒を含む、角閃 石少量含む	淡黄褐色	良好	ヨコナデ、ナデ
16	23	3号住居	壺	底部1/3	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	淡茶灰色	良好	ハケ目、ナデ
17	24	1号掘立 P-1	器台	頸部突帯部 1/3	1.0~2.0mmの砂粒を含む、角閃 石・金雲母・赤色粒子少量含む	明褐色	良好	ナデ、指頭押圧痕、下半をミガキ 調整
17	25	2号掘立 P-3	甕	底部1/2	細砂粒を少量含む、赤色粒子・ 角閃石・金雲母少量含む	明褐色	良好	ハケ目、ナデ
17	26	2号掘立 P-3	甕	口縁部小片	1.0~3.0mmの砂粒を多く含む、 赤色粒子・金雲母少量含む	淡暗褐色	良好	ヨコナデ
17	27	3号掘立 P-2	甕	底部1/6	粗砂粒を多く含む、角閃石・金 雲母・赤色粒子少量含む	淡黄褐色	良好	ナデ
17	28	3号掘立 P-2	甕	口縁部小片	粗砂粒を多く含む、赤色粒子・ 角閃石・金雲母少量含む	黄褐色	良好	ヨコナデ、ナデ、ハケ目ナデ消し
17	29	P-29	無頸壺	完形	0.5~1.0mmの砂粒を多く含む	暗灰色	普通	粗いヘラナデ
18	30	溝-1	甕	口縁部小片	1.0~4.0mmの砂粒を多く含む	淡橙褐色	やや 不良	調整不明
18	31	溝-1	甕	上半部1/4	0.5~3.0mmの砂粒を含む、赤色 粒子少量含む	暗茶褐色	やや 不良	調整不明、ナデ? ミニチュアの甕形土器
19	32	溝-6	壺	口縁部1/4	0.5~4.0mmの砂粒を含む、赤色 粒子少量含む	橙褐色	良好	ナデ、ヘラ磨き、丹塗り痕跡

挿図	No.	出土遺構	器種	残存度	胎土	色調	焼成	調整および特徴
19	33	溝-6	壺	頸部1/4	0.5~2.0mmの砂粒を多く含む、 金雲母含む	茶褐色	良好	ハケ目、指頭押圧痕
19	34	溝-6	壺	頸部1/4	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	黄褐色	良好	ハケ目後ナデ、指頭押圧痕
19	35	溝-7	壺	口縁部小片	0.5~5.0mmの砂粒をやや多く含む	淡黄灰色	不良	調整不明
19	36	溝-6	壺	底部3/4	1.0~3.0mmの砂粒を含む	淡橙褐色	良好	ナデ、指頭ナデ
19	37	溝-6	甕	口縁部小片	1.0~4.0mmの砂粒を多く含む	茶褐色	良好	ヨコナデ、ナデ
19	38	溝-6	甕	口縁部小片	0.5~3.0mmの砂粒を多く含む	淡橙褐色	良好	ヨコナデ、ナデ
19	39	溝-7	甕	口縁部小片	0.5~3.0mmの砂粒を多く含む	茶褐色	良好	ヨコナデ、ナデ
19	40	溝-6	甕	口縁部小片	0.5~2.0mmの砂粒を多く含む	黄茶褐色	やや不良	調整不明
19	41	溝-7	甕	底部1/2	1.0~4.5mmの砂粒を含む	橙褐色	良好	内面底ハケ目、外面ナデ
19	42	溝-7	高坏	受部1/2	0.5~3.0mmの砂粒を少量含む	茶褐色	普通	ナデ
19	43	溝-7	高坏	受部片	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	茶褐色	普通	ナデ
19	44	溝-6	手握甕	底部片	1.0~4.0mmの砂粒を非常に多く含む	淡橙褐色	普通	ナデ
19	45	溝-6	手握器台	上端部欠	1.0~2.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	茶褐色	良好	指頭ナデ
20	46	溝-6	土師器壺	口縁部片	1.0~5.0mmの砂粒を多く含む	淡褐色	良好	ナデ、ヨコナデ
20	47	溝-6	土師器高坏	脚部片	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	橙褐色	良好	ナデ
20	48	溝-6	土師器高坏	脚部片	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	橙褐色	良好	ナデ
20	49	溝-6	土師器高坏	脚部片	0.5~1.0mmの砂粒を含む	淡茶褐色	良好	ナデ
20	50	溝-6	土師器高坏	括れ部片	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	淡橙褐色	良好	ナデ 小型品
20	51	溝-6	土師器高坏	脚部片	1.0~3.0mmの砂粒を含む、赤色粒子・雲母少量含む	淡橙褐色	良好	ナデ
20	52	溝-6	須恵器坏身	高台部	1.0mmの砂粒を少量含む	淡青灰色	良好	回転ナデ、回転ヘラ削り
20	53	溝-6	須恵器坏身	受部小片	0.3~2.0mmの砂粒を含む	暗青灰色	良好	回転ナデ
20	54	溝-7	土師器高坏	脚部片	0.5~3.0mmの砂粒を含む	橙褐色	良好	ハケ目後ナデ
20	55	溝-7	土師器高坏	脚部片	0.5~1.5mmの砂粒を少量含む	淡橙褐色	やや不良	調整不明
20	56	溝-7	土師器高坏	脚部片	1.0~3.0mmの砂粒を少量含む	淡橙褐色	やや不良	調整不明
20	57	溝-7	土師器高坏	脚部片	1.0~3.0mmの砂粒を含む、赤色粒子少量含む	橙褐色	やや不良	調整不明
20	58	溝-7	土師器甑	把手小片	0.5~3.0mmの砂粒を非常に多く含む	橙褐色	良好	指頭ナデ、内面ヘラ削り
20	59	溝-7	須恵器高坏	脚部片	0.5~3.0mmの砂粒を少量含む	暗茶灰色	良好	回転ナデ
20	60	溝-7	須恵器坏蓋	端部小片	0.5~3.0mmの砂粒を少量含む	灰色	良好	回転ナデ
21	61	溝-7	平瓦	2辺欠	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	淡茶灰色	やや軟質	凸面正格子タタキ 凹面模骨痕、布目
22	62	溝-8	複合口縁壺	完形	1.0~3.0mmの砂粒を含む、雲母を含む	明茶褐色	良好	内外ハケ目、胴内部ナデ
22	63	溝-8	複合口縁壺	口縁部1/4	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む、赤色粒子少量含む	淡黄褐色	良好	ハケ目後ナデ
22	64	溝-8	複合口縁壺	口縁部1/8	0.5~3.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母・角閃石を含む	淡茶褐色	良好	ヨコナデ、指頭押圧痕

挿図	No.	出土遺構	器種	残存度	胎土	色調	焼成	調整および特徴
22	65	溝-8	複合口縁壺	口縁部1/8	0.5~1.0mmの砂粒を含む	白淡褐色	良好	ヨコナデ、指頭押圧痕
22	66	溝-8	複合口縁壺	口縁部1/8	0.5~3.0mmの砂粒を含む	黄褐色	良好	ヨコナデ、ナデ
22	67	溝-8	壺	口縁部1/2	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母を含む	橙褐色	良好	内外ハケ目後ナデ
22	68	溝-8	壺	口縁部1/4	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	淡茶褐色	良好	ヨコナデ、ナデ、丹塗り痕跡
22	69	溝-8	瓢形土器	頸部1/8	0.5~2.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	淡茶褐色	良好	ヨコナデ、ナデ、丹塗り痕跡
22	70	溝-8	複合口縁壺	口縁部1/4	0.5~3.0mmの砂粒を含む、角閃石・雲母・赤色粒子少量含む	淡橙褐色	良好	内面ハケ目、外面ナデ、ヨコナデ
22	71	溝-8	複合口縁壺	口縁部1/8	0.5~2.0mmの砂粒を含む	茶褐色	良好	外面ハケ目 内面指頭押圧痕、ハケ目後ナデ
22	72	溝-8	複合口縁壺	口縁部1/8	0.5~2.0mmの砂粒を多く含む	橙褐色	やや不良	ナデ、ハケ目
22	73	溝-8	複合口縁壺	口縁部1/4	0.5~1.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	淡橙褐色	良好	ハケ目後ナデ
22	74	溝-8	複合口縁壺	口縁部1/8	0.5~1.0mmの砂粒を含む、赤色粒子少量含む	淡黄褐色	良好	ハケ目後ナデ
22	75	溝-8	複合口縁壺	口縁部1/4	0.5~2.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	淡黄褐色	良好	口縁内面指頭押圧痕 外面ハケ目後ナデ
22	76	溝-8	複合口縁壺	口縁部1/3	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	淡橙褐色	良好	ハケ目、ナデ、ヨコナデ
23	77	溝-8 最下層	無頸壺	ほぼ完形	粗砂粒を多く含む、角閃石少量含む	淡黄色	良好	ヨコナデ、ナデ、内外面に煤付着、 内底部に炭化物残る
23	78	溝-8	無頸壺	ほぼ完形	0.5~4.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母少量含む	茶褐色	良好	ハケ目、ヨコナデ
23	79	溝-8	無頸壺	ほぼ完形	1.0~3.0mmの砂粒を少量含む、雲母少量含む	茶灰褐色	良好	内外面ナデ
23	80	溝-8	無頸壺	上半部1/4	0.5~1.0mmの砂粒をやや多く含む	淡茶褐色	良好	ハケ目後ナデ、指頭押圧痕
23	81	溝-8	無頸壺	上半部1/2	0.5~3.0mmの砂粒を多く含む	黄褐色	良好	ナデ、内面指ナデ
23	82	溝-8	無頸壺	口縁部1/2	0.5~5.0mmの砂粒を少量含む	茶褐色	良好	ハケ目後ナデ
23	83	溝-8	壺	胴部1/4	0.5~3.0mmの砂粒を多く含む	黄褐色	良好	外面ハケ目後ナデ、内面ハケ目
23	84	溝-8	直口壺	口縁部1/4	細砂粒を含む	茶黄褐色	良好	内外面ナデ
23	85	溝-8	直口壺	胴部片	粗砂粒を少量含む、金雲母・角閃石・赤色粒子少量含む	淡黄褐色	良好	ヨコナデ、ハケ目
23	86	溝-8	壺	胴部片	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	黄茶褐色	良好	ヘラナデ、ハケ目後ナデ 胴部外面ミガキ状ナデ
23	87	溝-8	壺	底部片	1.0~3.0mmの砂粒を含む	淡橙褐色	良好	ハケ目後ナデ
23	88	溝-8	壺	底部片	0.5~2.0mmの砂粒を多く含む、赤色粒子少量含む	淡茶褐色	良好	ハケ目後ナデ
23	89	溝-8	壺	底部片	粗砂粒を多く含む、赤色粒子少量含む	淡黄褐色	良好	指頭押圧痕、ハケ目後ナデ
23	90	水田覆土	無頸壺	上半部1/4	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	淡黄褐色	やや不良	ハケ目後ナデ、外面煤付着
23	91	水田覆土	無頸壺	上半部	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	淡黄褐色	良好	ハケ目、ナデ
24	92	溝-8	甕	上半部1/6	0.5~5.0mmの砂粒を少量含む	橙褐色	良好	ハケ目、ヘラ削り
24	93	溝-8	甕	上半部1/4	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	暗茶褐色	良好	表面風化、ハケ目痕跡
24	94	溝-8	甕	上半部1/8	0.5~2.0mmの砂粒を含む	淡橙褐色	良好	内外面ナデ、外面煤付着
24	95	溝-8	甕	上半部1/2	1.0~3.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	淡橙褐色	良好	表面風化、ハケ目後ナデか
24	96	溝-8	甕	上半部1/2	0.5~4.0mmの砂粒を含む	淡橙灰色	良好	内外面ハケ目

挿図	No.	出土遺構	器種	残存度	胎土	色調	焼成	調整および特徴
24	97	溝-8	甕	上半部1/6	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	淡褐色	良好	表面風化、ハケ目痕跡
24	98	溝-8	甕	上半部小片	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	淡橙褐色	良好	口縁に凹線状ハケ目ナデ、ハケ目
24	99	溝-8 最下層	甕	上半部1/6	細砂粒を含む、雲母少量含む	淡茶褐色	良好	ハケ目後ナデ、煤付着
24	100	溝-8	甕	上半部1/4	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	灰褐色	良好	外面ハケ目、内面ナデ
24	101	溝-8	甕	上半部1/4	1.0~2.0mmの砂粒をやや多く含む	暗黄褐色	良好	外面ハケ目、内面ナデ煤付着
25	102	溝-8	甕	口縁部1/3	粗砂粒を含む、雲母少量含む	橙褐色	良好	ハケ目後ナデ
25	103	溝-8	甕	口縁部1/7	1.0~4.0mmの砂粒を含む	明橙黄色	良好	ハケ目、ナデ、指頭押圧痕
25	104	溝-8	甕	口縁部1/4	0.5~3.0mmの砂粒を含む	淡褐色	良好	ハケ目、ナデ、指頭押圧痕
25	105	溝-8	甕	口縁部1/8	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	橙褐色	良好	ハケ目後ナデ
25	106	溝-8	甕	口縁部1/6	1.0~3.0mmの砂粒を含む	橙褐色	良好	ハケ目後ナデ、指頭押圧痕
25	107	溝-8	甕	口縁部1/6	0.5~2.0mmの砂粒を多く含む	淡茶褐色	良好	ハケ目後ナデ
25	108	溝-8	甕	口縁部1/4	0.5~2.0mmの砂粒を含む	橙褐色	良好	ハケ目後ナデ
25	109	溝-8	甕	口縁部1/4	0.5~3.0mmの砂粒をやや多く含む、赤色粒子少量含む	淡黄褐色	良好	ナデ、ヨコナデ
26	110	溝-8	甕	口縁部1/4	0.5~4.0mmの砂粒を含む	橙褐色	良好	ヨコナデ、ハケ目後ナデ
26	111	溝-8	甕	口縁部1/6	0.5~2.0mmの砂粒を含む	橙褐色	良好	ヨコナデ、煤付着
26	112	溝-8	甕	口縁部小片	0.5~4.0mmの砂粒を含む	淡褐色	良好	ハケ目、ヨコナデ、煤付着
26	113	溝-8	甕	口縁部小片	0.5~4.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母・角閃石少量含む	淡橙褐色	良好	内面指頭押圧痕、外面ヨコナデ
26	114	溝-8	甕	口縁部小片	0.5~3.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母少量含む	茶灰褐色	良好	内面ハケ目、外面ナデ、ヨコナデ
26	115	溝-8	甕	口縁部小片	0.5~2.0mmの砂粒を含む	黄褐色	良好	ヨコナデ、ナデ、煤付着
26	116	溝-8	甕	口縁部小片	0.5~3.0mmの砂粒を多く含む、雲母少量含む	淡橙褐色	良好	ハケ目、ヘラ削り
26	117	溝-8	甕	口縁部小片	0.5~2.0mmの砂粒を含む、赤色粒子少量含む	淡橙褐色	良好	ヨコナデ、ナデ
26	118	溝-8	甕	口縁部小片	0.5~2.0mmの砂粒を含む	淡黄褐色	良好	ヨコナデ、ナデ
26	119	溝-8	甕	口縁部小片	0.5~3.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	暗茶褐色	良好	ハケ目後ナデ、煤付着
26	120	溝-8	甕	口縁部小片	0.5~2.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	淡茶褐色	良好	ヨコナデ、煤付着
26	121	溝-8	甕	口縁部小片	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む、雲母少量含む	淡茶灰褐色	良好	ハケ目後ナデ
26	122	溝-8	甕	口縁部小片	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	淡茶褐色	良好	表面風化、ナデ
27	123	溝-8	鉢	ほぼ完形	1.5~5.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	淡橙褐色	良好	内外面ハケ目、ヨコナデ
27	124	溝-8	無頸壺	上半部	1.0~2.0mmの砂粒を多く含む	黄茶褐色	良好	ハケ目後ナデ、指頭押圧痕
27	125	溝-8	鉢	上半部	0.5~2.0mmの砂粒を含む	淡褐色	良好	ナデ、ミガキ状ナデ
27	126	溝-8	鉢	口縁部小片	0.5~1.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	黄褐色	良好	ナデ
27	127	溝-8	鉢	径1/4	0.5~3.0mmの砂粒を多く含む	黄褐色	良好	ハケ目
27	128	溝-8	鉢	底部1/4	0.5~1.0mmの砂粒を含む	淡暗褐色	良好	内面ナデ、外面ハケ目

挿図	No.	出土遺構	器種	残存度	胎土	色調	焼成	調整および特徴
27	129	溝-8	鉢	上半部1/5	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	橙茶褐色	良好	内面指ナデ、外面ハケ目
27	130	溝-8	鉢	口縁部1/5	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	淡茶褐色	良好	ナデ
28	131	溝-8	甕	底部片	0.5~1.0mmの砂粒を多く含む、雲母少量含む	茶褐色	良好	ナデ、内面ハケ目
28	132	溝-8	甕	底部片	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	白灰褐色	良好	ハケ目後ナデ、煤付着、部分的に厚く炭化物残る
28	133	溝-8	甕	底部片	0.5~2.0mmの砂粒を含む	淡橙褐色	良好	ハケ目、ナデ
28	134	溝-8	甕	底部1/4	0.5~3.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母少量含む	黒灰褐色	良好	ナデ
28	135	溝-8	甕	底部片	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母少量含む	橙黄褐色	良好	ハケ目、ナデ
28	136	溝-8	甕	底部1/3	0.5mmの砂粒を少量含む、雲母少量含む	茶灰褐色	良好	内面ナデ、外面ハケ目後ナデ
28	137	溝-8	甕	底部片	0.5~2.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	橙褐色	良好	内面ハケ目、外面ハケ目後ナデ
28	138	溝-8	甕	底部片	0.5~2.0mmの砂粒を含む	白褐色	良好	ナデ
28	139	溝-8	甕	底部片	1.0~3.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	淡褐色	良好	ナデ
28	140	溝-8	甕	底部1/2	0.5~2.0mmの砂粒を含む	淡褐色	良好	ハケ目、ナデ
28	141	溝-8	甕	底部1/2	0.5~2.0mmの砂粒を多く含む	橙褐色	良好	ハケ目後ナデ、内面ナデ
28	142	溝-8	甕	底部片	0.5~3.0mmの砂粒をやや多く含む	黄褐色	良好	ハケ目後ナデ、内面ナデ
28	143	溝-8	甕	底部1/4	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母少量含む	淡黄褐色	良好	ハケ目後ナデ、内面ナデ
28	144	溝-8	甕	底部片	0.5~2.0mmの砂粒を多く含む	淡黄褐色	良好	内面指頭押圧痕、ハケ目、外面ナデ
28	137	溝-8	甕	底部片	0.5~3.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母少量含む	淡茶褐色	良好	ハケ目、ナデ
28	146	溝-8	甕	底部1/2	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	淡茶褐色	良好	外面ハケ目、内面ナデ
28	147	溝-8	甕	底部1/6	0.5~2.0mmの砂粒を含む	淡黄褐色	良好	内面ナデ、外面ハケ目後ナデ
28	148	溝-8	甕	底部片	1.0~3.0mmの砂粒を含む	茶褐色	良好	内外面ナデ、内底面指頭押圧痕
28	149	溝-8	甕	底部片	0.5~5.0mmの砂粒を含む	淡褐色	良好	内外面ナデ、内底面指頭押圧痕
28	150	溝-8	甕	底部片	0.5~2.0mmの砂粒を含む	淡橙褐色	良好	外面指ナデ、内面ハケ目
28	151	溝-8	甕	底部片	0.5~5.0mmの砂粒を含む	橙褐色	良好	ナデ、指頭押圧痕
28	152	溝-8	甕	底部片	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母少量含む	茶褐色	良好	外面ハケ目、内面ナデ
29	153	溝-8	高坏	坏部1/3	0.5~1.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	淡橙褐色	良好	ヘラ磨き、ヨコナデ、ナデ
29	154	溝-8	高坏	坏部1/8	0.5~2.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	茶褐色	良好	表面風化、調整不明
29	155	溝-8	高坏	坏部1/8	0.5~3.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母少量含む	灰褐色	良好	外縁部凹線、内面指頭押圧痕 山陰系?
29	156	溝-8	高坏	口縁部小片	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	淡橙褐色	良好	ヨコナデ、暗文状のヘラ磨き
29	157	溝-8	高坏	口縁部小片	0.5~3.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母少量含む	黄褐色	良好	ヘラナデ、ヨコナデ
29	158	溝-8	高坏	脚部片	0.5~2.0mmの砂粒をわずかに含む、雲母・角閃石少量含む	淡茶褐色	良好	ヘラ磨き痕跡、ハケ目 外面丹塗り
29	159	溝-8	高坏	脚部片	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	橙褐色	良好	表面風化調整不明、丹塗り痕跡
29	160	溝-8	高坏	脚部片	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母少量含む	橙褐色	良好	ナデ、ヘラ削り

挿図	No.	出土遺構	器種	残存度	胎土	色調	焼成	調整および特徴
29	161	溝-8	高坏	脚部片	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	淡黄褐色	良好	ナデ
29	162	溝-8	高坏	脚部片	0.5~2.0mmの砂粒を含む	淡褐色	良好	ヘラ磨き、ナデ
29	163	溝-8	高坏	脚部片	0.5~3.0mmの砂粒を含む	淡黄褐色	良好	外面ナデ、内面シボリ痕
29	164	溝-8	高坏	脚部片	0.5~3.0mmの砂粒を多く含む	淡橙褐色	良好	外面ヘラナデ
29	165	溝-8	高坏	脚部片	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	白茶褐色	良好	ナデ、ミガキ状ナデ 極わずかに丹塗り痕跡
29	166	溝-8	高坏	脚部片	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む、雲母少量含む	灰褐色	良好	表面風化、外面ハケ目後ナデ？ 内面上部シボリ痕
29	167	溝-8	高坏	脚部片	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む、雲母少量含む	淡茶褐色	良好	ハケ目、ナデ
30	168	溝-8	器台	ほぼ完形	0.5~4.0mmの砂粒を非常に多く含む	淡白茶褐色	良好	外面ハケ目
30	169	溝-8	器台	上半部	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	淡茶褐色	良好	外面ハケ目 内面指頭押圧痕、指ナデ
30	170	溝-8	器台	上半部	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	黄茶褐色	良好	外面ハケ目、内面指ナデ
30	171	溝-8	器台	ほぼ完形	1.0~3.0mmの砂粒を含む	茶褐色	良好	指頭押圧痕、指ナデ、ナデ
30	172	溝-8	器台	上半部2/3	0.5~2.0mmの砂粒を多く含む、雲母少量含む	橙褐色	良好	ナデ、指頭押圧痕、指ナデ
30	173	溝-8	器台	ほぼ完形	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む、雲母少量含む	茶黄褐色	良好	ナデ、タタキ痕
30	174	溝-8	器台	上半部1/4	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む、赤色粒子少量含む	淡橙褐色	良好	外面ハケ目、内面指ナデ
30	175	溝-8	器台	上半部1/4	0.5~1.0mmの砂粒を含む、雲母少量含む	黄褐色	良好	外面ハケ目後ナデ 内面指頭押圧痕
30	176	溝-8	器台	脚部1/4	0.5~3.0mmの砂粒を含む	淡橙褐色	良好	ナデ、指頭押圧痕
30	177	溝-8	支脚	完形	0.5~2.0mmの砂粒を含む	淡黄褐色	良好	外面ナデ、内面ハケ目
30	178	溝-8	支脚	上半部	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	濃乳白色	不良	表面風化、調整不明
30	179	溝-8	支脚	上半部	0.5~2.0mmの砂粒を含む	淡黄褐色	良好	ハケ目、ナデ、指頭押圧痕
30	180	溝-8	脚台付土器	脚部片	0.5~3.0mmの砂粒を含む	淡橙褐色	良好	ナデ、ハケ目、指ナデ
30	181	溝-8	脚台付土器	脚部片	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む、赤色粒子少量含む	淡黄褐色	良好	ヨコナデ
30	182	溝-8	手捏支脚	ほぼ完形	0.5~4.0mmの砂粒をやや多く含む	茶褐色	良好	表面風化、調整不明
30	183	溝-8	手捏鉢？	完形	0.5~2.0mmの砂粒を含む	淡橙褐色	良好	指頭押圧痕
30	184	溝-8	手捏鉢？	口縁部1/3	0.5~1.0mmの砂粒を含む	淡茶褐色	良好	表面風化、指頭押圧痕
30	185	溝-8	手捏鉢？	口縁部1/3	1.0mmの砂粒を少量含む	淡茶灰褐色	良好	指ナデ、ヘラ削り
30	186	溝-8	手捏鉢？	完形	1.0~3.0mmの砂粒を多く含む	黄褐色	良好	表面風化、調整不明
30	187	溝-8	蓋	頂部	0.5~2.0mmの砂粒を含む	淡黄褐色	良好	ナデ、ハケ目
30	188	溝-8	蓋	ほぼ完形	0.5~2.0mmの砂粒を含む	黄褐色	良好	ナデ
30	189	溝-8	甕	頸部小片	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	橙褐色	良好	ハケ目、ヨコナデ 巴形の浮文を付す
30	190	溝-8	壺	小片	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	淡橙褐色	普通	径21~22mmの円盤状の浮文を付す ハケ目、ナデ
30	191	溝-8	壺	小片	粗砂粒をやや多く含む	淡橙褐色	普通	径50mmの円盤状の浮文を付す ハケ目、ナデ
31	192	堤状遺構	壺	口縁部1/4	1.0~4.0mmの砂粒をやや多く含む	橙褐色	やや不良	表面風化、調整不明 丹塗り痕跡

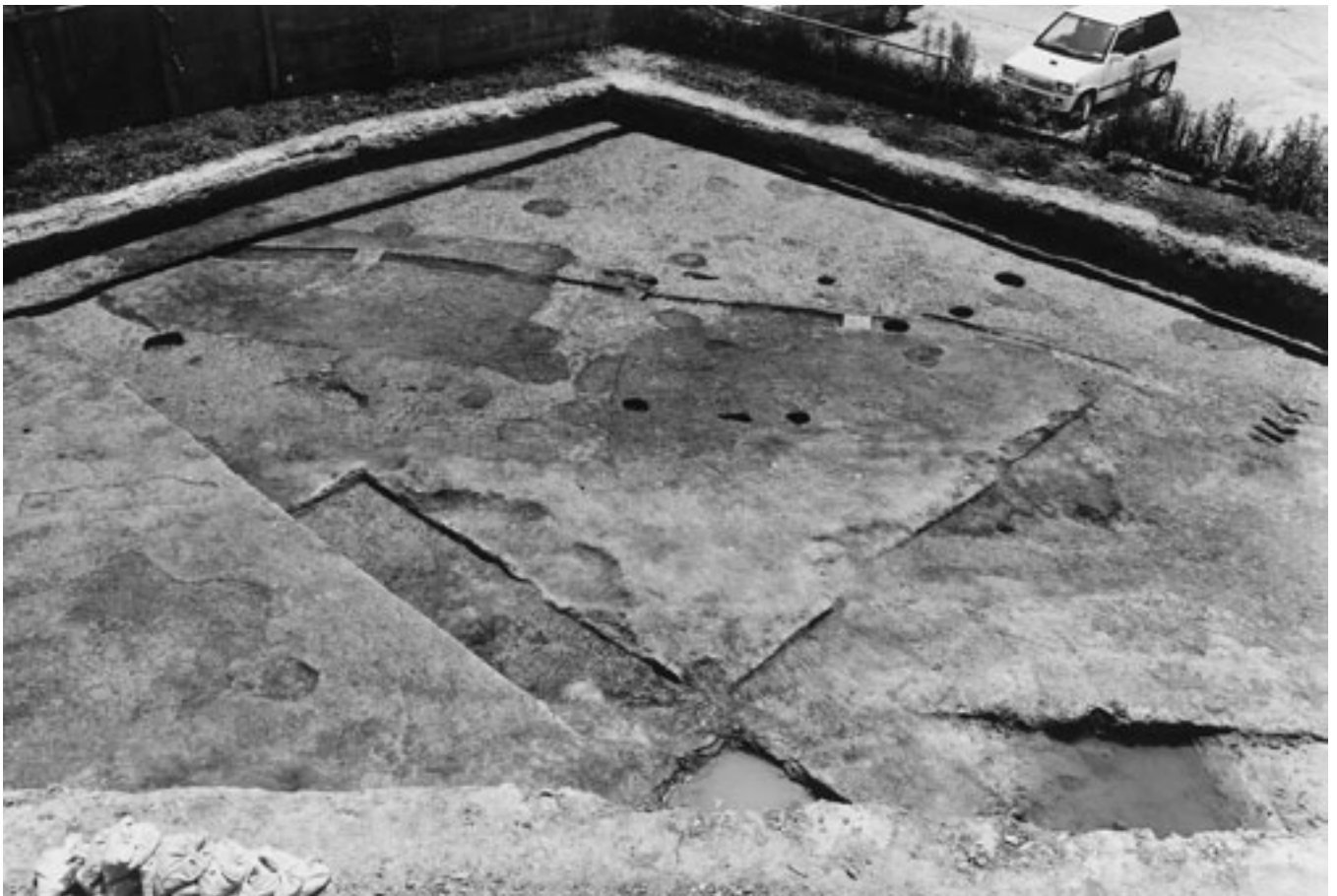
挿図	No.	出土遺構	器種	残存度	胎土	色調	焼成	調整および特徴
31	193	堤状遺構	長頸壺	上半部	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	黄褐色	良好	表面風化、調整不明 丹塗り痕跡
31	194	堤状遺構	壺	胴部1/4	0.5~1.0mmの砂粒を含む	赤橙褐色	良好	ミガキ状ナデ、ナデ、シボリ痕 丹塗り
31	195	堤状遺構	壺	胴部1/4	1.0~2.0mmの砂粒を含む	橙褐色	良好	ハケ目後ナデ、ヘラ磨きの暗文 ヘラ削り、指ナデ、丹塗り
31	196	堤状遺構	無頸壺	上半部1/4	1.0~4.0mmの砂粒を含む	橙褐色	良好	ヨコナデ、ハケ目後ナデ 丹塗り痕跡
31	197	堤状遺構	無頸壺	上半部1/5	1.0~4.0mmの砂粒を含む、角閃 石少量含む	橙褐色	良好	ヘラ磨き、内面ハケ目後ナデ 丹塗り痕跡
31	198	堤状遺構	壺?	口縁部小片	精良	黄灰白色	良好	丹塗り、上縁に装飾の接合痕 ヨコナデ
31	199	堤状遺構	壺	底部片	1.0~3.0mmの砂粒を含む	淡黄褐色	良好	ナデ、黒塗り
31	200	堤状遺構	甕	上半部1/4	1.0~3.0mmの砂粒を少量含む	淡茶褐色	良好	外面ハケ目、ヨコナデ、内面ナデ
31	201	堤状遺構	甕	上半部	1.0~2.0mmの砂粒を含む	黄褐色	良好	ハケ目後ナデ、煤付着
31	202	堤状遺構	甕	口縁部1/6	1.0~2.0mmの砂粒を含む	黄褐色	良好	ハケ目、ヘラナデ、煤付着
31	203	堤状遺構	甕	口縁部1/8	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含 む、雲母少量含む	黒褐色	良好	ナデ、黒塗り?
31	204	堤状遺構	甕	上半部1/5	1.0mmの砂粒を少量含む	淡黄褐色	良好	ヘラナデ、ハケ目
31	205	堤状遺構	甕	口縁部小片	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む、 雲母少量含む	橙褐色	良好	丹塗り、樽形土器 ナデ、ヨコナデ
32	206	堤状遺構	甕	口縁部1/6	0.5~3.0mmの砂粒をやや多く含 む、雲母少量含む	暗茶褐色	良好	ハケ目、ナデ、黒塗り?
32	207	堤状遺構	甕	上半部1/4	0.5~3.0mmの砂粒を多く含む、 雲母少量含む	淡橙褐色	良好	表面風化、調整不明
32	208	堤状遺構	甕	底部1/6	1.0~3.0mmの砂粒を含む	淡茶褐色	良好	内面ナデ、外面ハケ目
32	209	堤状遺構	甕	底部1/2	0.5~1.0mmの砂粒を含む、雲母 少量含む	茶褐色	良好	内面ナデ、外面ハケ目
32	210	堤状遺構	甕	底部1/4	1.0~3.0mmの砂粒を含む	淡黄褐色	良好	内面ナデ、指頭押圧痕 外面ハケ目、煤付着
32	211	堤状遺構	脚付壺	脚部1/8	0.5mm程度の砂粒を少量含む	黄橙褐色	良好	ナデ、丹塗り
32	212	堤状遺構	高坏	脚部片	1.0~5.0mmの砂粒を含む	淡茶白色	良好	ヘラ磨き、ナデ、丹塗り痕跡
32	213	堤状遺構	高坏	脚部片	1.0~2.0mmの砂粒を多く含む、 角閃石・雲母少量含む	淡橙褐色	良好	表面風化、調整不明
32	214	堤状遺構	高坏	脚部片	1.0~5.0mmの砂粒を含む	淡橙褐色	良好	ヘラ磨き、ナデ
32	215	堤状遺構	器台	ほぼ完形	1.0~3.0mmの砂粒を含む	暗茶褐色	良好	指頭押圧痕、ナデ
32	216	堤状遺構	器台	ほぼ完形	1.0~3.0mmの砂粒を多く含む	褐色	普通	指頭押圧痕、ナデ
32	217	堤状遺構	器台	上半部	0.5~4.0mmの砂粒を多く含む、 雲母少量含む	灰茶褐色	良好	指頭押圧痕、表面風化
32	218	堤状遺構	器台	脚部片	1.0~3.0mmの砂粒を多く含む、 雲母少量含む	橙茶褐色	良好	指頭押圧痕、ナデ、表面風化
32	219	堤状遺構	手握 甕	残径3/4	0.5~3.0mmの砂粒を少量含む、 雲母少量含む	淡茶褐色	良好	ナデ、ヘラナデ
32	220	堤状遺構 下部小溝	無頸壺	上半部1/6	0.5~1.0mmの砂粒を含む	橙褐色	良好	ナデ、ヨコナデ、丹塗り
33	221	溝-8 検出時	壺	口縁部1/6	0.5~1.5mmの砂粒をやや多く含 む、雲母少量含む	橙褐色	良好	丹塗り痕跡、上縁に浮文 ヨコナデ
33	222	3号住居 検出時	甕	口縁部1/5	0.5~2.0mmの砂粒を多く含む	暗茶褐色	普通	表面風化、調整不明
33	223	溝-8 検出時	器台	完形	0.5~4.0mmの砂粒を多く含む	橙褐色	普通	表面風化、調整不明
33	224	表採	手握 甕	底部片	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	黄茶褐色	良好	内面指頭押圧痕、外面ナデ

挿図	No.	出土遺構	器種	残存度	胎土	色調	焼成	調整および特徴
34	225	溝-8 検出時	土師器 甌?	把手小片	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	黄褐色	良好	指ナデ、ヘラ削り
34	226	溝-8 検出時	須恵器 坏蓋	口縁部1/6	0.5~2.0mmの砂粒を含む	青灰色	良好	ヘラ削り、回転ナデ
35	227	包含層	土師器 高坏	脚部片	0.5~1.5mmの砂粒をやや多く含む	淡橙褐色	やや不良	表面風化、調整不明
35	228	包含層	須恵器 高坏?	脚部小片	0.5mm程度の砂粒を少量含む、 堅緻	青灰褐色	良好	回転ナデ
35	229	包含層	須恵器 壺	底部片	0.5mmの砂粒を少量含む、緻密	青灰褐色	良好	カキ目、手持ちヘラ削り、回転ナデ、ヘラ記号あり
35	230	包含層	須恵器 坏身	残径1/2	0.5~1.5mmの砂粒をやや多く含む	青灰色	良好	回転ナデ、ナデ
35	231	包含層	須恵器 坏身	残径1/2	0.5~1.0mmの砂粒をごく僅か含む	濃青灰色	良好	回転ナデ、ナデ
35	232	溝-8 検出時	須恵器 坏身	完形	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	橙茶褐色	やや不良	回転ナデ、ナデ
35	233	包含層	須恵器 坏身	底部1/4	0.5mmの砂粒を少量含む	青灰褐色	良好	回転ナデ、ナデ
35	234	溝-8 検出時	須恵器 坏身	底部1/2	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	青灰褐色	良好	回転ナデ、ナデ ヘラ記号あり
35	235	包含層	白磁碗	口縁部小片	0.5mm程度の砂粒を少量含む	灰白色	良好	
36	236	溝-8 検出時	須恵器 甕	胴部1/3	0.5mmの砂粒を少量含む、精緻	暗青灰色	良好	外面正格子、内面青海波タタキ
37	237	溝-8	土弾	完形	0.5~1.0mmの砂粒を少量含む	淡橙褐色	良好	球形
37	238	溝-5	土弾	残径2/3	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む	淡橙褐色	良好	紡錘形
37	239	溝-8	土弾	完形	0.5mmの砂粒を少量含む	淡茶褐色	良好	紡錘形
37	240	溝-8	土錘	完形	0.5mmの砂粒を少量含む、精良	淡茶褐色	良好	
37	241	溝-8	不明	不明	0.5~1.0mmの砂粒を多く含む	黄褐色	良好	指頭押圧痕、指ナデ
37	242	溝-8	不明	不明	0.5~2.0mmの砂粒をやや多く含む	暗茶灰褐色	良好	
37	243	溝-8	匙形 土製品	把手小片	0.5~1.0mmの砂粒をやや多く含む	暗茶褐色	良好	指頭押圧痕、指ナデ
37	244	溝-8	匙形 土製品	把手小片	0.5~3.0mmの砂粒を多く含む	淡橙褐色	良好	指頭押圧痕、指ナデ
37	245	水田覆土	環状 土製品	ほぼ完形	1.0mmの砂粒を少量含む	赤褐色	良好	指頭押圧痕、指ナデ
37	246	水田覆土	匙形 土製品	把手小片	0.5~2.0mmの砂粒を少量含む、 雲母少量含む	暗茶褐色	良好	指頭押圧痕、指ナデ

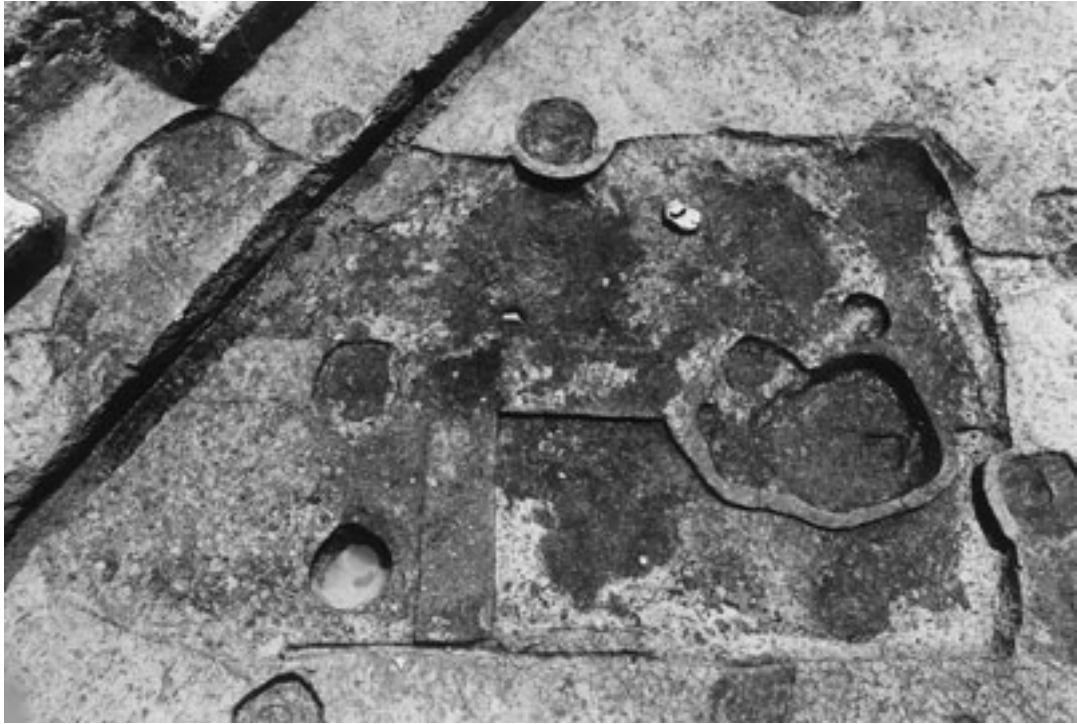
圖 版



(1) 調査区全景 (反転前)



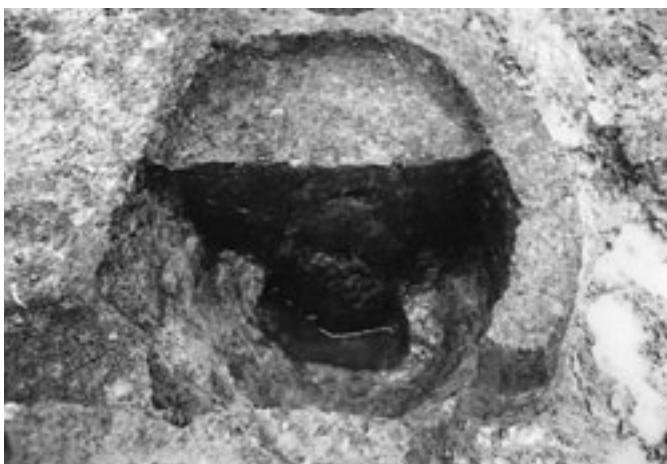
(2) 表土除去時溝状遺構検出状況 (北から)



(1) 1号住居跡（北から）



(2) 1号住居跡完掘状況（北から）



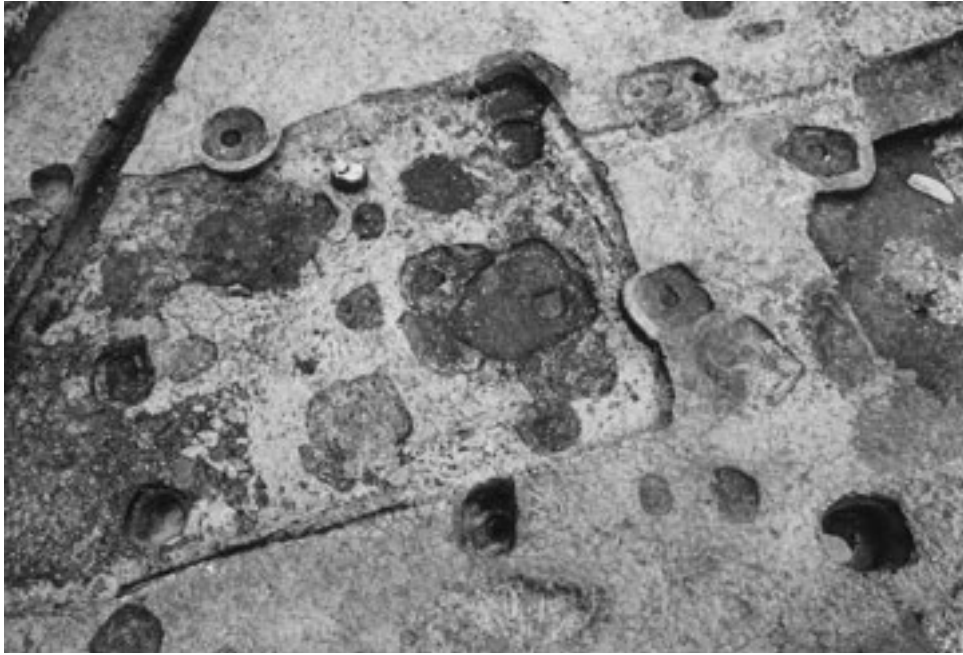
(3) 1号住居跡P-1柱痕検出状況



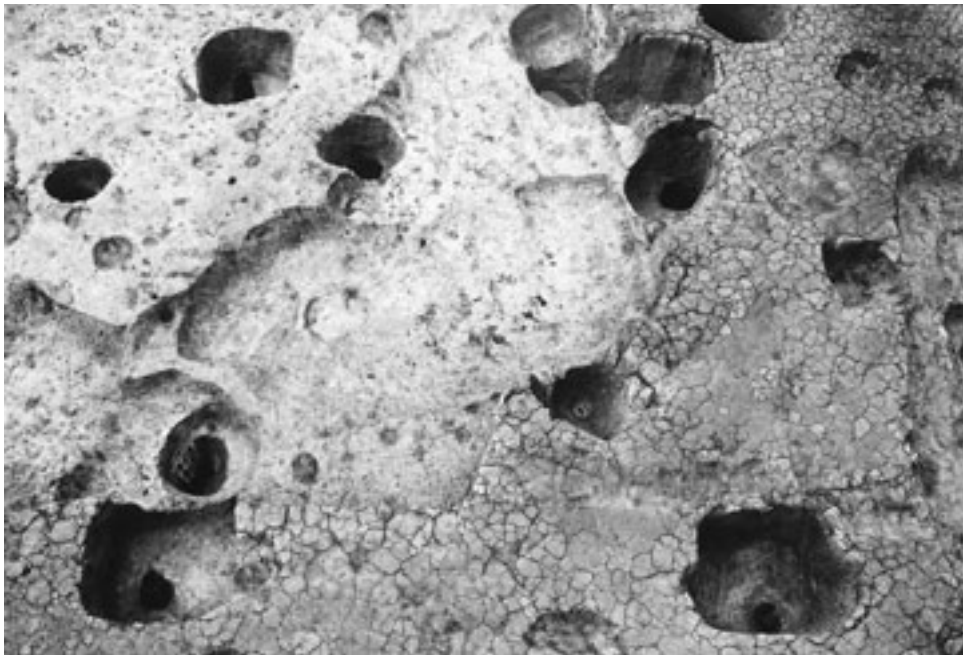
(1) 2号住居跡 (南から)



(2) 2号住居跡完掘状態 (南から)



(1) 1号掘立柱建物跡（北東から）



(2) 3号掘立柱建物跡（南から）



(3) 3号掘立柱建物跡P-3土層断面



(4) 1号土壌（北東から）



(1) 拡張部調査区全景
(西から)



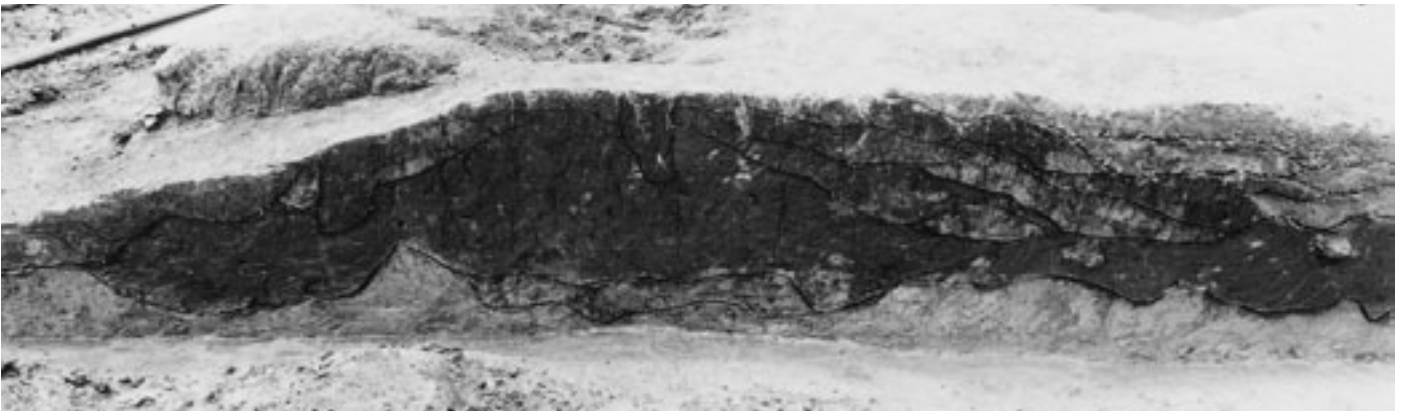
(2) 拡張部調査区全景
(東から)



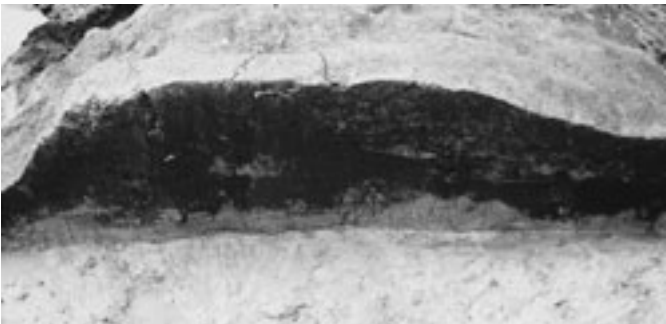
(3) 8号溝埋没状況
土層断面 ①



(1) 8号沟埋没状况土层断面 ②



(2) 堤状遺構・水田埋没状况土层断面



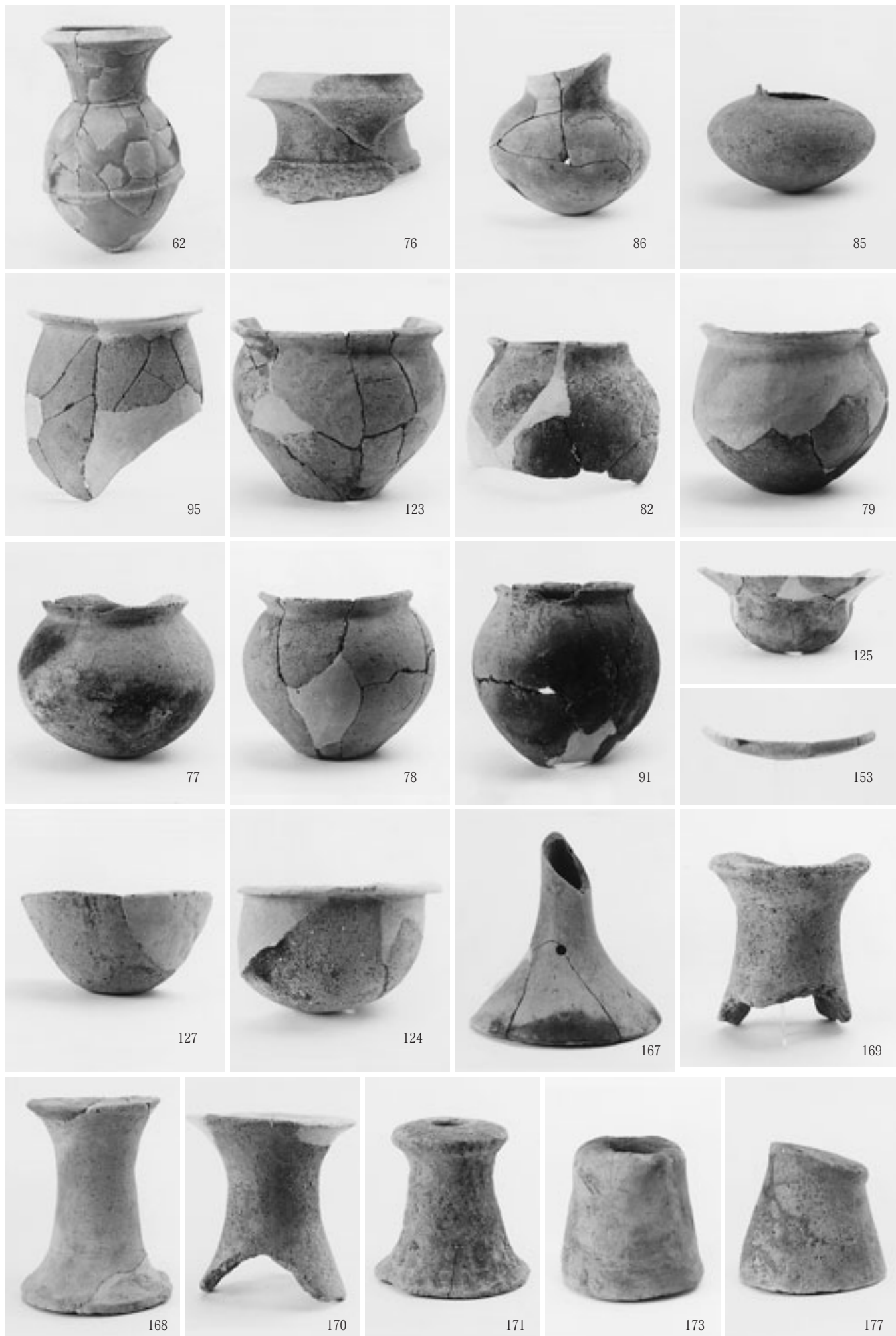
(3) 堤状遺構土层断面 ①



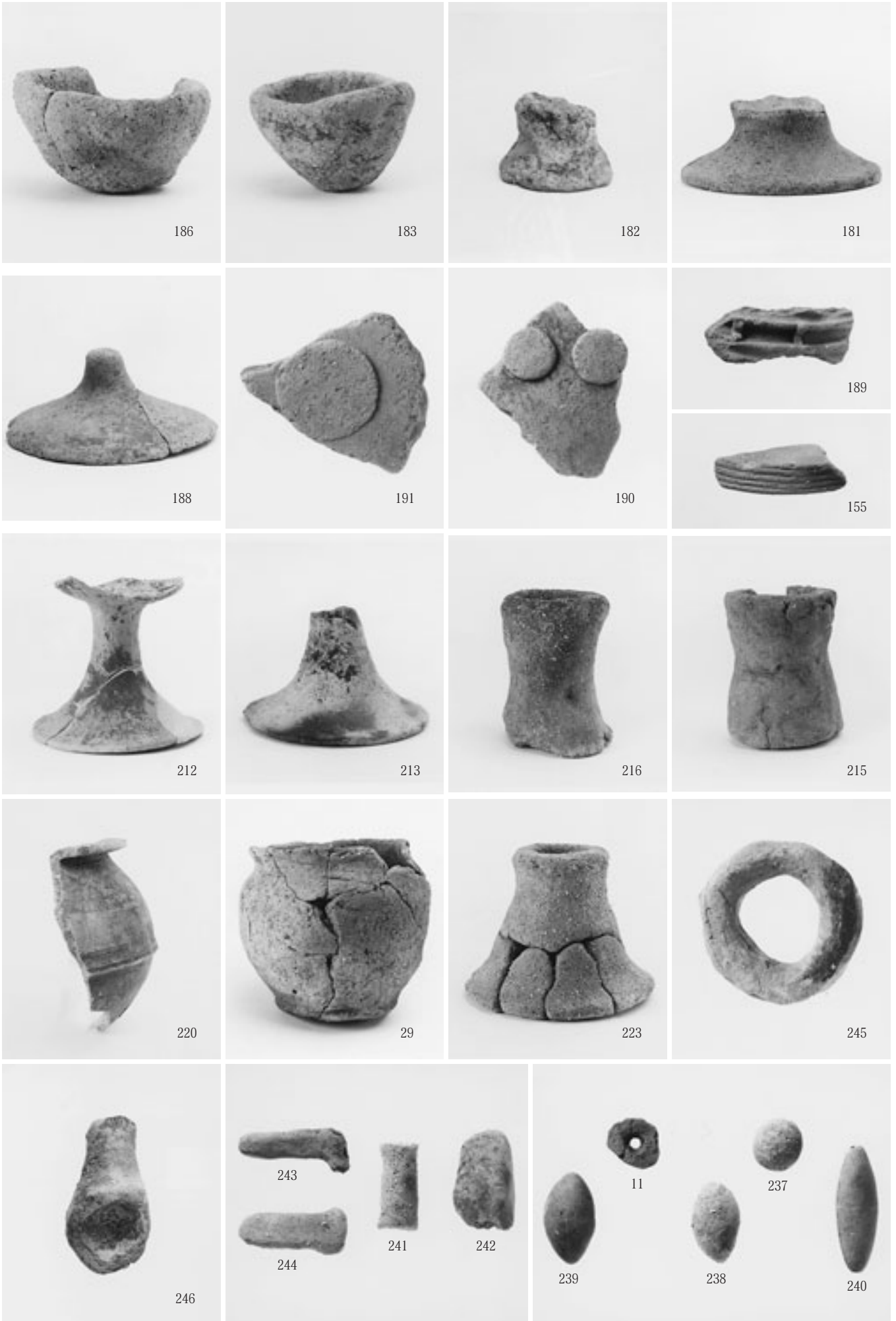
(4) 堤状遺構土层断面 ②



(5) 堤状遺構土层断面 ③

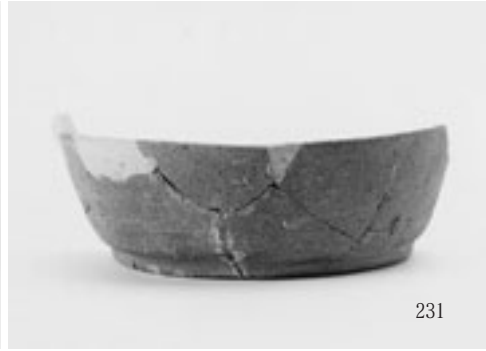


弥生土器





59



231



61



230



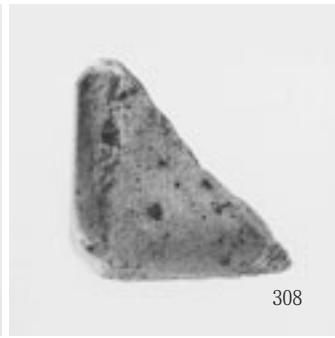
232



307



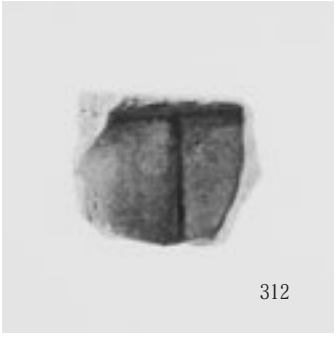
309



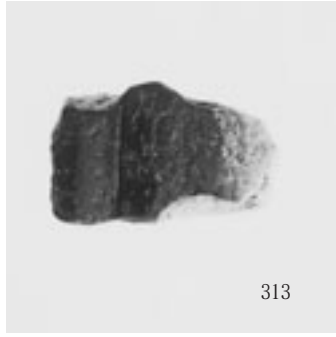
308



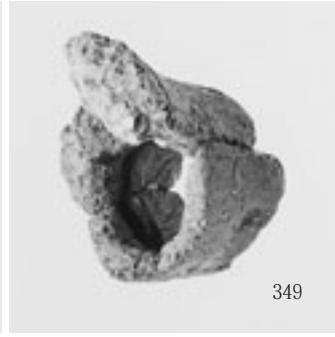
314



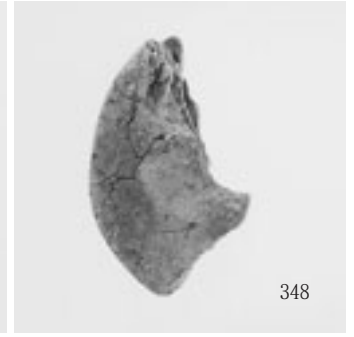
312



313



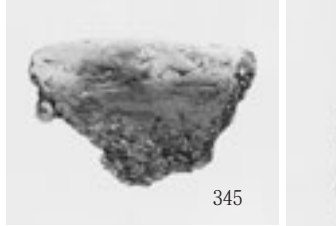
349



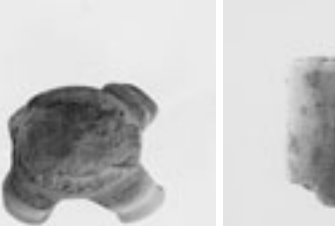
348



339



345



315



316



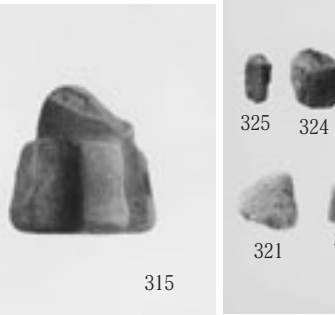
350



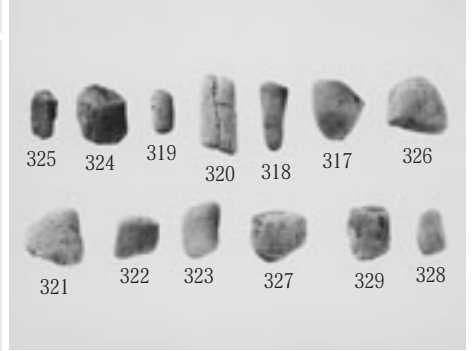
343



332

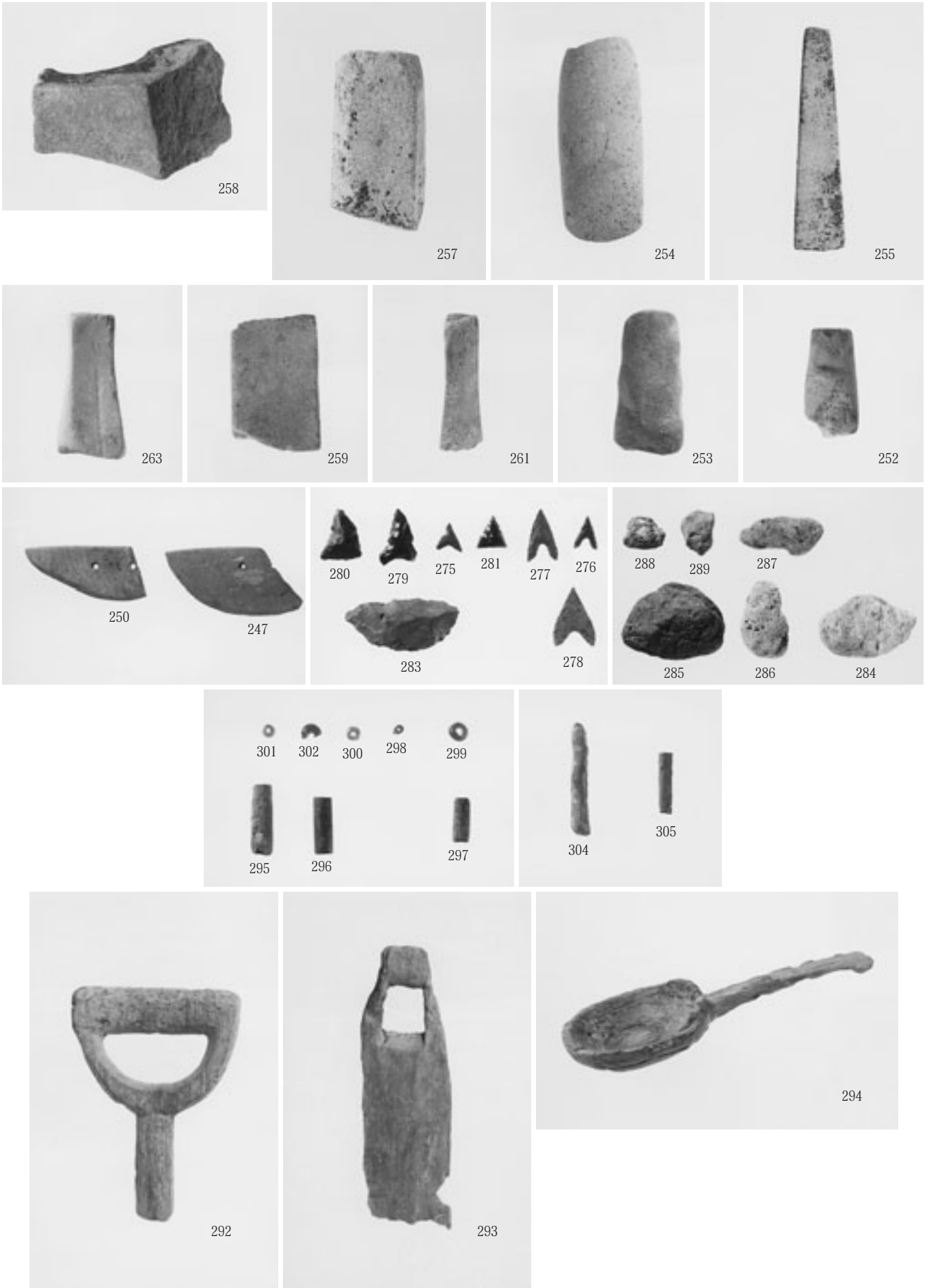


315



325 324 319 320 318 317 326
321 322 323 327 329 328

図版10



砥石・石器・ガラス製品・青銅器・木製品

報 告 書 抄 録

ふりがな	すぐおばなまちいせき							
書名	須玖尾花町遺跡							
副書名	福岡県春日市大和町所在の遺跡							
巻次								
シリーズ名	春日市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第51集							
編著者名	吉田佳広							
編集機関	春日市教育委員会							
所在地	〒816-0804 福岡県春日市原町3丁目1番地5 TEL 092-584-1111							
発行年月日	西暦 2008年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すぐおばなまち 須玖尾花町 遺跡	ふくおかけんかすがしやまとまち 福岡県春日市大和町 5丁目5番	40218		33° 32' 26"	130° 27' 7"	1992.5.28 ↷ 1992.8.21	410	共同住宅 建設に伴 う緊急発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
須玖尾花町 遺跡	集落 生産遺跡	弥生	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝 堤状遺構 水田		青銅器鋳型 中子 取瓶 弥生土器		丘陵際の集落と低地 の水田が直線的な溝 で区画される。当地 の南西に後期の青銅 器工房が存在する可 能性が高い。	

須玖尾花町遺跡

春日市文化財調査報告書
第51集

平成20年3月31日

発行 春日市教育委員会
福岡県春日市原町3丁目1番地5
印刷 山口印刷株式会社
伊万里市二里町大里乙3617-5